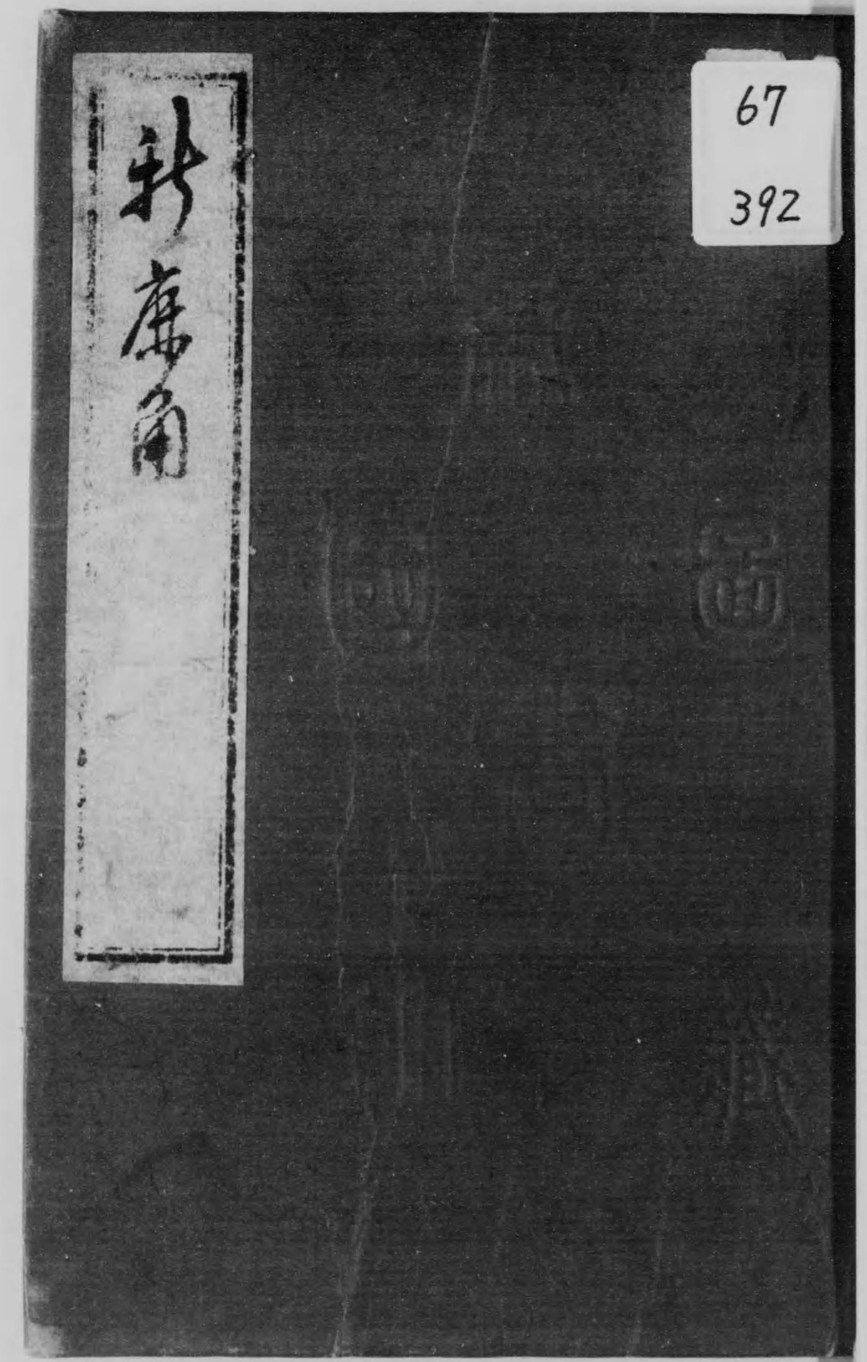


始

流水

67-392

青年乃鹿角社編纂

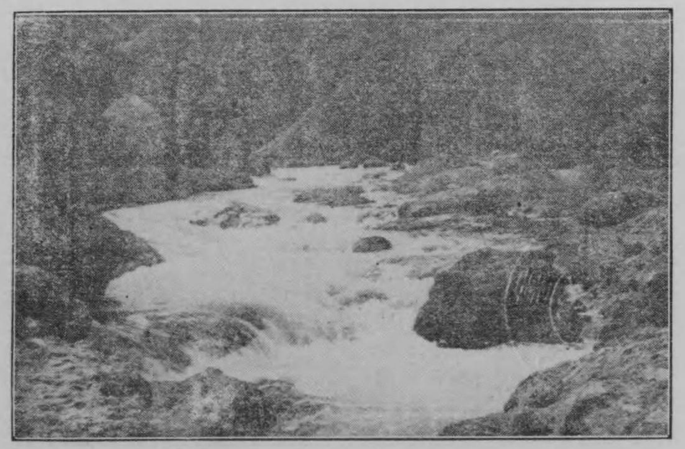
新鹿角

大正
11. 11. 22
内交

十和田名勝　尾上の崎

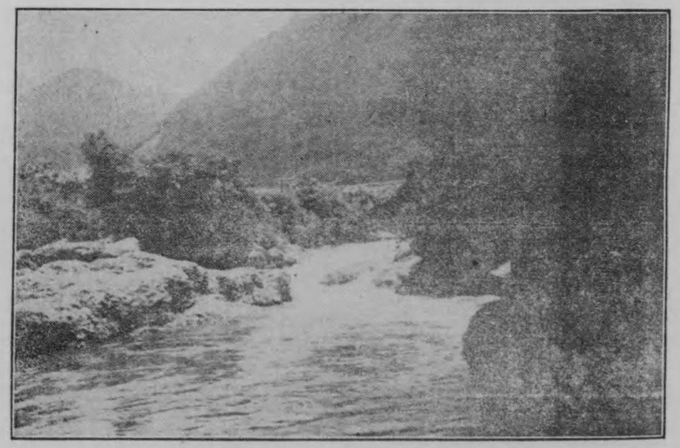
十和田名勝　鐙島

十和田名勝　鵜の島

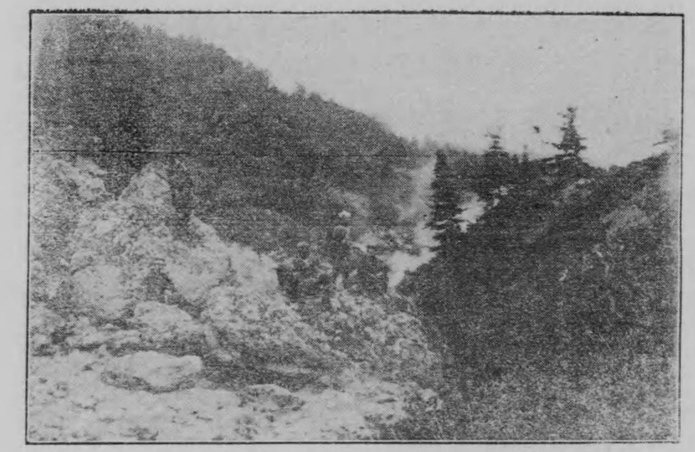


湯瀬溫泉附近名勝　大瀧の奔湍

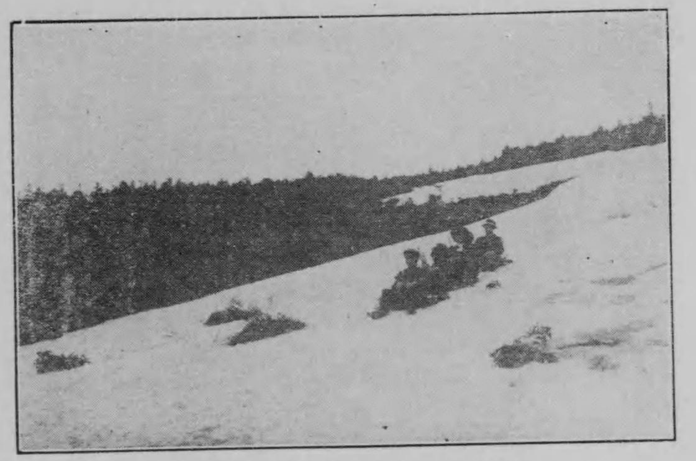
湯瀬溫泉附近名勝　粕川の清流



湯瀬溫泉附近名勝　前面の巒山

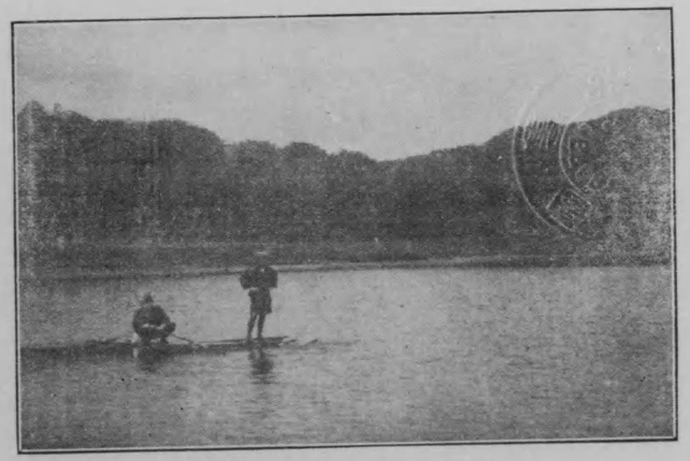


八幡平の絶景　蒸　温　泉　附　近

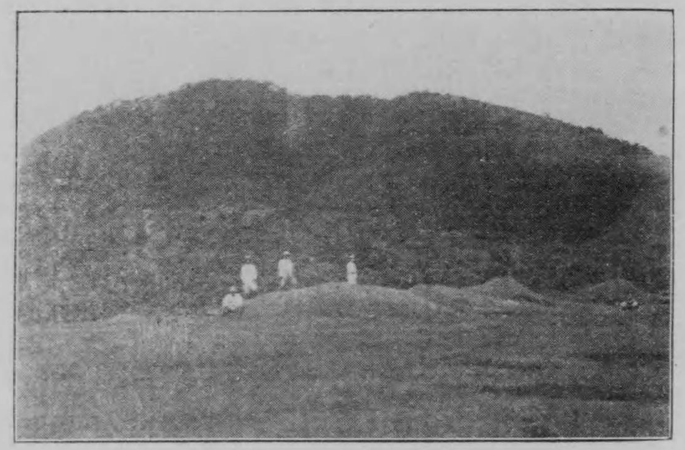


八幡平の絶景　大　雪　谿　（六月下旬）

白　蛇　沼

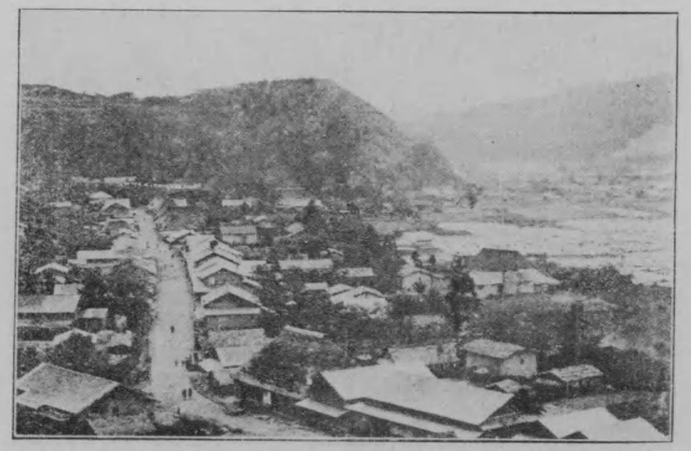


八幡平の絶景　大　沼　の　景



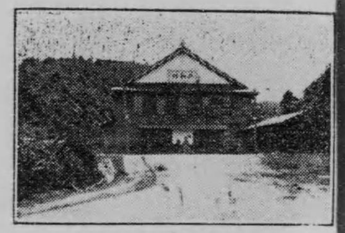
噴泉塔

櫻山公園



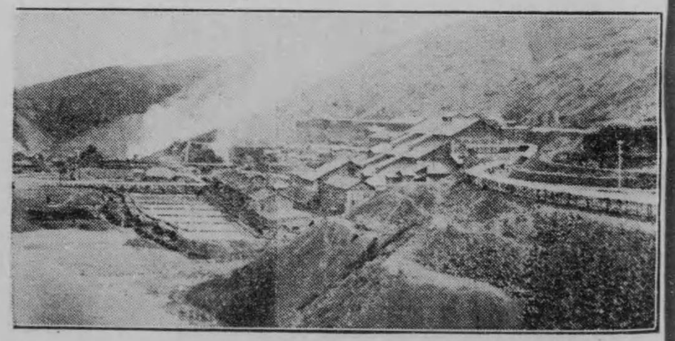
大湯温泉全景

塚木錦

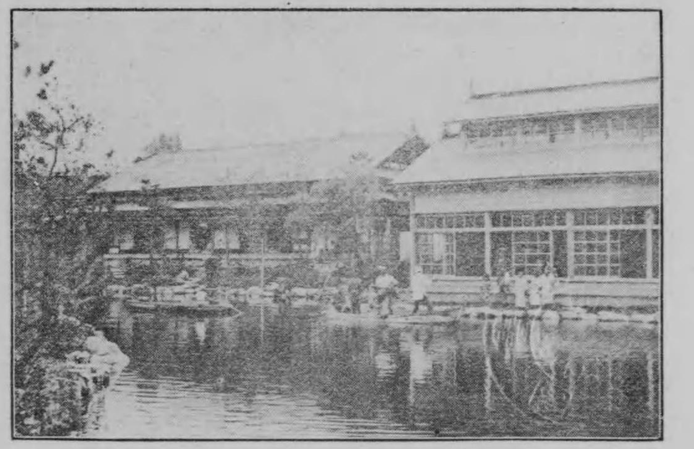


館和共山鑛澤去尾

景の内坑山鑛澤去尾

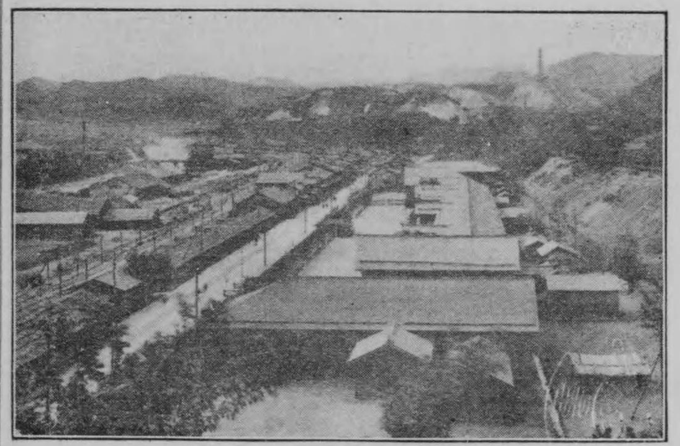


景全山鑛澤去尾

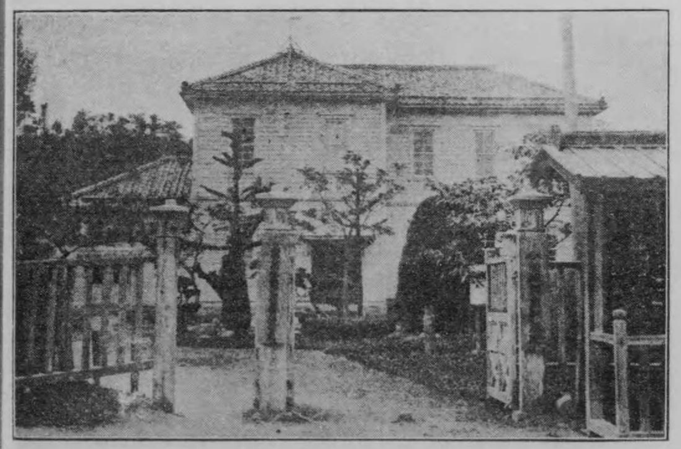


大湯ホテル

瀧　　中



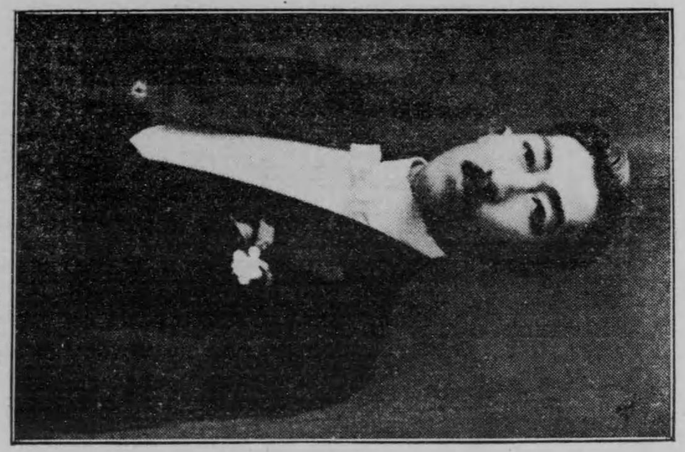
小坂鑛山



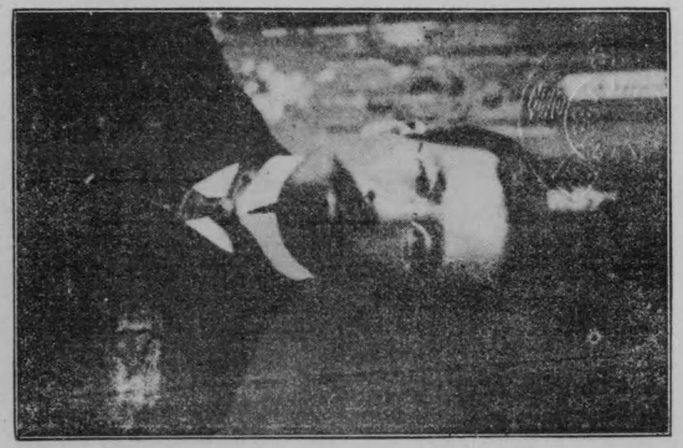
鹿角郡役所

氏瀬八田石爵男

氏佐藤潮雄内主博士文



氏助爲西小長郡角鹿



氏治竹村三

鹿角を祝して、余の感想を述ぶ

何とか川の流に沿ふて、長い山路を登りつめてこゝに來私が、始めて確氷峠から信州に行つた時に頭腦に浮べた、想像の復習のやうなことをした

それは此地方の地理や、歴史や、傳說やを超越した、根も葉もない想像であつたが、とにかくそれは、かういふのであつた!!

幾千年か、幾萬年かの昔に、山麓に祖先傳來の沃土を耕し續けて居た、住民の群が、そこを捨て、遙々と此の山上の高原に、辿つて來たのは、一体何の爲であつたらうか? 優强群に追ひつめられての果か? 奴隷の境涯に甘んずるに堪えなかつたためか?

何と云ふ生に對する執着!

何と云ふ自由に對する憧憬!

「行けば木の中、萱の中」人の征服から、逃れてそれから、自然に對する闘爭の連續! それは彼等が運命ではなかつたか? 彼等が此の高原を開拓して、そこに樂天地を築き上げてから、始めて「高い山から、朝日さす」……と大歡喜の聲を上げた迄には、幾ばくの代が移り變つたことであらう

そして幾代も、幾代もの人々は、彼等のその努力の最後の勝利を見ないで、永久に世を去つたのでなかつたらうか? かうした空想に浸りながら、私はそれらの不幸にして多幸なる人々の生活のうちに、現代に奮闘しつゝある、私たち自身の運命の姿を見出さうとした。

一九二二、八、二七

（花輪講演會の日）

大山郁夫

はしがきに代へて

大正十年六月「青年之鹿角社」同人が、郡案内「鹿角」と編纂致しまして發行の運びとなりました、が僅か短日月の間に於ける努力も自然其處に物足りない遺憾が、多かつたのであります。

從つて今一回、資料の蒐集から、字句文章の洗錬推敲、等に迄稿を改め、增補訂正の希望をひそかに有して居りましたのです。

殊には天下の絶景として十和田の勝を有し、小坂、尾去澤其他多くの鑛山の富を享けても居ります、しかしそれ等のことは普く皆知られ盡して居るだけ、遊覽、觀客が多くなり、案内記も必要なものになつて來るのであります。

產業敢て鑛山のみではなく、勝景又十和田湖に限つたものでもありません。

幾多の神秘をもつて掩はれて居る、八幡平の高原の如き、湯瀨溫泉の翠巒重疊の姿、米代川の岩に激する奔濤は、恰かも寢覺の床か、耶馬溪かと、實に行く人の目を驚かしめたものであります。

本書に藏めたる所、先づ郡案内使命の一端を果し得るとせば同人望外の光榮でなければなりません。

本書編輯に際し、川村蕭君專ら公務の餘暇を割いて此任に當り宮城佐次郎、小田島德藏、村山榮司、關威・關村幸次郎の諸君又熱心に後援されましたことを、記念の爲記し度いと思ひます。

大正十一年十一月五日

青年之鹿角編輯部　代表　大里周藏

「鹿角」目次

□ 總說……沿革……位置……地勢……
□ 交通……鐵道……縣道……交通機關……
□ 產業の鹿角……農業……園藝……養蠶……畜產……林業……工業……統計……
□ 鑛業地としての鹿角……尾去澤と……小坂……
□ 鹿角の特產……古代紫絞……茜染……鹿角りんご……マルメロと其罐詰……あけび蔓細工……花輪の柳行李……鐵泉湯の花……鳴き鶏本場としての鹿角……鹿角の萬年青……
□ 鹿角溫泉巡り……大湯……湯瀨……フケ其他の溫泉……
□ 傳說の鹿角……鹿角の國を懷ふの歌……石川啄木……十和田神話八郎太郎……ダンブリ長者物語……大日堂と吉祥院……大銀杏の由來……謠曲物語「戀の錦木塚」……鹿角の國を懷ふの歌……東北風景と十和田湖……地理の十和田……史上の十和田……
□ 神秘幽邃の十和湖案內……緒言……十和田道路と交通機關……湖畔の宿舍と和井內ホテル十和田湖と和井內貞行翁……附鱒の養殖と其經路……十和田湖上の勝景……知られざりし十和田湖の半面……十和田遊覽の時期……十和田と銘產……
□ 奥羽アルプスの奥秘境八幡平……二縣五郡に跨る大高原……國立公園候補地としての八幡平……

……八幡平の王樣阿部藤助氏……登山の順路……谷内と永田發電所……熊澤不動岩と……

……坂比平の石井翁……燒山口……石仮戸口……八幡平登り……曙口（歸路）……

□ 鹿角郡内巡り……（町村の巻）……花輪町……尾去澤村……曙村……宮川村……柴平村……鎌木村……

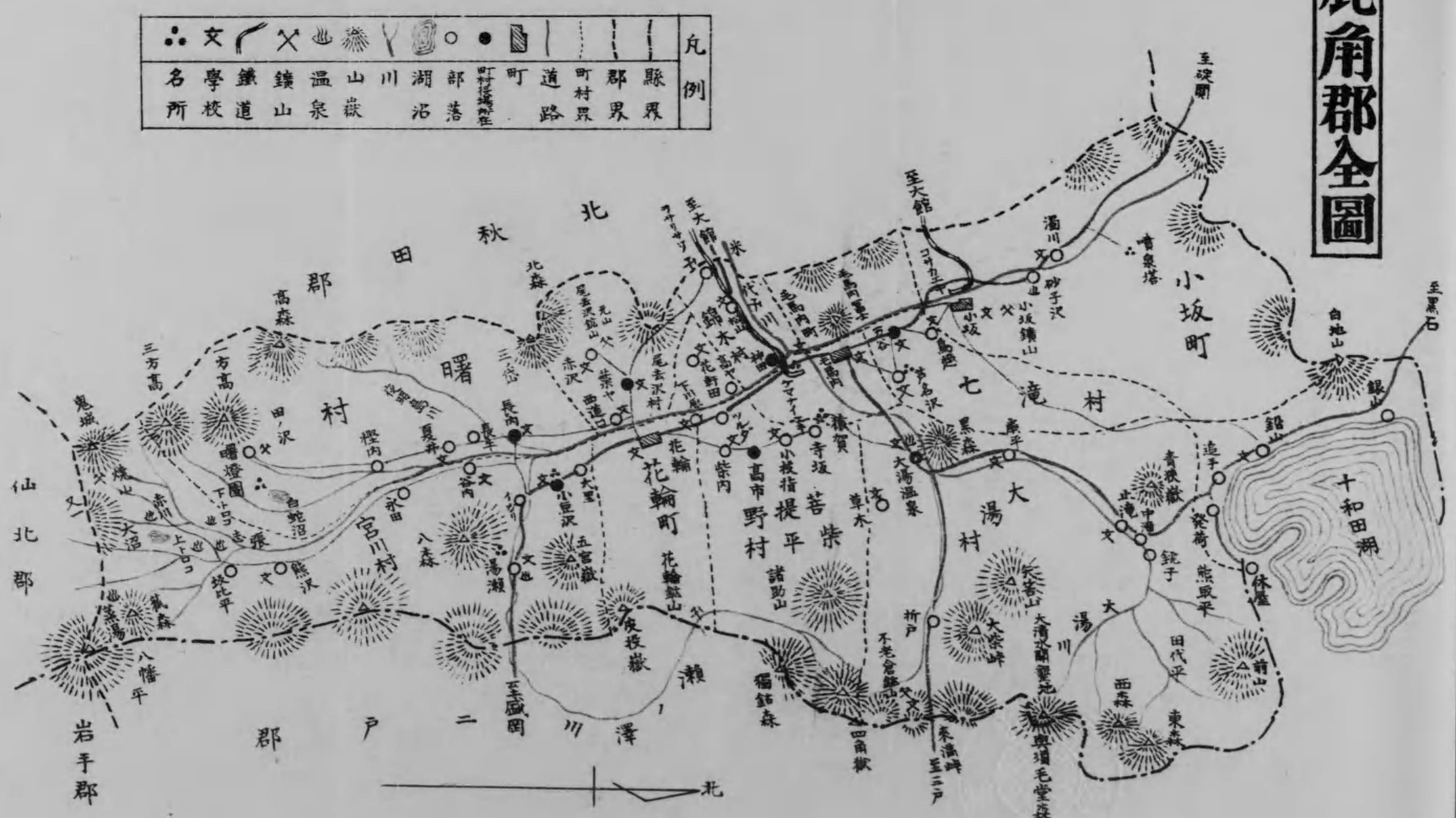
……毛馬内町……七滝村……大湯村……小坂町……

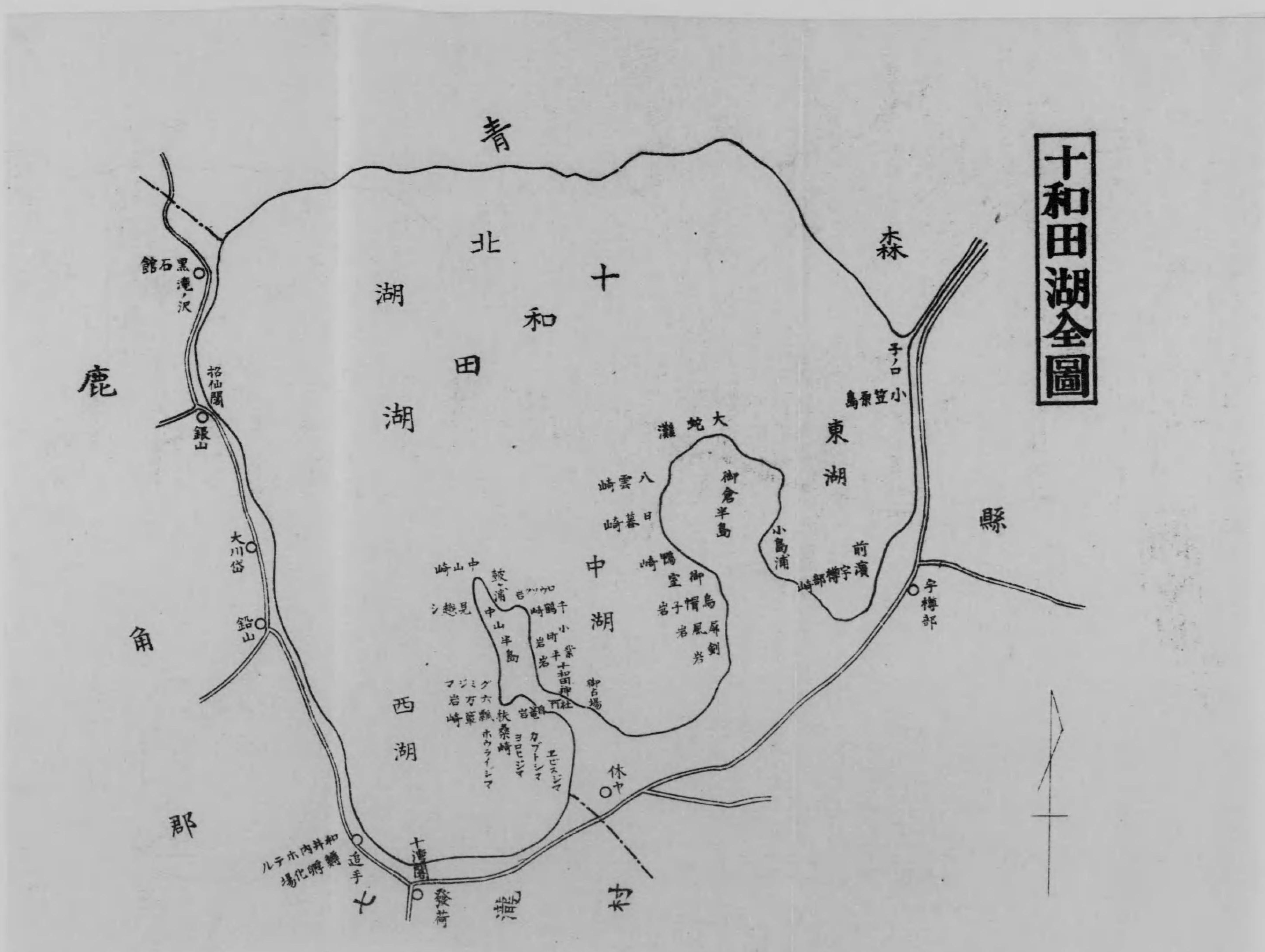
□ 鹿角新名所、湯の岱「噴泉塔」

□ 鹿角人物と鹿友會　附出身者名簿

□ 花輪、毛馬内、小坂、電話番號

鹿角郡全圖


凡例
縣界
郡界
町村界
道路
町
町村役場所在
部落
湖沼
川
山嶽
温泉
鑛山
鑛道
學校
名所
北秋田郡
曙村
七滝村
小坂町
大湯村
花輪町
野村
二戸郡
岩手郡
仙北郡
十和田湖
至碇關
至大館
至黒石
至二戸
至大館
湯川
砂子沢
小坂鑛山
青泉塔
白地山
銀山
鉛山
追子
発荷
熊取平
休屋
錦子
大湯温泉
黒森
廣平
草木
柴内
寺坂
若柴
小枝指
提平
諸助山
高市
花輪
花輪鑛山
夜叉嶽
五宮嶽
湯瀬
長内
夏井
谷内
櫻内
八森
北森
高森
三方高
一方高
曙燈園
田ノ沢
鬼城
大沼
八幡平
熊沢
赤川
上ドロコ
下ドロコ
白蛇沼
尾去沢村
尾去沢鑛山
赤沢
西道
紫ヤ
花野田
錦木
高ヤ
米代川
猿賀
不老倉鑛山
四角嶽
矢筈山
大湯水晶鑛地
東獅毛堂森
西森
東森
田代平
大湯川
大滝
中滝
止滝
青森嶽
鉄子
折戸
稲鉢森
大柴峠
菅沢
長内
小豆沢
五十嵐岡
瀬川澤
北



十和田湖全圖
青
森
縣
鹿
角
郡
北湖
十和田湖
東湖
中湖
西湖
黒石館
滝ノ沢
招仙閣
銀山
大川岱
鉛山
子ノ口
大蛇灘
御倉半島
八雲崎
日暮崎
小島浦
前濱
宇樽部崎
宇樽部
中山崎
見越シ
中山半島
休屋

新鹿角

總說

◉沿革。位置。地勢

鹿角郡は秋田縣の東北隅に位置を占めて居る陸中國の一部である、昔は豊岡郡上津野、或は狹布の郡と稱し、文治五年以降六百八十餘年間の久しき代々南部氏の領する所であつた明治元年戊辰戰役の後藩主は白石に轉封せられたると共に、眞田信濃守、戸田丹波守の取締所となりしが、翌明治二年黑羽藩の治下となり、更に三戸縣の管轄に移り、明治六年江刺縣に屬し、花輪町に支廳を置き二戸郡の一部をも兼治してあつたが、同五年三月、秋田縣の管下に移り、今日の鹿角郡ではなつたのである。

東方は脊梁山脈を隔てゝ岩手縣二戸郡、青森縣三戸郡に隣り、西は北秋田郡、南は八幡岱の高原を越えて仙北郡に續き、北は十和田湖の絶景を挿んで青森縣に接して居る。

四周悉く繞らすに山をもつてし、丘陵内に起伏して平野極めて多からず、中にも東南北の三方は所謂本州脊梁山脈ヶ水嶺をなすものなるにより、深山幽谷頗る多く、米代川、熊澤川、夜明島川、大湯川、小坂川等の諸川、皆此中に發するのである。

米代川は源を本郡柴平村に發し岩手縣二戸郡を經て再び本郡に入り、宮川村に於て熊澤川

曙村にて夜明島川を併せ郡の西部を北に流れて錦木村に至り方向を一轉して西方北秋田郡に向ひ能代港にて日本海に注ぐ。

北方十和田湖附近より發する大湯川、小坂鑛山の北山中に發する小坂川は共に合つして錦木村に於て米代川に注ぐ。

山の最も高きは八幡岱一帶の高原にして海拔實に五千尺、その雄大なる自然美の詳細は後章に盡すことにする。

次は五の宮嶽と云はれて居る、海を拔くこと三千八百尺中腹に登つて津輕富士を眺め、頂上に到つて近く南部片富士岩手山を望む、一天雲なく霽れ渡る夏の候、遙か能代の海を眺めんとて登山するものが尠くはない。

◆鹿角の山嶽

山名	町村名	高サ
八幡平	宮川村	一、五三一米
焼山	仝	一、三六六
梅森	仝	一、三四九
猿ノ森	仝	一、一四四
五宮岳	仝	一、一一五

山名	町村名	高サ
三方高	曙村	一、二二一
皮投岳	花輪町	一、一二二
白地山	小坂町	一、〇三四
中岳	柴平村	一、〇二四
大平	曙村	一、〇〇五

◆鹿角の河川

河名	水源地	流末地	長サ
米代川	岩手縣二戸郡田山村	山本郡能代港	三四里二〇町
夜明島川	曙村長井田	仝村松谷	五、〇〇
大湯川	大湯村來滿岳	錦木村錦木	八、〇〇
毛馬内川	小坂町青柄岳	毛馬内町瀬田石	七、〇〇
熊澤川	宮川村長谷川	仝村内	七、〇〇
兎尻川	小坂町鬼ケ城	小坂町小坂	三、〇〇
砂子澤川	小坂町青柄岳	同	三、〇〇
汁毛川	七瀧村山根	毛馬内町毛馬内	二、〇〇

交通

◆鐵道。縣道。交通機關

奥羽線によつて鹿角に入るべき鐵道が二つある。一は秋田鐵道會社の經營であり一は小坂鐵道會社の經營である、共に大館驛を分岐點として鹿角に入り前者は郡衙所在地花輪町を終點とすべき豫定にて土地買收中なれば明年中に開通を見るべく、今錦木村毛馬内驛を終點として運轉せられ後者は小坂鑛山を終點とし主として鑛山用貨物其他の運搬に供せられ

て居る。

大正八年の議會に於て議決せられた岩手縣好摩、花輪間約四十哩の省線も著々一方の工事進捗し平舘迄近く開通の筈である、此線はやがて秋田鐵道をはさんで大舘に連絡すべければ、貫通の曉に於ける行旅者の便益は素より、各種産業の勃興を促すべきや、論を俟つべくもない、則ち無限の寶庫を擁しつゝも交通の設備を欠く故をもつて投資企業するものゝ無かつたことは地方開發の上から延いては國家經濟の上からも多大なる損失であつたのである。

郡内に於る交通機關は自動車、馬車、人力車等であつて、自動車は花輪町（佐藤喜代治氏自營）毛馬内町（十和田遊覽。鹿角自動車組合）を中心として十和田、大湯、小坂、花輪湯瀨溫泉等の間を疾走し、馬車、人力車は各所に旅客の便を圖つて居る。

縣道は所謂盛岡街道と稱し大舘より分岐して鐵道路線に沿ふもの、錦木村松の木に於て南北に分れ南下しては花輪町に到り湯瀨湯泉を經て盛岡に向ふもの、北行して毛馬内を經小坂鑛山に及び、又毛馬内より東方に折れて大湯溫泉に到り、十和田湖畔に終るもの、途中より更に不老倉鑛山を過て青森縣三戸郡に通ずる所謂來滿街道も亦縣道である。

産業の鹿角

◉農業。園藝。養蠶。畜産。林業。工業。統計。

鹿角に於ける各種産業中、最も他に誇るべきは、鑛山業である、故に本書は特に鑛業地としての鹿角をば項を改めて紹介致すべきをもつて、茲には一般産業の概要を述へて見やう。

農業。鑛業を措いて主なる産業は農業である、耕地總反別七千七百六十餘町歩の内、田は四千百八十五町、畑地は三千五百八十餘町歩になつて居る、之が農月數、專業兼業合せて三千七百九十七戸、而して一戸の耕作反別を概算すれば、田は一町九畝歩、畑は八反八畝歩の割合になるけれど、累年の統計に見るも、歳々自作農を減じて小作農の增加する傾向を呈して、所謂農業組織の基礎、漸次危からんとする趨勢を示しつゝあるは前途寒に寒心に堪えないものがある、併し米産額に於ては耕地の整理、乾田馬耕、原種普及刈上げ乾燥等耕種肥培は素より調製に至る迄細心の注意を以て改善の實を擧げつゝあるは聊か意を强うするに足る。

畑作園藝。鹿角は畑地の面積、田に比して廣大に過ぐるものあり、之が利用を完つたからしめ、生産の增殖を圖ることは地方的經濟方面より見逃すべからざる緊要事でなければならない。

幸本郡の風土氣候は果樹の栽培に適し大小豆、粟、蕎麥等普通作物栽培の以外、苹果、和洋梨、桃、櫻桃、マルメロ等の果樹を栽培するもの多數あり、之が郡外に移出せらるゝ金額も亦尠くはない其他蘿蔔、胡蘿蔔、午蒡、葱、甘藍、馬鈴薯、大蒜等の蔬菜栽培も近年特段の進歩を示し、生産量の增加に併せて、品質も大ひに改善せられ、他の先進地に比し

さまで遜色なき迄に至つた。

養蠶業。 養蠶業は遠く維新前より行はれたりしも、自家消費に供するのみであつた、明治三十年の頃に至り稍盛況を呈してあつたけれど、鑛山業の異狀なる發展は自然勞力の缺乏を招ぎ、之が衰頽の因をなして不振の狀を呈したりしも、近年再び氣運回復し養蠶戸數も頓に增加し前途に光明を認められるやうになつた要するに、本郡は養蠶に適せざるに非ざるも鑛業界好況の影響を受けて不振の狀態に暫く在つたのであつて、殊に夏秋蠶の如き他に比して遙かに優るものあり、他縣に於て困難とせられつゝある秋蠶一化性飼育は極めて容易であり、秋蠶種製造地として頗る有望視せられ近年漸次他に移出せられて居る。

畜産業。 所謂南部馬の產地であつた舊藩時代は、牧畜業奬勵の爲め放牧地を開放して何等禁制を定めることなく、斯業著しく發達し啻に飼育頭數の多かりしのみならず、駿馬の產出又尠くはなかつた、明治の治世に及び、國家森林政策、或は山林行政法布かれて以來放牧地の面積、漸次極限せられ飼育頭數を減ずるの餘儀なきに至つたことは斯業にとつて甚だ遺憾に堪えない。

然し乍ら產馬に於ては「ハックニー」「アングロノールマン」「ペルシユロン」等の優良種馬を以て躰質血統の改善に努め牛に於ては在來種肉牛、生產地に於て縣內一として知られたりし今日、在來肉牛の特質を益々發揚せしむると共に「短角」「ホルスタイン」等の優良種を配し、以つて生產の增殖を圖りつゝある狀態である。

林業。 鑛山業の發達に伴ひ、漸次虛げられて行くものがあるとしたならば、それは鑛煙毒の山林に於ける被害でなければならぬ。

鑛煙毒の被害は一般農作物にも多かるべしと雖も山林の如く激甚ではない。

鑛業地を誇る我鹿角郡は、林業に於て特記すべき資料を欠くは又、止むを得ない所ではあるまいか、一般に殖林思想の幼稚あることも亦斯業の伸展を阻碍した事實であらう、僅か毛馬內町、大湯村、宮川村等の一部地主中に杉の殖林を爲すと共に熱心に是が管理に力むるものもある。

唯茲に特記すべきは桐樹の栽培である、輓近文化の進運と、機械工業の發達に伴ひ、桐材利用の途非常に廣く價格も亦自然騰貴の姿に連れて、之が栽殖を爲すもの郡內各町村に頗る多きを加へるに至つた、本郡の桐は發育伸長共に良好にして材質又優秀、聲價俄かに高まり京阪より入り込む桐買人も尠くはなく、郡外に移出する額年々三萬圓を降らない、將來益々有望の事業である。

工業。 本郡の工業は主要輸出に屬するもの少く、清酒、醬油の釀造工業の外染色、製材、木工品、罐詰、製造等を主なるものとする。

清酒は本郡の水質頗る釀造に適し、加ふるに、冬季空氣清純にして溫度の變化少なく夙に芳醇の銘酒を產出地として知られた、醬油の釀造は花輪町淺利佐助氏の獨占的事業であつて其の造石數二千五百石、實に縣內隨一とする所である。

而して其の販路たるや、啻に郡内消費を充すのみならず、遠く青森北海道等に迄及ぶ。

染色工業として特記すべきものに紫根染、茜染の二ッがある、色の古雅なると、容易に褪色せざるの特色をもつて知られ、マルメロの罐詰、木通蔓細工と共に本郡の特産中の特産でなければならない。

統計上カラ見タ鹿角郡

総面積……六十方里一

田	四、二〇五町	畑	三、三六七	
山林原野	一四、二〇五	宅地	三五二	
其ノ他	三五	計	三三、三五〇	農家一戸當 田 一町九畝歩
				全 畑 八段八畝歩

現住戸數……八千六百十一戸

農業	三、七九七戸	漁業	一三	
工業	二、六九八	商業	八三二	
其ノ他	一、一六〇	無職業	二二	
現住一戸ニ付	六、八五七	戸數百ニ付農業	四十四戸	

現住人口……五萬六千五百八十四人

男	二九、二九三人	女	二七、二九一	
計	五六、五八四	本籍人	五三、一六二	
出寄留	二、九二一	入寄留	一、六、三四三	
一方里現住人口	九百四十一人	一町村平均人口	五千六百五十八人	

生産價格……一千五百四十四萬三千三百二十圓

農業	三、六九九、七四九円	畜産	二〇〇、六一三	
林業	一九一、八七七	鑛産	九、九〇五、一三六	
水産	九、五六七	工業	一、〇三六、三七九	
現住一戸當價格	千七百四十九圓	主要物産	銅、金、銀、米、酒、苹果、	

諸税負擔……五十四萬五千三百十九圓

國税	一八六、九一六	縣税	一四五、五七六	
町村税	二二四、八二七	計	五四五、三一九	現住一戸當負擔 六十三圓四十二錢
現住一人當負擔	九圓六十四錢			

自作小作田畑反別表

町村別	自作反別 田	自作反別 畑	小作反別 田	小作反別 畑	合計 田	合計 畑
花輪町	一〇六、二七一町三	二一五、八二一町〇	四〇九、八七〇町九	一六二、九八一町八	五一六、一四二町二	三七八、八〇一町八
尾去澤村	二八、九一三三	一〇一、〇五一八	四〇、三三三	五一、六四二五	六九、一四一六	一五二、七〇一五
曙村	二四八、九二二七	一七九、六六二七	二二〇、一五〇九	二九〇、六四〇四	四六九、〇八〇六	四七〇、三一〇一
宮川村	二六一、四〇一〇	一六〇、五六二一	二四一、三五〇〇	一五四、六六一八	五〇二、七五二〇	三一五、一三〇九
柴平村	二二七、四一一三	三九四、一一〇一	四四六、四一〇九	一四八、七五一一	六七三、八二二三	五四二、八六一五
錦木村	一〇一、〇〇〇〇	一九八、〇〇〇〇	二二〇、〇三二七	九四、一九二三	四三二、〇三二七	二九二、一九二三
毛馬内町	二二、四〇〇〇	四三、九〇〇〇	三三九、六〇〇〇	一六八、四〇〇〇	三六三、〇〇〇〇	二一二、三〇〇〇
七瀧村	一五五、一〇〇〇	二一二、六〇〇〇	一七九、三〇〇〇	二六九、一〇〇〇	三三四、四〇〇〇	四八一、七〇〇〇
大湯村	二六七、五一〇八	三六八、一〇〇〇	二〇一、〇一二三	二〇三、〇五〇三	四六八、七一〇〇	五七一、二五〇三

農産物生産統計

米ノ部（町村別）

町村名	作付反別	收穫高	價額
小坂町	二四一、二三二	二四三、二二八	二四、七三二四	三二、六二〇二	三五五、九六二九	一六五、七三二〇
合計	一、七六二、八二九	二、〇一六、〇〇六	二、四三三、八九三	一、五六五、〇六二	四、一八五、〇八二三	三、五八一、〇一九
花輪町	四九七、一町	一〇、一七五石	四四一、七二六円
尾去澤村	六一、五	一、一六一	五〇、一八三
曙村	四五一、四	七、一六四	三二一、六四六
宮川村	四八一、〇	六、六四〇	二八八、六三二
柴平村	六三八、六	一〇、三九	四四〇、〇一八
錦木村	四〇七、二	五、一一五	二二〇、九〇五
毛馬内町	三四〇、一	六、九二〇	三〇〇、〇八三
七瀧村	三八、八	五、九六九	二五九、九五二
大湯村	四二四、四	八、八九八	三六六、四七八
小坂町	二九七、六	三、六二〇	一五七、三二九
計	三、九一七、七	六五、七九一	二、八五六、九五二

鑛業地としての鹿角

◆尾去澤と小坂

鹿角を旅行して其の中央を貫通する縣道の上に立つ人は誰しも北に小坂南に尾去澤の二大鑛山か相對して、勃雲の如く天を掩ふ鑛煙を望み見て此の壯大なる工業王國の風致に胸を躍さゞるを得ないであろう、實にや特有の俗謠「からめ節」の「せまい樣でも鹿角の里は西も東も金の山」と唄ふか如く郡内到る所として鑛山の所在ならざるはなく大正九年の調査によれば全郡の鑛區數九十九の中稼行せるもの二十二、坪數八百五十五萬六千餘坪と現はされて居る、其の中て藤田の小坂と三菱の尾去澤の二大鑛山は相竝んで鑛業の鹿角を代表し全國に雄を稱して居るのである。

◆尾去澤鑛山

尾去澤の發見は遠く和銅年間に逆り全國に於ても實に最古の部に屬し明和三年南部藩の御手山となり連綿として稼行を續け維新後二三個人の手に經營されたが明治二十二年三菱の手に移るに及んで最新の施設經營を施し專ら銅鑛を主として採鑛を續け今日に到つたのである、數百年間間斷なく採堀され、元山、田郡、赤澤一帶の山脈は坑道蜂の巣の如く貫通され居るに係らす鑛脈杜絶せず、產額減退せざるは奇蹟的なりと云ふ可く採鑛精錬の裝置の如きも頗る整頓し模範的鑛山として見學者が頗る多い。

今鑛石が堀り出されてから粗銅となる迄の經路を一覽するに先づ坑内より電車に依つて運び出された鑛石は大割にかゝり破碎せられ機械によつて手選場に運ばれ熟練せる工女達によつて鑛石と捨石と片又に分られた上更に又機械によつて破碎され篩別器に懸りて疎なるものは更に破碎作業を受け又々淘汰跳汰機にて精鑛と片及と捨石に三分され精鑛は精錬に捨石は放捨され片及は又々破碎さるゝこと數度にして最新式の浮遊式選鑛の裝置に掛つて茲に選鑛の作業は了るのである、本鑛山は鑛石の性質上選鑛に最も重きを置き數百間に建て列ねられたる大屋の中は總て大小連聯せる機械を以て充滿し數百の人員其の中に活躍して作業に從事する狀眞に壯觀を極めて居る。

精錬は選鑛より來たれる精鑛に「コークス」を加へ溶鑛爐に入れて溶解し「カラミ」と銅の含有分とに分つ、「カラミ」は捨てられ彼は「眞吹」に掛り硫黄分を吹き飛ばし全く石と銅とに分離せしめて茲に始めて粗銅が出來、此粗銅は大阪三菱精錬所に送られ彼地にて電氣分解によつて、金、銀、精銅となり世界の市場に出る順序となるのである。

それから採鑛に關する裝置も尾去澤の特色であつて高き坑道は漏斗を用ひ短き所は卷上機を利用して採堀したる鑛石は四條（赤澤、田郡、元山、石切澤）の電車線に運び之を更に中央の大隧道に集め電車を以て選鑛場の前に運び出す仕組である、目下八時間交代を以て坑内に働くもの約八百人、選鑛二百六十餘人、精錬三百九十餘人其他にて合計二千三百餘の勞働者を使役し役員現在百二十餘名大正八年度に於て四百十五萬四千八百五十斤の粗銅を産出して居る。

目下の山長は工學士瀬川德太郎氏であつて使役人の待遇等に就ては三菱會社の内規に準し傷病手當、葬祭料、結婚、出産費の支給等夫れ〳〵施設されて居るが就中醫院は外科、内科、眼科、齒科等の各部に分れ使役人に限り一日參錢を以て醫藥を給して居る、尙役員に對する倶樂部の外近頃劇場共和舘を新設して始終活動寫眞等を興行し勞働者並に其の家族の慰安に力めて居る。

本山は經歷尤も古き鑛山とて鑛夫も親代々其の業を繼承せる土着のもの過半を占め他の所々を浮浪する鑛夫に比し思想大に穩健にして勞働問題のやかましき今日絶えて同盟罷業等の噂を聞かざるは勞働者の氣風大に他に異なるものあるに依ることは勿論なるも又三菱風の地味着實の經營法の賜である。而も茲數年來の銅價下落時代に會際し、廢山休業等相繼ぐ中に獨り本山のみ顯著なる縮少も行はず依然持ち答へ來つたるは正に鑛業界の偉觀であらねばならぬ。

◆小坂鑛山

小坂鑛山は花輪町を去る北方五里、郡内の各要地とは自動車の便あり私設鐵道を設けて大舘驛と連絡して居る、文久元年の發見に係り南部藩より維新の際官有に移りしが明治十七年現藤田鑛業會社の經營となり、銀山として著名なりしも鑛量缺乏の結果、明治三十五年當時の精錬課長たりし現工學博士武田恭作氏等の苦心研鑽によつて銅鑛を精錬することに

決し、大規模の自鎔法を大成して年一年隆昌に赴き本邦に於ても五指を屈する大鑛山となつたのである。

元來小坂も普通の鑛山と等しく坑内採鑛のみを行つたのを採鑛上有鑛帶の全部を安全に採堀し遺利を殘さず且つ常に採鑛費の低點を平準に持續せんことを期し明治四十一年堀割採鑛法を起し本邦未曾有の大規模なる開堀を決行したのである。

斯の法は地表より岩石土砂を排除し其の進捗によつて露出したる鑛石を採收せんとするものであつて從來の坑道作業とは全然面目を異にし全山を堀り崩すの觀を呈し正に本邦工業史上稀有の大工事であつた。此の計畫により最終堀鑿區域は鑛床自然の形狀に適應し南北に長く東西に稍短く開堀の最大深五百五十尺、最大長二千五百尺、最大幅千二百尺に堀割内の側壁には一定の間隔を置き十數段の段階を設け軌道を布設して鑛石を搬出する裝置であるのである。

精錬は之を大別すれば鎔鑛、製銅、電煉、精製の四種であつて鎔鑛に於ては粉鑛の一部を搗固して團鑛と爲し一部を燒結爐にて燒塊と爲し之を各種の塊鑛と共に鎔鑛爐に裝入し之に石灰石を加へて熔煉を行ひ一番鈹を作る、更に煉鈹爐に於て濃錬し二番鈹と爲し、之を製銅場に於てベセマー式製銅法に依り酸化鎔錬を行ひ精銅と爲したる上鑄型に入れて原銅板となし電氣分銅場に送りて電錬作業を施し品位九十九、九八%を越ゆる電氣銅と金銀其他を含有する貴瀝物とに分解し、貴瀝物は更に英式分銀爐にて精製し含金銀盤となすの順

序である。

產額は大正九年度に於て

金	一二〇、九九二匁	銀	四、二三四、〇九二匁
銅	一二、五五七、四七九斤	蒼鉛	五九、六四五匁

であるが大正六年の銅價高騰の時代には實に一二、五九〇、六七〇斤の精銅を產し全國產額の約七分の一を占め現今は一般鑛業の不振に會し人員稍々減したるも一時は役員三百餘人鑛夫總員約一萬と稱せられ業を求めて四方より集るもの數年ならずして三萬を超へ商家軒を列ねて一大都會をなし優に市の價値ありと稱せらるゝに及んだのであつた。

去れは鑛山に於ても之等市街の整理には大に意を注ぎ電灯の如きは大湯川發電所を始め四ケ所の發電所より集むる水力電氣五千九百馬力も器械の運轉に用ふるの外は灯用に供し給水は小坂川の支流砂子澤の上流に於て分水し十四ヶ所の隧道を穿ち二萬尺の木樋を通して之を元山貯水池に導き水壓を利用して特種の濾過法により淨水となして普通飲料並に火防用に供して居るが鐵管の延長實に六萬尺に及ぶと云ふことである。又衛生の如きも小坂病院及元山分院を設け院長醫學士米山彦郎氏の下に各種の專門醫を聘し鑛山從業者は勿論一般住民の醫療に當つて居るが其設備の完全は遠く他方より來る入院者か多いのを以ても窺はれる。

學事に關しては約三千人の生徒を收容して居る壯大なる小坂尋常高等小學校を始め小坂實

科女學校の經營に對して鑛山は町に大に力を添へ殊に鑛山の設立に係る鑛業員養成所は鑛山從業員の子弟をして鑛業上の智識を得せしめ技術員の養成を目的とし講師には若手の技師連之に當り成績極めて良好だと云ふことである。

現今の山長は藤田鑛業會社の重役坂仲助氏で副山長新山敏介氏專ら實務を執掌されて居る現農商務次官田中氏、富豪久原房之助氏も過去に於て本山に長たりし人々である。

鹿角の特産

イ、古代紫絞。茜染　ロ、鹿角りんご
ハ、マルメロと其罐詰　ニ、あけび蔓細工
ホ、花輪の柳行李　ヘ、鑛泉湯の花
ト、鳴き鶴本場としての鹿角　チ、鹿角の萬年青

イ、鹿角古代紫絞。茜染

鹿角古代紫絞の始まりは、今を距る三百三十餘年、天正十五年の頃、京都地方より傳へられたもの、所謂世は刈り菰の戰國の時、或は敗軍に世を忍ぶ武士の此處の土地に逃れ來て原料あるがまゝに之を生業(ナリハヒ)としたのではあるまいか。

昔は畏くも禁廷御料の紫は、皆此の古代紫に限られてあつたと聞く、古史物語りを繙けば「紫裳濃(スソゴ)の絨」などと云ふを見受くるがやはり此の紫根染めであらう。

原料紫根はもと本郡の山野にも自然の生育を見たが近年は主として岩手縣、並に朝鮮地方から購入して居る、紫根染は所謂秘傳を以つて傳統し、しかも企業的家系的でなく、單に技術的に傳へられたものである、現在は花輪町栗山文次郎氏と小田切健藏氏の二人であつて、現在に於ける一ヶ年の產額約五千五百反、木綿の外、羽二重、縮緬、絹、などに染め夜具布團、袱紗、半襟、風呂敷、帶側等に用ゐられて居る。

色彩の古雅にして高尙であり加ふるに原始的趣に富むことは類ひ稀なものであらう。古來此の紫根染は殺菌力を有し、諸種の傳染病毒の豫防に特効があり、且つ決つして濕氣を呼ばずして保溫力を有することも亦信ずるに足る事實である、過ぐる大正六年、東北鑛產品評會を、三越呉服店樓上に開催の折り陳列して名聲を博して以來都人士に愛好せられ、年々其の需用を增加して居る狀況である。

茜染は紫根と等しく茜根を原料とした絞り染であつて、用途は殆んど紫根染と同一であるしかも古代の絞り模樣は『小桝、大桝、立枠』の三種のみであつたが、今は各種流行の絞り模樣を染めて好評嘖々たるものがある。

◆おかねと紫のうた　露星

▲いにしへゆ、上津野乙女が誠をば、こめて染めけん茜むらさき
▲今もなほ、京あで人の戀語る、昔ながらの鹿角むらさき
▲紫は、姉に茜は妹に、なぞらへし代を、今日にして戀へ
▲忍ぶれど、色にいでけん紫は、狹布の乙女が戀の源

▲夕ざれば、紫染のゆかた着る、鹿角男の伊達姿かな
▲紫も、茜も共に美しゝ、鹿角乙女の、戀ひさながらに

ロ、鹿角りんご

雪國の冷たさに育つ私共にとつて南國の綠り葉の蔭に、美くしい色の蜜柑が憧憬である如く、南國の暖かさに育つ人々にとつては、北國のりんごも亦淡いあこがれの一つではあるまいか、見るによく、嗅ぐによく、口にして更に他果の追從をゆるさぬ特產鹿角りんごは三十年の過去に於て既に京阪の市場に早くも其の盛名を贏ち得たのである。

明治九年當時の勸業寮より苗木の拂下げを得て栽植せしを嚆矢として、同二十年の頃盛岡地方より品質優良の苗木を移入して栽培するもの郡內各地に興り數百の同業者と廣大な反別を有するに至つた、現在の反別三百町に餘り年額拾萬圓を降らない、生產量は遠く津輕のそれに及ばずとするも、肉質の緻密にして香味の優れたる點は誰人も容易に首肯することが出來る。

苹果の主なる栽培地は花輪、宮川、柴平、大湯、錦木等の町村であつて、紅玉、柳玉、國光、祝、旭、魁、倭錦などの種類が一般に植えられて居る。

是が生產販賣の機關として郡南に鹿角林檎購買販賣組合北部に寺坂信用購買販賣組合があり、郡內を統一した鹿角果樹協會は種々の奬勵施設の機關として古い歷史を有して居る、東京、大阪、批把島等は主なる販賣先である。

ハ、マルメロと其罐詰

鹿角の特產的名物に、マルメロと其の罐詰がある。

由來榅桲は高山性野生植物であり我國分布の狀況から見て、殆んど本郡が原產地であるかの如き確證が幾多も存在する、郡內到る處に栽培されて居るうち、最も多いのは郡南宮川村であつて、古老の言にするも、數百年間生長したかと思はれる樹が所々に尙散見する。

種類は早晩二種、如何なる地にも生育するけれど、濕潤の地は、成長結實收穫等、總べての點に良好なる成績を示す。

秋霜に完熟した榅桲は、濃黃色を呈し、芳香馥郁、强列にして然も特異的な匂ひを射るが如く放つものであるから、香味原料としては、レモン等の仲々に及ぶべきではない。

マルメロ罐詰は實に此の顆を原料として加工製造したものである。

今を距る三十餘年前、之が栽培者として有名なる花輪町、關久兵衛氏が罐詰に製造して販賣を試み好評を博して以來、本郡の特產とはなつた、香氣芳烈、甘酸其度を得、滋養に富むは勿論病者の嗜好に適し、啖咳キリの妙藥として歡迎せられてる、居

近年縣外の需要殊の外多く㋑田中商店、淺利佐吉、關安治氏其他、宮川村產業組合に於ても、大規模の設備をなして、製造能率の增進につとめ、近縣、京阪は勿論遠く北海道方面に迄移出するの盛況に在る。

最近は又、榅桲蜜を製して、清涼的滋養飲料たらしめ販賣するあり、需要尠なからずと云

へば、他に幾多も加工製造の方法もあるべく、マルメロは寔に本郡特產としての誇りでなければなるまい。

二、あけび蔓細工

本通蔓細工の現在は殆んど、花輪町に於ける特產の狀態にあるけれども、是が過去の進程を探ぐれば、なか〳〵に深甚の意味を有して居る、日露戰役の砌り、戰役者の遺族癈兵等の次第に增加せるをもつて、之が救護の施設を町村のみに委ねおくことの緩漫を慮り、明治三十八年四月、時の郡長河野隆性氏主唱の下に、鹿角郡出征軍人遺族救護會なるものを組織して、生業扶助の方針を採り、當時隣縣青森より製作販賣せられつゝあつた、木通蔓細工の頗る有利にして、且つ其原料は郡內各地の山野に叢生するものなるにより、其の年十月、同縣より教師を招聘して軍人家族に第一回の傳習會を開催し、多數の職工を養成し回を重ねて斯業の隆昌を見るに至つたのであつた、當時製品の販路は遠く、京阪地方にも及び、規模の小なる同會事業として經營するの困難なるにより、新に鹿角物產株式會社を興し大々的發展を企てしも、戰後經濟界、不振に際會し、遂に解散の止むなきに至つた。現在に於ては大里恒三氏外二三の個人經營によつて經營持續せられ、一ヶ年の製造高約二萬圓、販路は、東京、大阪、北海道等を主なる所とする。

原料の蔓は郡內到る所の山野に自生するので、農家の多くは副業的に、採取を爲し、仲買商があつて原料まゝの移出も多量に及ぶ、近年は、長野、青森、鳥取地方に移出せられる高が四萬圓位も有らうと云ふ原料價格が四萬圓に及ぶとすれば、製品價格が之に數倍するのであるけれども、もとより本郡は鑛業其他の關係上、勞力の他に吸收せられる爲、職工の養成も頗る困難の狀態にあるとは遺憾なことである。

ホ、花輪の柳行李

鹿角に於ける杞柳栽培並に行李製造のことは花輪町工藤治六氏獨專の事業である。明治三十九年鑛煙毒被害の民論漸次勃發の頃、時の郡長河野隆性氏關西地方を巡視して、鑛煙毒被害地に杞柳の栽培が行はれよく成長する實況を視、鑛業地たる本郡に好適の事業として奬勵せし所工藤氏の先代感を之に同うし、子息治六氏を遠く岐阜縣本巢郡に派遣して之を見習はしむること一年有餘、栽培技術の研究に併せて、行李製造の實地を練習して歸つたものである、同氏の杞柳圃は約二町歩にして畦間二尺、株間八寸に栽植せられ、反當約百貫の收量があると云ふ。

病虫の被害尠く又寒害の憂ひなく、生長の度頗る行李製作にふさはしいと聞く、花輪の一特產たるを失はない。

ヘ、ラヂウム鑛泉湯の花

こゝに記さんとするラヂウム鑛泉、湯の花は、鹿角と仙北郡との郡境にまたがる、燒山の麓に湧出する攝氏百〇五度の熱度と、湧出量の多量をもつて本邦第一の間歇溫泉と稱せられて居る鹿湯溫泉の特產である。

鹿湯は、延寶年代の發見であつて從來治療方法なき痼疾者と云へども此の溫泉に浴したものは大抵全治すると云はれ來つた不可思議の靈泉であつた、しかし、山道險阻にして所在僻陬の地なるをもつて古來人蹟を見ること仲々に稀なものであつた。

茲に本泉の管理者たる本郡花輪町根市留次郎氏は通路を開拓し浴槽を設けて設備を整へると共に、溫泉の沈澱物湯の花を採取して廣く販賣して居る。

內務省衛生試驗場の定量分析の成績によれば、酸性泉に屬し、醫治効用の概要としては、劇性の粘液漏、慢性カタル、癩病、梅毒性潰瘍、疥癬、其他慢性皮膚病等を擧げられた、やはり花輪の名物たるを失はない。

一ケ年の採取量約二千五百貫位、販路は大抵東京市であると云ふ。

ト、鳴き鶉本場としての鹿角

鳴き鶉の本種を別に駿河とも呼ぶ、明治二十年の頃鄕土の素封家にして愛禽家たる吉田清兵衛なる人、毎年東京に出てゝは財貨を惜まず、鶉本種の逸品を買ひ求めては飼育し且つ繁殖につとめたのであつた、則ち鶉本種の鹿角に移された抑々の濫觴である。

駿河鶉の來歷は之を詳にすることは今日至難ではあるがその本場と傳へられて居る駿河、或は讃岐地方に、絕えて其の聲を聞かざるに至つたこと、乃至は明治三十年頃東京で盛に流行り出したにも拘らず間もなく中絕の姿を呈したことは、やがて本郡を駿河本種の本場たらしめた所であつて、其間に於て飼育管理の方法を研究し、且つ良鶉を繁殖して兎に角その純系を維持したことは斯界にとつて少からぬ功献でなければならぬ。

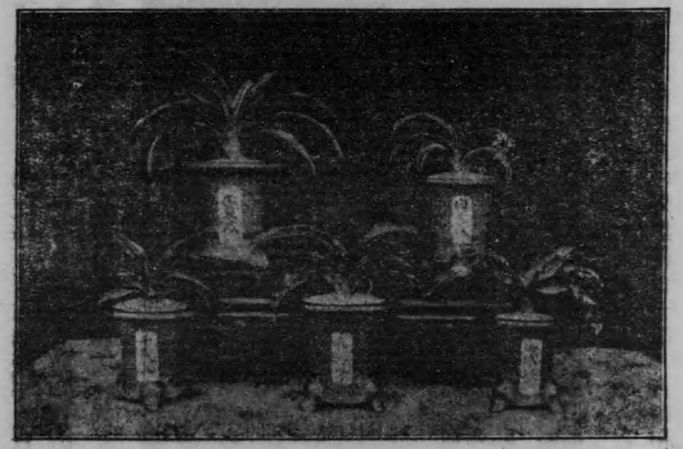
流行の聲をひそめたとは云へ、我國に於て今日最も鶉飼育の盛なるは青森縣津輕地方である、が今日の盛大を致したその源は悉皆鹿角鶉の移入に外ならぬのであつて、しかも其の恩人とも云ふべき伊藤文太郎氏は實に本郡花輪町の人明治三十五年の頃より毎年津輕地方に出張して同好者に之を頒ち、或は數年間弘前に移住して之が普及に盡みならず、その卵の滋養價値に富むをもつて珍重せらるゝは一般周知の事實である、花輪町に於ける養飼家の主なるは伊藤氏の外黑澤吉太郎、吉田和助、賀川芳五郎、西村忠次郎

伊藤文太郎氏愛鶉

の諸氏があり、毛馬内町には高橋庄治、高杉權次郎、青山源七等の熱心家を有して居る。

チ、鹿角の萬年青

人間生活の一面に於て趣味性の涵養が如何ばかり緊要なことであらう、しかも幾多の趣味資料の中で流行を超越して一定不變の生命を持續するものは名の如く、萬年青を措いて他に多くあるまいではないか、近年鹿角の萬



岩泉和三郎氏愛藏の萬年青

年青は我國に於ける同好者間に特に注目せられるやうになつたことは、因つて來るべき要素がなければならぬ。

明治二十年の其の頃に、花輪町佐藤要之助氏は當時高價なりし臭竹、日月星、殘雪、古今林の虎等の逸物を東京より買求め吉田清兵衛氏は、都の雪都の縞等の優物を移入培養したものを今日の始祖と見做す。

明治二十七八年の頃、岩泉和三郎、關村忠治郎、吉田理太郎の諸氏出で、

熱心に寒地の培養方法を研究し、其頃、地球寶根岸松、松の霜、玉蓑等が移入された明治四十年の頃に愛知地方より麟鳳、明月、龍頭、天錦章、瑞鳳、瑞祥等、所謂貴重品の移入を見たのである。

斯くて斯界に本郡のそれが擡頭したのは大正元年の頃からである。

何故に鹿角が萬年青の培養に適して居るのかと問ふ人があらば一言『作り易い』からとお答へするに躊躇しない、天惠的の地なればこそ原産地に於て豫防することの叶はぬ根腐り芋腐鏽等の病害に侵されないのみならず却つて回復蘇生の療養地たるに於てをやである。夏季の暑氣乾燥も暖國の如からず、冬季の貯藏も亦容易である、近年は培養技術更に進歩を示し、芋吹き、實生によつて新種の育成に努め多數の逸品を有して居る、大正七年には同好者相會して鹿角萬生會を結び、岩泉氏主として之が牛耳を取つて居る。

鹿角温泉巡り

回大湯温泉　回湯瀬温泉　回フケ、其他の温泉

奥羽脊梁火山脈の背上に跨る鹿角郡は天然に惠まれたる温泉が多い、今其の著名なるものより列擧すれば

◆大湯温泉

郡の北方大湯村役場所在地であつて、來滿峠を經て青森縣三戸郡に通ずる縣道と毛馬内驛

から十和田湖に達する道路の咽喉に當り郡内要樞地よりの自動車の運轉が開始されて近時一層繁昌の度を増した。

「大湯ホテル」大湯の開發に全力を注がるゝ諏訪富多氏の經營に係り、清雅廣壯なる客室十六を備へ浴槽又廣濶美麗にして關西各避暑地の旅館に比し毫も遜色を見ない、昨年の新築以來此地に來る旅客の大半を吸引して嘖々の好評を博して居る。

「上の湯」千葉旅館は攝氏七三度アルカリ性に鹹と硫化水素を含み湯量豊富である、此所の庭園は最も著名であつて遠く來滿の翠巒を望み近く泉石の美を盡くし、昨年秩父高松兩宮殿下十和田御成りの際は歸途御休憩あつて茲で晝飯を採らるゝの光榮を擔つたのであつた。

「下の湯」(亀屋旅館)は攝氏六九度成分は上の湯と大差はない、和井内貞行氏の令弟木村氏の經營するところ、石造の浴槽清潔にして庭園の風致又旅情を慰むるに足る。

「河原湯」は攝氏七〇度特に皮膚病に効能著しい、此所には村營に係る共同浴場があり附近に高島、近藤等の旅館があつて皆内湯を備へ懇切な待遇法を以て各好評を博して居る。

「荒瀬の湯」は十和田街道に沿ひ大湯川の對岸にあり、湯量豊富、効能顯著を以て聞へ小坂鑛山大湯倶樂部、丸井旅館がある。

秋田方面からする十和田遊覽者は殆ど此地を經過し、又青森方面よりの觀客も歸途は此所を通り旅塵を洗ふを常とするを以て夏季は旅客の雜踏を見、殊に近時都人士の來遊漸く多く、貴人大官の枉駕も頻繁なるを以て「大湯ホテル」を筆頭として一般旅宿の設備、接客の方法等も着々改善され、文明的の温泉場として頗る將來が期待されて居る。大湯川に臨み遙に來滿の秀峰を環らし、殊に近時集宮發電所に水を引く爲めに大湯川の左岸に美事なる堤防成り其上を散策すれば涼風衣袂に滿ち酷暑の候と雖苦熱の何處にあるかを知らない

◆湯瀬温泉

大湯と相對して郡南に宮川村の湯瀬温泉がある、花輪町より南方二里、岩手縣に通ずる縣道に沿ひ人力車、馬車の便ある上近來は自動車も運轉さる、花輪町を發して里餘宮川村一の渡橋より道は米代川に沿ふて遡る、先づ最初に碇發電所の清楚な煉瓦造りの建物は巒山を後に清流を前に宛として瑞西邊の風光を髣髴せしめる、續いて數丈の岩壁自ら佛像の姿を現する地藏岩、兩岸相迫り奔端涵湧して百尺の下を逝く天狗橋、清泉岩壁を傳つて恰も一幅の玉簾を掛くるの狀ある錢波瀧、更に笹の渡橋を越へて南すれば松嶺颯々として四時和讃の聲を絶たざる賽の神、樹枝さながら傘蓋の狀をなせる唐傘松、岐々として崩れんとするが如き巉岩の頂に青松簇生せる姫小松等送迎の隙あらざる間に何時しか湯瀬温泉に達するのである、實に一の渡りより玆に到る約一里の谿間は遠く九州の耶馬溪にも比敵す可く、中秋紅葉錦繡を綴るの時、三多白雪峰々を埋むるの節は光景殊に絶佳である。

湯瀬温泉は米代川に臨み十數戸多く農を業とし湯槽は河原湯、下の湯、中の湯、上の湯、高見等にして何れも湯量豊富、硫黄の外種々有効の成分を含み、皮膚病、胃病、婦人病等

の特効あり、四時浴客を絶たない、旅館は此地出身の札幌の事業家關直右衛門氏の所有に係る關旅館村長阿部藤助氏の持主たる阿部旅館の外成田、六助、高見、などの所謂湯の宿があつて待遇は素朴を免れないが、比較的低廉であるのが此地の特色である、關旅館の背後に架せる鶴翠橋に立ては米代川の奔端岩に激して萬馬並び下るが如き大

湯瀬温泉遠景

瀧は指顧の間にあり、若し夫れ夕月夢の如く淡く河鹿の聲涼風に和して亮々たるの時、村嬢の唄ふ一節。

湯瀬村こやえー湯瀬村こ
行けは木の中、草の中
高い山から旭さす
前は白川、湯もござる
上や下から傳馬こア來
る　傳馬こかついで錢
コ取る　永く住み度い

湯瀬村こー

の俗謠を聞かば人は恍として自然の懷に歸るてあらう

◆蒸（フケ）其他の温泉

大湯、湯瀬の如きは郡内の温泉として、やゝ一般に知られて居るけれども蒸温泉を盟主とした、宮川村熊澤方面の諸温泉は未だ周知されない温泉として而も其の湯の强烈其の境の幽邃は近來頻りに喧傳さるゝ日本アルプスの諸温泉に比して遜色がないものであらう、併し之は別項八幡平の條に詳述するから玆には除くとして只一つ特種なる温泉として郡北の「砂子澤冷泉」を擧げて置く、此の冷泉は小坂町より濁川方面に入ること一里、普通の錢湯の如く燃料を以て温度を付し入浴するのであるが皮膚病に特効ありと稱せられ温泉宿も二軒存在して居る、本年八月高師教授佐藤傳藏氏地質調査の際に此の附近に珍らしき噴泉塔を發見され一名物と加へたのである。

傳說の鹿角

一、鹿角の國を懷ふの歌　石川啄木
二、十和田神話、八郎太郎　三、ダンブリ長者物語
四、大日堂と吉祥院大銀杏の由來　五、謠曲物語り「戀の錦木塚」

啄木遺稿ヨリ

一、鹿角の國を懷ふの歌

石川啄木

青垣山を繞らせる　天さかる鹿角の國を忍ぶれば
涙し流る今も猶　錦木塚の銀杏の樹

月よき夜は夜な〳〵に　夏も黄金の葉と代り
代々に傳へて新らしき　戀の譚の棱の音の
風吹きゆけば吹きくれば　枝ゆしづかに
月の光の白糸の　細布をこそ織ると聞け
十和田の嶽の古澤の　鬼栖める峽の深みに古ゆ
こもれる雲の滴りの　足あとつかぬ岩苔の
緣を吸ひて流れ來し　溪川かけ路小男鹿(サヲシカ)の
妻戀ひ鳴くに人怖ぢぬ　鹿角の國を忍ぶれば
涙し流る。その昔　はた白石の廻廊や
世々に朽ちせぬ碑(イシブミ)や　又物語りのこさねど
玉垣壁畫銅の獅子　人の國なるきらゝ星
日月星を生むが如　愛こそ先づは若兒らの
藝術の燭の生みの親　花とし咲くや錦木も
相思の眉に照り出でゝ　角笛ならす獵夫らが
色をぞ添へし春の世に　枝にならべる彩雉子の
弓の弦緒の鳴りの音も　昔おもへば涙しながる
香ひと見れば鳴らざりし　蜻蛉(トンボ)子が告の水の壽に
神の使の羽かろき　水にうるほふ高草の
流れは盡ぬ米白の　涙し流るゝ川に
鹿角の國を忍ぶれば　朝な夕なに研かれて
齊(イツ)き心の肌淨め

み目も涼しき色白の　鹿角乙女が夕づとめ
肩にま白き雲纏ふ　逆鋒杉の神寂びし
根にむら繁る大木の　中に神住む古御堂
壁の黒繪の大牛も　浮きてし見ゆる日暮時
樹がくれ靜む秋の日の　黄に曳く摺裳亂れ這ふ
石階ふみて靜々と　供御の神米捧げつゝ
伏目に上る麻ぎぬが　藁つかねせし黒髪に
神代の水の香こそすれ　かへしの足の小走りに
杉の陰路をすた〳〵と　露にぬれたる眞素足に
行きこそ通へはらゝかす　袖に葉洩れの日を染て
神の使の蜻蛉が　いのちの水の源を
告げに來る日をさながらに　青駒かへる背が門へ
その敬虔(ツヽマシ)さ美しき　米白川とも共に
流れ絶えせぬ風流の　錦木立てし若兒らが
色にも出る心映え　神代のまゝを目のあたり
見ると思へば涙し流る　（三十八年十二月五日夜）

二、十和田神話、八郎太郎

十和田湖の勝景、神秘幽邃實に天下に冠たりと雖も、こゝに又趣味深き神話を傳へて興趣更に大なるものがある。

鹿角郡草城の邑に住む久内と云ふ者の子に八郎太郎と呼ぶ男があつた、身長七尺に餘り怪力常人にすぐれ、人跡到るなき深山に入つては樺を剝ぎ、鳥獸を捕獲しては市に鬻ぐを業として居つた。

或一日仲間三人と來滿峠小國山を越えて奥瀨の十和田に至り級剝ぎ小屋に泊つて飯炊き番をした其時であつた、水を汲むべく桶を手にして、谷間の流れに掬はんとせし折も折り、水の淺瀨に大きい岩魚三尾游いで居つた、捕へ歸つて三人が夕餉の食膳に供せんものと、串を削つてかば燒にした所が、餘りの香ばしさにたえがたく、八郎太郎先づ己が分を味ひみるに、美味なること限りなく、舌鼓み打ちつゝ、遂殘り二人の分迄も平げてしまつたのであつた、遽かに喉の渴を覺えることが頻りであつたから、汲み來つた水を飲でも飲み足らず、遂に谷水に降りて飲み續けたる所、不圖水に映つた吾れとわが顏の姿を見れば、こは如何？身は既に龍身と變つて是迄の吾れならぬ身の愕ぎされど渴は依然として止まない彼は遂に山を割き岩を開き水堰き止めて湖となし其中に棲むべく覺悟を決めたのである。

清和天皇貞觀十三年五月綾小路關白藤原是眞卿は其子是行卿と三人、讒者の毒舌に觸れ、流浪して陸中國三戸郡斗賀村權現堂の別當藤原式部方に寄寓して居つたが、熊野神社に祈願を罩めて一子を擧げ、熊之進と名づけた。

熊之進は永福寺月体和尙の門に入り名を南祖坊と改めて諸國を遍歷修業した、中にも紀州熊野の權現へ參詣すること實に三十三回、萬代死することを免れしめ給へとの大願を掛けたのであつた。

一夜熊野權現の神靈夢となつて彼に告げて曰く「此山を下りなば途上一足の草鞋有るべし是を履き諸國を巡り、そのわらじ切れたる地こそ汝が永久の住家なるべし、ゆめ疑ふことなかれ」

山を下りれば果して一足の草鞋あり、しかも金（カネ）にて造られてあつた、南祖坊喜んで此を履き諸國を巡錫して十和田湖畔に到ればはしなくも緒がプツリと切れてしまつた、そこで此の地を永久の住家にせんものと身を龍身に代へて飛び込めば、先住の八郎太郎、且つは愕き且つ憤ほり、鎬を削り戰ふこと實に七日七夜の久しきに亘る、南祖坊是迄讀んだ經文の文字悉く口となつて咬みつかんとすれば八郎太郎人の世に在りし日に用ゐし、簑の編目の一つ一つが口となつて是に對す、秘術を盡して攻防相つとめしも八郎太郎遂に破れて逃げ去るの餘儀なきに至つた、八郎太郎敗走の途次、毛馬内に寄り普門山を脊負ひ出し、米代川を堰き止めて、鹿角全土を湖たらしめて己が棲む地を致さんとせしも、鹿角四十三ケ所の鎭守の稻荷、大湯村關神に近き宮に集り、大評定の末、各方面より石を投げつけて辛くも郡外に追ひ出すことを得たのであつた、今毛馬内町の端に大石塊の散在するは此時神々の投げつけたものだと信じられて居る、八郎太郎はやがて秋田の男鹿村に走り八郎潟に永住し、田澤湖の辰子姫と相思の仲となり、遂に戀の勝利者となつて、今人に迄も傳へられて羨望の的となつて居る。

三、ダンブリ長者物語

昔出羽の國獨鈷（トッコ）の村に年若き一人の婦人があつた、或夜枕邊に一人の美少年が立ち現はれ優しい聲をもつて「汝の夫たるべき男は此川上みにあり、其働は汝に限つて他人（ヒト）の二倍に見えん、尋ね求めて連れ添へよ、必ずや幸を享くべし」と。

婦人は神宣に遵ひ翌朝旅裝を整へて、川上を辿り、夕陽將に西山に沒せんとして鳥が塒に急ぐ頃今の小豆澤宮川村に至つて柴刈る一人の男を見たのであつた、しかも不思議や男が一本の柴を切れば二本倒れ、三本切れば六本倒れる、扨ては此の人こそ夢に告げられた我が夫たるべき人ならんと、ことの由を男に語れば、男も喜ぶこと限りなく、芽出度く偕老の契を結んだのである。二人は共に勤勉にして實直であつた。

或年の正月元日の夜二人は共々同じ夢を見たのである、「我は大日靈貴神なり、汝等更に川上に逆り農を勉めば必ずや千金の富を致すべし」と、夫婦即ち米白川に沿ひ源を尋ね田山村を過て平間田（ヒラマダ）に辿り着いた頃、日はトップリ暮れてしまつた、二人は其地を永住の地と定め辛酸を厭はず、汗の勞役に服し培ふ業にいそしんだのである、――或日或時空は長閑にも霽れて、花笑ひ鳥歌ふ自然の野に若き希望に輝く日女日子の二人が晝のいこひに男はウト〳〵とうたゝ寢の甘きに醉ひ初めた頃だつた。一匹の蜻蛉が何處よりか飛び來り、男の唇にその尾を二度三度觸れたのであつた、婦は怪しんで男の眼醒めた時靜かに問へば男はさも心地よげに『吾れ生れて曾つて口にせしことのない甘き酒を飲んだ夢を見た』と云ふ、婦は、今見た蜻蛉の話をすれば、男は大いに喜んで、そは神の惠愍々あらんと蜻蛉の來し方を尋ね行きしに、果せる哉、一つの岩の崖間から一條の芳泉滴り落つるほとりに、無數蜻蛉の群るを見出だしたのであつた、手に掬つて口にすれば甘露も只ならぬ芳醇サ、夢に呑んだ美酒と少しも異なる所はなかつた。

無限の歡びを顏に湛えて神に感謝した、此の芳泉の酒は如何なるやまいにもよく利き、又幾度汲めばとて盡き涸れをやうなことはなかつた、聞くとはなしに傳へ聞いて集ふもの千餘人、朝な夕なに米とぐ汁は流れの水を白からしむるに至つた、則ちそれは米白川の起源であつた、夫婦のもの富を致すこと巨萬、されど滿つれば欠くる世の習はし、二人の仲には子寶の一粒さえもなかつた、二人は一意專心、神に祈願せし所一人の女兒が授かつた、二人は飛び立つやうに喜び、名を秀子と呼んで蝶よ花よと慈しみ育くんだ、長ずるに及び才色兼備はり人々からは天女の再來なるべしなどゝ尊まれたのであつた、扨て夫婦のものを誰云ふともなく長者〳〵と呼ぶ樣になつた、しかしお上の許がなくしては長者號を名乘ることが出來ないので人皇二十七代繼體天皇の御代遙々都路さして上り行つた、やがて其由を朝廷にお願に及べば『長者號を授くるには何物か家の寶がなければならぬ、如何なる寶を持ちしぞ』との御尋ね、依つて靈泉及秀子なる娘一人持ちたる旨を言上に及べば『その子寶とて何よりの寶なりとの御諚、畏くも謁見を賜はり娘を宮中に殘し首尾よく長者號を頂いて歸つたのであつた、これそのもとを尋ぬれば蜻蛉によつて長者になりしものなれ

ば、今も尙ダンブリ長者の物語りとして傳へられて居る（ダンブリとはトンボのことを云ふ鹿角の方言なり）

今も尙田山村の奥、平間田には長者屋敷と云ふ所が殘されて居る。

四、大日堂と吉祥院大銀杏の由來

ダンブリ長者の一女秀子・名を吉祥姫と改めて畏くも繼體帝の御寵恩を忝うし皇子五人まで也擧げたのであつた。

茲に歳去り星移り長者夫婦も、寄る年波にやがては彼の世の人とはなつたのである、長者の家産は遂に傾き、全く昔日の面影の失はれたことを遙か都にあつて聞かれた吉祥姫は、いたく嘆き悲しま使下向、小豆澤に社廟を建立し、かねて長者の尊崇して居つた大日靈貴を祀り、郡中の鎭守となし、且つ小豆澤、谷内、大里、川部、長嶺の五ヶ部落を社領ときめられたのであつて是が則ち大日堂建立の源である。

大日堂姥木

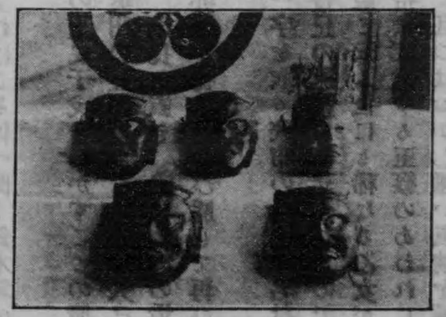
れ、長者のあとを如何にかして傳へんものことの由を帝にお願せし所、早速お許しを賜はり、「神は國の守り、永く世に傳へ殘さんとせば、神社を建るに若くことはあるまいとの仰せにて、善記二年勅

後幾ばくもなく、吉祥姫も遂に黄泉路へつかれたのであつた、臨終に遺言して曰く「妾の亡きがらをば必ず故郷の地に葬り給はるべし」と依つてそのなきがらを遙か都より運び來り、大日堂の傍らに埋め、當時墓印として都から携へた銀杏の杖を挿した所が、それから芽生えして遂今日の大銀杏となつたのである

吉祥院大銀杏

銀杏の大樹、今尙千幾百年の昔を偲ぶへく吉祥院の前に繁つて居る。

周圍三丈



大日堂寶物

稀有の老樹である吉祥院は後の人姫の菩提を弔ふべく建立したものである。

五、謡曲物語り戀の錦木塚

◎相思ふ二つの魂ゆとこしへに、眠りしところ、此處ぞ錦木

奥羽線大館驛に乘替へて、鹿角郡毛馬内驛に降れば、直ぐに眼につく名勝案内、先きに

讀まれる錦木塚は、其處毛馬内驛の前方約一町、錦木村字錦木の草深くも茂るその中にある、古墳苔深くむして悄然の孤影を止め、愁風いたづらに蕭篠たるの姿！何を悲しみ、何をか歎くのであらう、右に銀杏、左に老杉、共に錦木の戀物語りをは永遠に枯れ朽ちぬ樣傳へるのではあるまいかと偲ばれてなつかしい、さればこそ傳へ聞く錦木塚の物語りを記すも亦あだならぬことゝ思ふ。

人皇十三代、成務天皇の御宇とか云ふ、みちのくの土民干戈を動かすことの屢々なりしかば朝廷は郡の司を置いて是が鎭靜を圖られた、北奥州の五郡はかしこくも大己貴命より二十六代の裔、狹名ノ大夫是が司として下向せられ、里長を置き、或は地理の境界を定め、農耕なりはひの道などをも敎へられたので土民も亦之を德とし悅び服して再び干戈を動かすものが無かつた。

帝は其の勳功を賞で給ひ、豐丘の里を改め狹名の一字を取り狹布の里と御名付けになつた狹名官に在ること三十有七年、仲哀天皇の二年、豐丘の邑にて卒せられたのである、（豐丘とは鹿角の古名なり）狹名大夫の八代の孫に政子姫と云ふ世にも稀なる乙女があつた、年は花恥かしい二八の春、手折らば落ちん萩の露、拾はば消ゆる玉篋のあわれにも亦婉やかな恋こそは、譬ふれば野邊に咲く白百合の美くしく且つはおかし難い風情を備ふるのであつた、寵愛一方ならぬ我女の爲めによき婿をがなと心を痛むるは今も隔てなき子故に惱む親の心でなければならぬ、政子姫は狹布の里橋落川の下葦田原町（今の下古川）のほとりに在つて邑人の娘め達に烏羽布織りを敎へたりして居た、狹布の細布（ハセヌノ）と呼んで後の世久しく宮廷への貢ものとしたのは實は此の烏羽布であつた。

其頃、草木二本柳の邑から町に物賣りに出る屈强な一人の若者があつた、何時の頃よりか布織る梭のあるじの、限りなくも美くしく尊い姿を見染めては戀しさのほのほを、心ひそかに我れとわが胸の内に燃やしては一人なやむのであつた。

人知れぬ胸のなやみに耐えがたきおのゝきをおぼえつゝ若人は夜毎〳〵、幾里の路を遠ともせで、乙女の家の門邊に佇づみ、彩り美しくも染めたる錦木を立てゝは曉近き頃失望の悲しみをいだいて、トボ〳〵と歸るのであつた、其頃の習はしとして文書くことゝなく媒人を賴ることもなかつたので、木の枝を束ね、錦の如く美しく彩り、此木を何邑の誰へと念じ我が望む女の門邊に立て置く時、女に心あればその染木中に取り入られ、然らざる時は何時迄も門に殘されるのであつた、此の染木を錦木（ツル）とは呼んだ。

夜毎殖えゆく錦木の數には、男の心も痛ましく余りに無情なきことの怖ろしく、胸のおのゝきを押へつゝも嬉しげに其木を取り入れんとせし時、父の翁は是をゆるさうとはしなかつた。

今は昔語りの『狹布の細道』とは、若き男か姫の家にと忍び通ひの路であつた。露の細道踏み分けて、草深き乙女の家にたゞずめばとて、ゆるされ難き戀であつた。

失望に惱みの胸を懷きつゝ曉の歸るさに涙の顏を洗つたと云ふ涙川は今も恨み多き泪の雫

くを靜かに流して居る。

千夜千東の錦木に只管籠めし一念は空しくも悲戀につまづき、消然と歸つていたつきの身となつた彼こそはいと哀れにもいたましい運命ではないか。

父大海政子姫に告げて曰く『先祖文石、不幸にして民間に落ち家貧の故をもつて共に民間に交ると雖も、狹名大夫より八代近隣皆是を知る、里人に嫁して家名を恥かしむることあらば、始祖に對しては不幸の極み』と云つて二人の戀をば許さなかつた。

男は遂に針藥飲食を斷つて推古天皇七年七月十日還らぬ旅に上つたのであつた。

人づてに聞いた姫の愕きと悲歎とは如何ばかりであつたらうか、純眞無垢なりし姫はやがて一蓮殉情覺悟を定め五日後れた十五日、若き男の亡きあとを慕ひ冷灰一片のむくろとなり果しこそ哀れいと深いではないか。

父大海の歎きも亦ひとしほでなければならない、やがて若き男のなきがらを請ひ受け千東の錦木と共に二人は此處に永久の眠を偕にすることを得たのである。

邑人は二人の墓標しにと、杉と銀杏を一株づゝ植えて後の世人の語りぐさに傳へ、錦木塚とは名づけ呼んだのである。

▲錦木塚の俤　高杉露星

◎そゞろなれや、果敢なき戀を秘してふ、錦木塚の秋は悲しも

◎ぎんなんに、雨や降るらん錦木の、塚の御石に泣ず歌もあれ

◎彩れる千東の木々も立ながら、朽ちぬと聞けば悲しかりけり

◎われ泣かば泪に血潮、交るべし、冷たき石よ、紅き苦むせ

◎ともすれば亂るゝ棱の狂ひ音を、姫の心と知る人ぞなき

◎われ遂に御靈誘はん術もなく、ひたすら石に、涙して來ぬ

神秘幽邃の十和田湖案内

一、緒言、東北風景と十和田湖　二、地理の十和田
三、史上の十和田　四、十和田道路と交通機關
五、湖畔の宿舍と和井内ホテル　六、十和田湖と和井内貞行翁
附鱒の養殖と其經路
七、十和田湖上の勝景　八、知られざりし十和田湖の半面
九、十和田遊覽と時季　十、十和田と名産

一、緒言、東北風景と十和田湖

東北日本に於ける風景の特色とも云ふべきは實に其の蒼凉疎蕩なる點でなければならぬ、自然的に之を見れば、往くところ山岳重疊して平野多からず、氣候、又寒冷にして積雪淺からずとするも、春夏秋冬の推移は、雪月花の眺望を他所にして豪壯闊大、樹林欝叢連山突兀の裡に萬馬並び下るが如き奔湍谿流こそは、げに蒼凉疎蕩なる東北風景の眞命でなくてはならぬ、しかも廣莫未開とも云ふべき我が東北日本に風景名勝の地を求むるならば其數や尠少ではあるまい、太平洋上に古來日本三景の一に數へられたるデリケイトなる彼の松

島の如き、日本海の怒濤を背景とした男鹿半島の奇石怪岩、雄渾壯大なる或は天下稀有の絶勝と迄も過讃の辭を惜まない人さへあるが、其の知られる日の未だ淺くして然も讃嘆推賞の叫びを專にし且つ最近國立公園名題の喧傳せらるゝや、早くも候補の一に數へられるに至つたのは我が誇るべき天下の問勝水の十和田ではなかつたか。

實に十和田湖は鹿角の國の生命であり東北日本の誇りであり、眞に天下の絶勝でなければならぬ。

二、地理の十和田

十和田湖は秋田青森兩縣の境に跨る湖水であつて東北は青森縣上北郡法奥澤村に屬し西南は本郡七瀧村に屬して居る、土地高燥にして湖面海拔壹千四百五十尺、湖狀稍方形に近く南より北方に向つて、二大突角がある、中山半島、御倉半島が之であり、自然內湖、中湖外湖の三灣をなして居る。

周圍凡そ十五里、面積總べて六千町歩水深最も深きは壹千百八十八尺（三百六十米突）に及びしかも是は明治四十二年我國湖沼學界の權威子爵田中阿歌磨氏の實測せる所であると云ふ、而して四圍を繞る山岳は湖面を拔くこと更に五百乃至千尺に餘り數萬町歩の山林は世にも稀なる、原始處女林であつて、草木菌苔の種類豐かなること理學博士三好學氏をして「北日本に於ける植物標本室なり」と云はしめた言に徵しても知らるべきではあるまいか。

清淨なる湖水は恰かも明境の曇りなきが如く、紺碧深く堪える姿はさながら西歐瑞西のジエネーバの湖を偲ぶべく、湖沼學上第三號水と數へられて居る。

湖畔に近きは地味頗る肥沃にして農耕に適する所が多い、殊に路傍林間に野生的食料品豐富にして、菌類には、椎茸、舞茸、初茸、きくらげ、むき茸、わかひ、とび茸、しめぢ茸などあり、野草には、わらび、せんまい、ふき、みづかしは(みづ)ぼうな、わさび、うどたけのこ、三葉せり、しどけ、果實類には、栗、胡桃、山葡萄、あけび、こくわ、などが頗る豐富である。

十和田森林中に於ける主要樹木の名稱

イ、針葉樹、姫子松、赤松、杉、

ロ、濶葉樹、桂、欅、樺、楡（ナラ）、山毛欅（ブナ）、楓、山櫻、朴（ホウノキ）、白樺、楡、いたや、ゑんじゅ、

壇地、藤、ぐみ、さびた等

三、史上の十和田湖

十和田湖に關する歴史沿革、或は神社の由緒等に關して今日傳へられて居る記錄口碑等極めて少く、八郎太郎と南祖坊の傳說を傳へる外、今詳に知ることの不可能なるを遺憾とする。

由來鹿角郡は陸中國の一部であつた、而して十和田湖は初め八戸南部藩の管轄とは云へ、交通の便、絶えて乏しかりしの故をもつて久しく鹿角代官所の管轄に屬し所謂南部の十和田と云ふべきものであつた、此の事實に對しては勿論誰人も異論をさし挿むべきではない

寛文五年には(二百五十年前)鉛鑛を、享保三年には(二百四年前)銀鑛が發見され、毛馬内盛岡の人などが交々採鑛に從事せしも中止のやむなきに至り、弘化二年の頃藩公鑛業の再興に努め良坑を發見したが明治八年以後所有者轉々と移り收支何れも償はずして今や休山狀態にあるのである。

十和田湖を中心としてその地勢より考ふるに、湖は山岳重疊の中に圍まれて交通頗る困難な故をもつて夏季、祭神の頃參籠する以外、人跡絶えて無人の境なりしなるべく、其の通路の如き盛岡地方よりも皆鹿角を經て、大湯、小坂、七瀧の方面のみを往復したものであつたと云ふ。

四、十和田道路と交通機關

故森正隆氏秋田郡に知事たりし頃、十和田の開發宣傳に意を注ぎ、秋田顯勝會を組織して東京各新聞記者團を迎へ紹介につとめてより、先づ交通道路の開修を第一となし巨萬の資を投じて本郡大湯溫泉より十和田湖畔に到る道路を竣工せしめ湖上には、モータボートを艇べ頻りに遊覽者の便を圖つたのであつた。

而して此の大湯十和田間の道路は秋田鐵道毛馬内驛より六里未滿なるをもつて他の青森縣黑石街道の困難にして十里に餘るもの、三本木街道の十三里なるに比し、十和田探勝者の最も近く最も安全なる道路としなければならぬ。

奥羽線大館より秋田鐵道に乘り換へれば僅か一時二十分にして終點毛馬内驛に到る、此處は丁度郡内の中央に位し自動車、馬車、人力車等の交通機關が多數備へられて居る。

今毛馬内驛から十和田湖畔に至る道程を示して見やう。

驛から縣道に出で、北進すれば毛馬内町に入る、町の中央にある自動車の停留所から更に東方に進めば、一里半にして大湯溫泉に着く、此處はほんとうに十和田の關門であり溫泉場でもあるから、旅塵を流して行くもよからう、大湯ホテル、龜屋、千葉、高島、澤井等の旅館がある。

大湯からは愈々十和田街道である、大和橋の前方に小坂鑛山第四發電所の餘水が眞白い瀑布の如く落ちて居るのをまともに見る、一体大湯川は米代川の一支流ではあるが、僅か五里程の間に發電所五ヶ所もあると云ふ科學上の祝福を一身にあつめたものであり、全國に卓越したものではあるまいか。

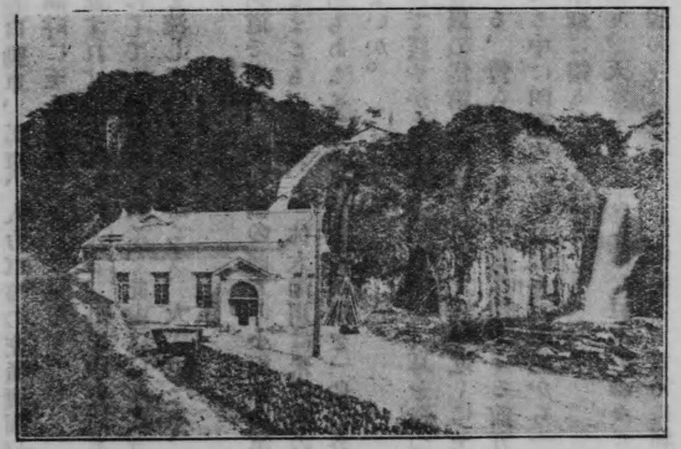
街道はその大湯川を絡んで緩やかに上る、川瀨の響に耳を洗つて進めば、漸く深山の景趣を添へる、第三發電所の扇の岱第二發電所の止り瀧の近くに至れば、山風が肌寒き迄サッと袖を煽つて凉味横溢する、暫らくにして中瀧に達つする前方には第一發電所及七十尺の銚子の瀧が、水煙濛々たる中に四圍の靜寂を破る、此處から一すぢの上り道となるのだが深山大澤の氣分が愈々深刻に鏤りつけられる。

道は溪流に副ふて山を割り、天空を摩するに似た巨木が轟々と突つ立つて居る、白樺肌の錆ある幹は、相抱き、樸雅の枝は握手するかの如く、日光に輝く梢の葉は、小さな囁きを

交はして居る。

濃い紫陽花が諸所に咲き誇れば、蟬や蜩が、様々の曲を奏でる、日蔭の崖から氷よりも冷めたさうな清水滾々と滴り落ちるも亦旅するものゝ身には、神の恩寵ではあるまいか。

天然のセメントを敷きつめた坂路が原始林の間を縫て行く、暫くにして、分水嶺の頂上に達つする、眼を上げて梢の中に眞白く光つて見えるは十和田湖である、林間より洩れる太



古の神秘を語る靜かな湖面を眺めては、旅の疲れも全く忘れてしまふ、自動車の人も、俥の人も馬車の人も皆此處で吐き出される、名づけて發荷峠と云ひ、見歸りの茶屋など云ふ停留所を兼ねた休憩所がある、大湯十和田間は電話で處用をも辨じ得る。

所

峠からは五十六曲りのダラ〳〵坂をひた下りに下りる、木の間から絶えず湖水が見え一碧渺として海の如き湖面には中山、御倉の兩半島は勿論、西の湖に散在する島々は、指呼の間に見える。坂の盡くる所を發荷と云ふ、旅館、十灣閣がある、清楚壯麗、湖畔に臨んで眺望又掬しべきものがある。

五、湖畔の宿舍と和井内ホテル

一ヶ年に二萬人の遊覽客があるとしてもそれは六月から十月迄の短日月である。

案内記として旅館の設備、位置等を詳にするも亦決つして不用のことではあるまい、湖畔に於ける旅館を數へて先づ指を屈つすべきは、十和田ホテル觀湖樓である、發荷より西九町にして追手に到る、追手は和井内鱒の人工孵化場及び十和田開拓の恩人、和井内本邸の在る所、即ち十和田ホテル觀湖樓は實に故貞行翁が、鱒養殖をもつて十和田湖を天下に知らしめ、更らに遊覽者の便を圖らんとして心血を注いでの建築、さればこそ用材の美は堅緻を極め、設計の宏壯なる又稀に見る所、湖畔から凡そ四五十間の前庭はナダラカなる傾斜をなし、白、紅、黄、紫とりどりの草花は一面、水彩繪具をまき散らした樣に咲き亂れても居る。

裏手は翠巒重疊の山が雲つくばかり聳え立つも氣持がいゝ。

邸内には孵化場の外巡査駐在所、秋田測候所に屬する氣象觀測所、或は單純な賣店なども あつて日用雜貨の外、名勝繪葉書、土産物として珍重される「ニキョウ」の釜敷、茶托、ステッキ、其他特製、鱒せんべいなどもある、他日三層樓となすべく著々その準備中の由

階下は洋式の食堂應接室を主とし、階上は日本風の客室を主とする、何れも湖に面して開放され、中山半島は勿論、雲煙模糊の中に其の頂上を顯はす八甲田の山も、一眸の裡におさめられる。

ホテルは大正十年八月第二第三兩皇子殿下御巡遊の際は御休憩の榮に浴し更に十一年八月久邇宮邦久王殿下には、旬日の久しき湖畔御逗留中宿舍の恩命に浴したのであつた、以つて設備の內容を窺ふべきである。

旅客は現在のまゝにして、尙百人を容れ得べく湖畔に於ける絕對的優越のホテルである。

更に遊覽者の爲めに特記すべきは、此處に申込みさえすれば何時でも、發動機船、モーターボート、和船を漕ぎ出して遊覽することが出來ることゝ往還、其他の萬端を電話で各方面に通ずる便の備はつて居ることである。

▲十瀧閣　は明治四十年の新築にかゝり和井內貞行翁の次弟、木村氏の經營する所、大湯温泉龜屋旅館の支店である、こゝには郵便事務を取扱ふ無集配局がある、五六十人位の團体は自由に容れることが出來る。

▲招仙閣　銀山の湖畔にあつて昔からの旅館である、和井內養魚場から約一里半、湖上舟の便あるは勿論である。

▲其他の旅館　瀧の澤には相川旅館、子の口には子の口屋、宇樽部には間名旅館、休屋には十和田館などがあり、遊覽者にとつては大抵宿泊に差支ふが如きことはない。

宿泊料は一泊壹圓五十錢乃至貳五圓十錢である。

六、十和田湖と和井內貞行翁

附　鱒の養殖と其經路

十和田湖の絕勝であることは海內周知の事實となつた、知らるゝ日の淺くして、しかも天下に其美名を歐歌せられる、嗚呼何たる誇りであらう、斯く感ずる瞬間に於てさえ十和田開拓の恩人として大正十一年五月功成り名遂げて永遠の故鄕に還られた、和井內貞行翁を忘れることが出來ない、本書は十和田湖の勝景叙せんとする以前に、是が開拓者たる翁の奮鬪的歷史を揭げて天下の十和田になる迄の經路を記し度いと思ふ。

翁は安政四年舊南部藩領、鹿角郡毛馬內の城主櫻庭氏の一家臣の家に呱々の聲を擧げた。長じて明治七年から十年頃迄毛馬內學校に敎職を奉じ、十四年十二月から、十七年九月迄工部省小坂鑛山支所十和田銀山の役人となり、十七年九月から仝三十年七月迄合名會社藤田組の社員であつた。

十和田湖に養魚事業を初めやうと志したのは、實に十和田支山に職を奉じて、日夕彼の湖水に親しんで居た其時であつた、幾千年來水草が繁り且つ食餌の豐富であつた、此の湖水に古來一尾の魚族をも棲まなかつた、人々は八郎太郎の傳說から、南祖坊がヌシになつた爲に魚族を嫌ふのであると信じて居た。

しかしながらそは一片の迷信に過ぎなかつたのである、即ち湖の東北所謂湖水排出の子の

口を過ぎて大瀑布あり、それに遮られる爲に魚族が登湖し得ないのであつた、參詣者の如きも、精進潔齊を爲す地方人の習俗は、一たび翁が養殖の企を耳にするや、神靈を穢すものとして種々なる迫害を試みたのも亦止むを得ぬことでなければならぬ、然るに當時郡宰であつた花輪町の小田島由義氏も玆に着目する所あり、明治十七年大湯温泉千葉氏より鯉魚の子數萬尾を取り寄せ、最初の放流を試み、而して世人の妄を啓き、翁を激勵したのであつた、之に力を得た翁は斷々乎として志操を堅め養魚事業の爲に全生命を捧げることに決心したのである、次いで鯉、鮒、嘉魚(イハナ)等を放流した、成育の狀、頗る良好なるものあり、前途頗る有望と認められてあつたが、其の漁獲意の如からず、二尺内外の鯉魚も當時一尾數圓に販賣せざれば、收支相償ふことが不可能であり勿論營利事業として全く價値を認め得なかつた、しかし氏の確固たる信念は如斯をもつて前途の希望をなげうたうとするには餘りに強かつた。

當時水產界に其人ありと知られたる、松原新之助氏の意見に從ひ、主力を養鱒事業に傾注するこゝなし、明治三十年翁は鑛山を辭すると共に、十和田湖に居住を移し、各地の養魚所を見學踏査すると共に、長子貞時氏をして專心水產事業の學術的研究をなさしめ明治三十三年は、日光鱒を移入し人工孵化の方法によつて放流を試みた結果鱒の群游を見るに至つた、然しながら是又散在性の爲、漁獲意の如くならず、むしろ失敗の餘儀なきに至つたのであつた、此頃に於いて資金の欠乏甚だしく、既に父祖傳來の田畑山林は人手に移り

和井内翁

郷黨一人として翁の成功を信ぜんとはしなかつた、殊には知己親友すらも、顏を見れば金の無心を恐れて面をそむけ、親戚故舊又狂人と見做して更に顧みるものなく、恰かも四面楚歌の孤獨であつた。

無知愚蒙なるものに至つては、十和田神靈の祟りとなし、之を穢したる罰と罵るものさへもあつた。

辛酸もとより胸中に期したる翁の豪邁不撓の精神は、頑として動かざるのみならず、東奔西走更に善後の策に寢食をも顧みるのいとまがなかつた。

明治三十五年青森水產試驗場に出頭の折も折、信州に於いて寒天製造會社の支配人中島庸三なる人あり、談偶々十和田湖養魚失敗のことに及ぶや、北海道、千歲郡、支笏湖は四圍其他の事情よく十和田湖に相似の點あり、其處に產する「カバチツポ」と稱する鱒魚こそ、適當なるべしとの誠意ある進言を信じて之を求め、人工孵化を行ひ、三十六年春五月、三萬尾の鱒兒を放流したのであつた此の鱒は、放流三年にして產卵の爲め最初放たれたる場所へ還ると云ふ學術上所謂回歸性の鱒であつた。

成否如何はまさに三歲の後にあり、しかも玆三年間に於ける慘憺たる苦心は、到底筆舌の

よく及ぶ所ではない、奈落の底の悲境とは此の當時に於ける和井内翁胸中の心事そのものであつた。

如何に前途、希望に輝けばとて失敗につくに失敗をもつてせば時に絶望の淵に沈む日も無いではなかつたであらう。

此時に當り氏の側を離れず、激勵して常に一縷の光明に鼓舞せしめ、力となり、慰めとなつたのは實に夫人勝子氏の力である、(勝子氏は文久三年三月十日生、明治十一年一月和井内家に嫁す)勝子氏は健氣にも十和田湖畔を死所と定め、翁の慘苦經營を扶け自若從容として只管その成功を待つたのである。

鑛山あとで觀湖樓と名づけた旅館を經營して一家の生計を助けたのも亦その頃であつた。

おぼつかなき、一縷の希望をつなぐ三年目の明治三十八年、秋十月の一日、果せる哉鱒魚の大群銀鱗をひらめかして勇ましくもおどるが如き其の姿を放流の場所指して歸り來つたのである。

久しく憂愁曇り鎖されて居た湖面は俄かに、喜色の波を湛へて、平和の輝やきがみなぎつた。

此の事實を目擊した翁は狂氣せんばかりの歡喜におどつたもことわり、先づ走つて勝子夫人を湖畔に誘ひ、もろ手を堅く握つて暫らくは無言、感激の泪に咽せぶのであつた。

見よ波瀾重疊の生涯を、鉛山から一魚なき湖面を瞰下ろして魚類養殖の志を立てた二十六歳の壯年血氣の俤を、慘風悲雨の二十年、堅忍不撓、蒲脛巾(ガマハバキ)の和井内と笑はれながらも粒々辛苦事業と戰ひ、赤貧と闘ひ、且つは千古の迷蒙を破つて敢へて怖ぢなかつた翁は、遂に此の和井内鱒、(姫鱒或は十和田鱒とも云ふ)によつて、十和田湖を開拓し、やがては是迄かくれたる絶景を天下に知らしむる基礎となつたのである。

勝子夫人

和井内神社に祭られたる女史

鱒魚の大群を前にして熱涙にむせんだ勝子氏の歡びや如何ばかりであつたらうか、姫鱒人工孵化の成績益々良好、十和田名產とし五日、勅定の綠綬褒賞を賜はつて其功勞を表彰せられ、大正十一年春五月病危篤の報天聽に達するや特旨を以て正七位の位記を賜はり生前の功をば重ねて、旌表の光榮を浴したのであつた。

貞淑、珠の如き賢夫人勝子氏は、明治四十年三月病を得て逝かれた。湖畔五十戸約二百人の住民をひとしく隣人の愛をもつて慈くしみ、彼等の生活を救ふことの屢々なりしだけ、

哀惜せらるゝこと限りなく、永久に夫人の高德を傳ふべく、湖畔民は神に祀り勝漁(セウリヨウ)神社の尊號を呼んで追慕の至誠をあらはしたのであつた、十和田湖上、水涸れざる間、湖畔を彩る一木一草の悉く朽ちざる限り、和井内夫妻の名は永遠のものであらねばならぬ。

七、十和田湖上の勝景

十和田湖がその絶景を廣く知られたのは和井内翁が鱒の養殖事業で天下に其の人ありと知られた明治四十年の頃からであらう、帝都新聞記者團の招致、道路の開鑿、汽艇の整備から順次自動車の運轉となり、學者、名士、旅行家、學生、總べての階級が探勝に避暑に遊覽に入り込むやうになり、大正十年の八月は長くも秩父、高松宮兩皇子殿下、行啓の光榮に浴し今年八月は、久邇宮邦久王殿下、旬日の間を和井内本邸に暑氣を避けさせ給ふたのであつた。

明治四十年の頃迄は、十和田神社參詣人の外、是に赴くもの頗る尠なかつたにも拘らず、年久しからずして、海内無雙の絶景と知られるに至つた、その一事實よりするも如何に十和田湖は、天下に誇るべき、内容を悉く備へて居ることを推察するに難くないではないか湖畔に連亘する太古の森と、紺碧を湛ふる清冽なる湖水とが、視線の外迄も一帶を清淨境として天然の妙工もあつめた姿こそはやがて十和田湖の光りであり、輝きである。

實に十和田湖の美は湖岸の景にあり、湖水の清冽にある。

遊覽は追手よりするも發荷よりするも休屋を起點とする、船は澁(ウス)みどりの湖水を割つて、白泡を吹かせつゝ一直線に休屋をさして進む

前面には中山半島が九つばかりの森が續いたやうに突出してその前に島々が散在して居る休屋の棧橋に船を捨てゝ上陸すれば、形ちばかりの旅館賣店などがあり、此處から十和田神社への參道がある、老杉雲を突くばかりの並木中をくゞり拔けて熔岩の峻坂をよぢ上れば社前に出る、神社は日本武尊を祀りその傍らに熊野權現の小堂宇

十和田芳谷地の崎

もある、此處から細道を更に上れば、南祖坊の石像を安置した御堂がある瞰おろせば湖の深潭は青葉の間から濃藍色を湛えて居る、そこの絶壁には長さ九間、四十四段の鐵梯がかけられてあり、それを下れば、お占ひ場である、吉凶禍福、掌をさすが如くあたると云はれて居る、七月三、四、五の三日間は神社の盛大なる祭典が行はれ、幾千人の人は大抵其年の作柄などを占ふ爲に毎年參詣を怠らない。

神社の左方に神苑と云ふ一小丘がある、其上から西の海一帶を眺め裏參道を通つて濱傳ひに進めばもとの棧橋へ出る、斯くて再び船中の人となれば遊覽の氣分も亦愈々深くなる。

◆内湖

休屋の湖畔を御前が浦と云ふ、船は此處より凡そ北を指し中山半島に沿ひ、曲線的に除行する、差當つて惠比壽、大黑の二島がそれ〴〵小さな祠をのせて居る、一握の土もない裸岩に何れも數十の姫子松を頂き且つ灌木、蘚苔が滑らかに之を掩ふて居る、優雅纖細誠に愛すべきもの、更に進んで、自籠の入江に船をとめる。其處には天邊の雲を遮るやうな孤岩が屹立し、南祖坊がこゝで入定したと傳へられて居る、鐵梯三ケをよぢ、辛うじて登り得る、頂上からは西湖一帶の景が眼下にあつまつて見える。

灣口に鎧島、兜島を初めとし、船の進むにつれて、扶桑崎、瓢箪崎、高砂の浦、蓬萊島、六方石、種子ケ島、ぐみ島、龍が崎、見返りの松、半島の盡くる中山の崎など、何れも懸崖千年の老松を頂き、萬古の碧水を湛へ、礁下波靜かなる所、鴛鴦夢圓かなるに至つては幽邃の極、仲々に筆舌の及ぶべきではない、一峯は一峯の趣きあり、一角は一角の風情を添ふ、一枝一葉の樹、是美を競ひ、一皺一苔の石、皆奇にして美ならざるはなく、送迎應援にいとまがない。

之を總ずるに中山半島西岸の景は、艶麗穩雅にして、絶えて陰鬱悽愴の感を與ふることなく西の湖の名にふさはしい、デリケイトであるのが特徴である。

◆中湖

中山の崎をめぐり、日の出の松があつたと云ふ岩下を過ると中湖に入る、此處は方一里、所謂往昔の噴火口であり、水深最も大なる所水は濃藍、黑色に輝き赭岩斷崖、湖面にそばたつ、岬角、曲浦、俄然西湖の纖麗を破つて悽寂の鬼氣、自づから迫るものがある、御倉半島の西部は、大体に於て、赤い岩、褐色の岩、黑い岩が、削り立てたやうに半島の全部

を占めて居るに對して、中山半島の裏面、即ちその東方は斷岩絶壁の間を綠林、鬱蒼としてこれを掩ひ、そこに異なれる二十つの色彩が相互映發して云ふべからざる神秘がある、皷が田がかれるのである、皷が浦、蠟燭岩、千鶴が崎、和高砂小町岩、業平岩、御占場の劍岩、屏風岩、烏帽子岩崎御室、鴨崎、日暮の崎、八雲崎など、或は崎となり浦となり奇石怪岩の相咬む姿、老幹錯節して、蟠龍の水を飲むが如く、怪詭萬狀、よく數ふべく

もない、更に千丈幕の壯嚴雄大に至つては天下何物か是に比すべきであらう、中湖の遊覽此に終る、遠く望めば陰欝悽愴の氣迫るも、近く湖岸をたどつて奇勝に親しめば、風光の明媚或は西湖を凌ぐものあるべし。

中山の景を絢爛艶麗となせば、御倉の景は豪宕悽寂とも云ふべきであらうか、更に中山半島の女性的なのに對して、御倉半島は男性的である、特に其の先端御倉山の如き何れの方面よりも頂上に昇り得ぬ爲め、近年迄猿が群り棲んで居たものだと云ふ。

遊覽船賃金表（追手ヨリ）

	モーターボート 三人	四人	五人	六人以上一人分	和船 三人	四人	五人	六人
西の湖から中山の崎迄	四、五〇円	五、〇〇円	五、五〇円	一、〇〇円	二、〇〇円	二、七〇円	三、〇〇円	五、五〇円
中山半島全部	五、五〇	六、〇〇	六、五〇	一、二〇	二、四〇	三、〇〇	三、五〇	六、五〇
西の湖から中の湖迄	六、五〇	七、〇〇	七、五〇	一、三〇	三、〇〇	三、五〇	四、〇〇	七、五〇
西、中湖から子の口迄	七、五〇	八、〇〇	八、五〇	一、五〇	四、〇〇	四、八〇	五、六〇	一、一〇

學生、團体ハ人員ニヨツテ特ニ割引ス

八、知られざりし十和田湖の半面

十和田湖の景を賞する所謂遊覽者は、皆中山半島の全部と御倉半島の一部を汽艇或は和船に乘じて巡遊しそして歸途に着くものであつて、其の大半の狀態は今尙知られざるの姿にある。

追手（和井内ホテル所在地）から西北一里の地に鉛山がある、途中、湖畔の密林が全く日光をさえぎつて歩行は容易でない、けれど林間の靜寂さ、林相の美しさは、眞に形容の言葉を知らない位、なせ此處に立派な道を通じて此の幽玄さを人達に味はせないかと遺憾に思はれる。大川岱は鉛山から近い所にあり、開墾者の村落である。此處を更に十五町程進めば、昔さかえた銀山がある、招仙閣と云ふ旅館が一軒、勝景の地に佗びしげに建つて居る、此邊から湖の北岸になりそして風光が漸く大きくなつて來る。道なき湖畔を辿る孤獨さは、哀愁の中に又異樣の美感をそゝるやうにも思はれてうれしい、湖水はさながら濃い丹礬の汁を一つ杯に湛えてゐる樣だ。

沖の方は漂渺として波は靜かに、中山半島の如き、むしろ盆景のやうにしか見えない、銀山から二十町で、瀧の澤に出る、黑石舘と云ふ旅館が一軒ある、御倉、中山の二大半島をはさんで、三大灣が勿論、全湖面の大景をほしいまゝに眺め得る地點で、青森縣黑石町に通ずる道の地點であり、そして區域は鹿角郡である。

瀧の澤から子の口迄は三里半の道程である。湖畔の砂利をふみつゝ茫々たる湖水を右手に

して更に東進する、五六尺の蕗の林も珍らしく、水鳥のけたゝましい羽音にこだまして響くのにはびつくりさせられることもあり、また巨木が横倒れになつて行手を塞いだり、谷川の水が一面にぬかりみを拵へて居る所もないではない、千古萬古、斧鉞未到の原始林は幾十尺の高さに並んでゐ居る、葉は日光に輝いて無邊際の碧空に光り、枝は茂つて一縷の光りをも漏らさうとはしない。

谿流の綜々、蘇苔の滑かに濕れる、涼風の汗を拂ふ、皆是別世界の姿ではないか、右には明淨鏡の湖、左は黑暗千古の大森林、靜かに歩み、靜かに語り、靜かに想ひ、靜かに讀み且つは書くことの瞑想的なる深さ、神秘さ、雄大さは、獨り、知られざりし十和田湖の半面、湖北の獨占する所でなければならぬ。十和田湖の全き景は湖北を俟たずには絶對に出來ないと思はれる。

更に十和田湖の絶景を極めんとする希望の人は銀山の西方に聳ゆる、白地山の高原を跋渉することである、湖上に達すれば、眼下に明鏡の靈湖をみおろし、近くは岩木山の英姿を仰ぎ、津輕平野を一眸の裡におさめて遠く鰺ヶ澤方面迄も望まれると云ふ。

九、十和田と遊覽の時季

十和田湖遊覽に適するは、五月中旬の消雪後より、秋は十月下旬の積雪前ならば、敢て其の他に季節を選ぶの必要がない、春の十和田は、雪融け了れば、花と綠をもつて滿山を裝ふ、花は櫻をもつて初まり、躑躅、藤、之に次ぎ六月に入れば、新裝の綠り愈々深く、百千の鳥、にわかに春を歡ぶの曲を奏づるも面白く、湖畔波靜かなる夕、河鹿啼く音も亦遊ぶものにとつての樂しみでなければならぬ。

夏は遊覽に最も適する、氣清く澄んで涼風たもとを拂ひ、朝夕は特に心身爽快を覺える、空氣の變化が多く、山色水光が刻々に移り行く趣も魅せられる夏の景色である。

十和田の秋は又春夏にも增して美しさを添へる、滿山の紅葉、錦繡を飾つて燃ゆるが如く湖面之を映じて更に幽艶を彩どる。

以上述べたるが如く春夏秋、湖上の眺望にはそれ〴〵の特異點があるけれど、能ふべくんば、月夜の頃に遊ぶことも亦、興趣を添へる一大要件である。

月を浴びたる十和田湖は、日に照さるゝ面影を一變して美觀こと更に掬すべきものがある萬籟寂と靜まつた月下の湖上に舟を艇べ、さゞ波の漂ふがまゝ、舟人の唄を聞くが如きは實に憧憬のユートピヤでなくて何であらう。

十、十和田と銘産

十和田湖の名産は何と云つても鱒である、大いさは普通七寸位から一尺位迄、脂肪分に富んで居るが割合に淡泊にたべられる、鹽燒、田樂、餡かけ、フライ、刺身、なますなどの調理方法が普通で燻製や、罐詰にも加工されて居る。

鮒や鯉もとれるが、量が多くない、數年前八郎湖より移した蝦が非常に繁殖して居るがまだ收獲せずに居る、兎に角全湖水の漁業權は悉く和井内氏の握る所であり、現行水産法は

永久に此の特權を保護するものである以上、十和田湖は鹿角のものでなければならぬ、曾つて此の漁業權を奪ひ取らんとして失敗せし青森縣人は、今尙强ひ反感を抱いて居るらしい。

湖畔數ヶ所に轆轤細工の工場があつて、種々珍奇な器物を製作して居る、他所に得易からぬ良材をもつて、如何なる注文にも應ずるのであるから、土產物や、記念物を調へるには好都合のことゝ思ふ、「ニキョウ」のステッキ、釜敷なども、都人士には珍らしいものであらう。

十和田路は古來秋田路と共に知られた名物である。

奥羽アルプスの奥秘境八幡平

一、二縣五郡に跨る大高原　二、國立公園候補地としての八幡平
三、八幡平の王樣阿部藤助氏　四、登山の順路
五、谷内と永田發電所　六、熊澤不動岩と坂比平の石井翁
七、燒山口　八、石仮戸口
九、フケの湯口　十、八幡平登り
十一、曙口（歸路）

一、二縣五郡に跨る大高原

神秘的な田澤湖から雄大な森吉山に渡り、更に燒山の火口壁を蹴つて八幡平の大高原を東南に下ると、所謂南部片富士の稱ある岩手山に辿り着く、土地の人はいふ、八幡平の高原は東西十二里南北七里あると、實測不明ではあるが、何しろ奥羽アルプスの中央に蹲屈し群山を睥睨して居ること丈は儼然たる事實である。

二、國立公園候補地としての八幡平

十和田湖が國立公園候補地として已に調査に着手されつゝあることは慶賀に堪へないが、頃日岩手山をも候補地に豫定されたことは記者の宿望成就の曙光であつて柞舞の至りである、吾人は宜しく二縣五郡に亘るこの大公園を極力宣傳して國立公園とすると共に無盡の寶庫を開拓して無限の樂園を實現せしむる義務がある。

三、八幡平の王樣阿部藤助氏

氏は宮川村長の職に在つて村治に模範的治蹟を揚げつゝあると共に、この山に關するあらゆる計劃と抱負とを持つて着々實行に取りかゝつて居られるから登山者は先づ氏を訪問して一切の案内を請ふのが一番に安全である。

四、登山の順路

（イ）花輪 ―二里十八町― 谷内 ―一里二十町― 熊澤 ―二十八町― 坂比平 ―― 燒山口 ―― 石仮戸口 ―― フケの湯口

（ロ）燒山口。

坂比平 ―二十町― 志張ノ湯 ―十町― 錢川ノ湯 ―一町― トロコノ湯

坂比平 ―二里十五町― 又一硫黄山
　　二里　　會利瀧

（ハ）石仮戸口。

坂比平 ―一里十町― 大沼 ―二町― 澄川 ―五町― 後生掛（地獄谷）―二十一町― 陸羽鑛山

（ニ）フケの湯口。

坂比平 ―一里― 切留平 ―三十町― 風穴 ―六町― 國見 ―二十町― フケの湯

（ホ）登山口。

フケの湯 ―三十町― 田代の奇勝 ―二十二町― 墓沼 ―二町― 長沼公園

（ヘ）曙口（歸路）

坂比平 ―一里― 根瀬 ―十二町― 林崎 ―十町― 夏井 ―一里― 長内 ―二里― 花輪

五、谷内と永田發電所

花輪から南へ大里、宮麓を經て一ノ渡橋に出て八森（二千九百八十三尺）の裾を廻つて谷内に入るまでは全く八幡平が目に入らない、若しも終始その雄姿を仰ぎながら行かうとならば、尾去澤街道の稻村橋に出で、左折して米白川の川沿に曙村を經て谷内に入るがよい、谷内は大湯に次ぐ大村であつて相當の商店もあり八幡平に登山する關門になつてゐる。

永田發電所は谷内川を引いて設け、遠く尾去澤鑛山に送電して居る、用水路の水門は根瀬を上つて間もない赤平部落の河岸にある、もう海拔　千尺以上になつて居る所である、河床の石ころも大きくなつて水勢が烈しくなつて來る。

六、熊澤不動岩と坂比平の石井翁

熊澤分教室の白堊が見えそめるころ、前方に風光のたゞならぬ岩山が突兀として河流を壓してそゝり立ち、水聲その岸に激するを見るであらう、これぞ熊澤不動岩として知られて居る名勝である、試みに對岸から岩山を見上げると、小さい祠が落ち込んだらしい巖窟の中に神さびて見える。

不動岩を過ぎて間もなく、小さい坂を登りつめると忽然前山を押しのけて茫莫たる曠野が展開する、もう己に八幡平の仙境に一歩足を踏み入れたのだ、この邊一体千三百餘尺の高原であるから八月の眞夏に行つて見ても野の下草は何となく黄ばんで鳴く虫の音も秋めいて聞える、阿部藤助氏が建てられたと聞く一軒屋を左にだら〳〵坂を下ると坂比平の人家が五つ六つ靜かに點々して居る、道に沿ふて硝子の中貫障子を建てめぐらした一屋がある これこそこの山に其人ありと知られて居る石井嘉一翁の棲家である、咲き亂るゝ草花や、見なれぬ高山植物を庭前に眺めながら椽先きで翁の經驗談を聞くと、感興しきりに湧いて我を忘れてしまふであらう。

翁が溪澗から釣つたといふ大きな嘉魚（イワナ）が晝食の膳に上る、時折り道下から翁に會釋して行く人々は、皆この山に親しい旅人達なのである。

七、燒山口

（イ）老澤。

坂比平を出ると間もなく、河をへだてゝ死せるが如き二軒の人家こそは本郡最南端の老澤部落である、途上の邑もこゝが最後かと思ふと、何とはなしに誰しも、談い寂しみを感する。

(ロ) 志張溫泉。

坂比平に近いのと皮膚病に特効があるので浴客が多かつたが山崩れと洪水の危險があるので近年衰微してゐる、有志の者湯を安全な場所に引いたけれども微溫であるのが遺憾である然し「燒けど」には神の如き奏功があると聞いて居る。

(ハ) 錢川溫泉、上トロコ、下トロコ溫泉、赤川溫泉。

道の直ぐ傍に上トロコの溫泉がある、湯守の家もあつて稍々心地もよいけれども錢川下トロコの溫泉は何れも道下の河岸にあつて夏などは草息れに咽せ返るやうな場所である、然し湯の効能は昔から知られて居るので相當の浴客がある、赤川溫泉は尙この溪流の奥になつてゐる。

(ニ) 曾利瀧。(裏見ノ瀧)

又一硫黄山から十數丁しかない中ノ澤川の下流にあつて直下七丈餘、見事な銚子の口から眞直に瀧壺に落ち込むと、雲霧四邊をうづ卷いて盛夏尙肌寒い、銚子口の下に巖窟があるので得難い裏見の奇觀も備はる、河中の御座石に踞して見やると、瀧壺の左岸は繁茂せる雜木林の急斜面で、右岸は斷崖の頂に樅姫子松等が欝々蒼々として風光一段の美觀を添へる。

(ホ) 又一硫黄山。

途上筋骨逞ましい立派な若者が重い湯華の叺を背負つて通り過ぎるのは、阿部藤助氏經營の又一硫黄山から來る、谷内の青年達である、其所には頑丈な小屋一棟があつて青年達の合宿と事務室とに仕切られてある、すぐ近くに湯槽の設備もしてあるので、一浴を試みながら東方を眺めると、五ノ宮、皮投、四角の諸山をからんだ奥羽アルプスの一劃が、雄渾な景といふよりは寧ろ崇嚴な神殿のやうに現出する。

(ヘ) 燒山火山。

(1) 火口壁。

又一を出ると道は栂森の懸崖に危げに通じて居る、湯華の白くかゝつて居る湯の溪流を越えて、いよ〳〵火口壁の削落かと思ふやうな絶壁を登りはじめると、途中幾つもの岩の割目から噴き出す硫黄氣に不意を打たれて驚く、試みに其割目を碎いて見ると、飽くまで黄色した美しい硫黄華が一面に附着せるを見るであらう、曾つて淺野總一郎氏が數十萬金を投じたのはこの岩壁ださうだ。

(2) 火口原。

火口原に入ると赤塗りの鬼面を想像せしめるやうな火口壁がぐるりと我を取卷く、火口原湖の一隅からしきりに朦々たる白煙を吹き上げ〳〵遠雷の響をなして我に迫つて來る

自然の斧が彫みあくんで滅多打ちに碎きかけたやうな眞黑な岩塊が猛獰な姿をしてぬつと突立つて居るのは火口丘鬼ヶ城である。

(3) 鬼ヶ城。

尖岩を踏んで漸く頂上に行くと、技巧に過ぎるやうな自然の庭園がある、南側にある鬼が棲息したといふ洞窟を見了ると、戰慄を覺えるやうな絶壁の一線を渡つて湯華の湖に出る、阿部氏の湯華は、こゝから堀り取るのである。

(4) 御鉢廻り。(鳥海山の遠望)

急峻な火口壁の一角から登つて御鉢廻りをすると、流石に四千五百尺の空濶なる展望の遙々さ、全く陸羽アルプスの洪邃秘奥の幽幻味に醉はされて了ふ、波と打つ群山の末、遙かに淡く〳〵芙蓉の雪を見せて居るのが鳥海山である、若し夫れ西天雲なきの日、遠く壯嚴の落陽を見れば、金蛇波に躍つて日本海洋上の一線を望むのである。

荒刻みに刻んだ權現岩を廻ると酢ヶ湯への下り口に出る、熱湯を河と流して居る恐ろしい酢ヶ湯は、こゝの天邊から一里の谷底にある。

八、石仮戸口

(イ) 大沼(權兵衛沼)

大沼は圍周一里もあるさうだが、大部分は沮洳地に變り果てゝ水面は僅かに其一偶に光つてゐる、權兵衛爺の養鯉場として有名だつたが今は徒らに廣い淋しい沼となつて了た。

(ロ) 澄川。

もとの澄川製錬所趾の所から右に入る山路こそは又一鑛山への本道なのである、途中ベコ谷地と稱する大きな沮洳地がある、三千六百尺の高地をなして居る。

(ハ) 後生掛(月世界の稱ある地獄谷)

目も眩むやうな赤色の絶壁を分水嶺として見るから恐ろしい地獄の大釜が左右の谷一面に並べられてある、釜の中には樣々な色をした泥の汁や熱湯が、惡魔の喘ぐやうな凄い音立てゝ、ぐら〳〵煮え立つて居る、毒瓦斯が出るといふ石仮戸硫黄山の奥まで行くと、廢山となつた事務所跡の荒凉さ、萬物を死滅し盡した月世界もこれかと思へば息詰る心地になる。

(ニ) 陸羽硫黄山。

フケの湯と嶺一つ隔てゝ陸羽硫黄山がある、硫黄採礦の爲に谷一面非常に荒んで居て寂しさを感ずる、元は立派な間歇溫泉だつたといふ湯沼も、採礦に荒されて今は色恐ろしい魔の池になつてゐる。

九、フケの湯口

(イ) 切留平。

折河島川の水聲を左に聞きながら、かなりの急坂を登り詰めると高草の匂ひ漂ふ曠原に放牧の牛が草にも飽いて其處此所に寢そべつて居る、一面に織りなす花野を流るゝせゝらぎ

に、足冷えを感じながら鳥の鳴く音に我を忘るゝも、亦仙人の境ではないか。

(ロ) 國見。

切留平を過ぎるとまた〳〵坂路に取りつく、ふと越し方を顧みると嬉しや鹿角の國が三千尺の下界に展開する、水聲次第に遠くなり鳥の鳴く音も四隣に山彦して深山の感を與へる途上に風穴の奇觀がある、蘚苔滑かに雜木に覆はれたる巨岩が墓の如き口をぐわつと開いて及のやうな冷風を吹きに吹く。

(ハ) 谷地。

側目もふらず大樹の中を喘き〳〵登ると突然！全く突然洞然たる谷地に出る、溫古樹に圍まれた可成の廣さを持つた沮洳地で、歩くに連れて生溫い水が足を埋める、底知れずぬかり行きはしないかと思ふと何となく夢の世界に引張つて行かれるやうな變な氣持になつてしまふ、谷地の端から石仮戸口へ通ずる新道が開かれてある。

(ニ) 長沼。

谷地の中程から左方の密林に分け入ると長沼の明鏡がある、鯉魚が放たれてあり一葉の扁舟も浮いてあるから湯治人等が時々釣を垂れて徒然の慰めとするによい。

(ホ) フケの湯。

(1) 熱湯の側に湧く清泉。

雨の降る時だけ川をなすと聞く水無川のごろ〳〵石を踏んで岨路行くと湯の香してフケの湯が展開して來る川向ひの窪地に巨岩を吹上げ〳〵濛々たる白烟の立つてるのがマツ先きに目につく、沸々たる音もなく巨人の喘ぎするやうな音立てゝ吹きに吹く、その少し上の大笹原の中に清冽指を落すやうな冷泉が湧いてゐるのみならず噴口と相距る十間計りの處からも清泉湧出して湯治人の飲料水や用水になつてゐる、造化の神の皮肉ぶりに驚かざるを得ない。

熊澤硫黄山燒山谷壁

(2) 九軒の堀立小屋と大自然の溫ドル

一番小高い處に陣取つた小屋は、この村の生命財産を一手に掌握してゐる湯主の住宅である。

湯治人の雜居してゐる八軒の小屋も三つの湯槽もこゝの本陣からはよく見える、小屋の土間に蓆敷いた其上に一枚の呉蘆置いて寢ころぶと、大自然の溫ドルで程よく全身が蒸かされるのだ、何のことはない沸々たる噴火口

に蓋して寢て居るやうなもので危險といへば危險だが神靈の怒りにふれるやうな不淨者の這入らぬ中は大丈夫だ。

(3) 湯治客。

多い時には五百人餘の湯治客があるので三千三百餘尺のこの高地に、時々山神を驚かすやうな般賑さを見るのである、客は郡内よりも寧ろ北秋田、山本、岩手、青森、北海道方面に信者が多く、千里を遠しとせずして來る浴客が年々增へる一方ださうだ。

(4) 湯の効能。

「熊の湯」は硫黄泉は硫黄泉に、〇一二九のラヂユーム、盧分鐵、アルカリ等を含み黑褐色を帶びて居る、昔傷負ふた熊がこの湯に浸り疵を癒して逃げ去つたといふ傳說がある程で効驗頗る顯著である。

「効能」皮膚病、神經痛、僂麻窒斯、梅毒、呼吸器諸病、胃腸病、婦人病等。

「瘋氣の湯」は白く濁つて居る、創傷、冷えより起る諸病、眼疾等に効能がある。

(5) 湯治料。

阿部氏の經營になつて居るので隔日毎に牛二頭で湯治客の要する食用品を運んで呉れる本陣からはお客に通帳を出して置き下山の際に總勘定をするやうにしてある。

〇自炊者一日一人拾貳錢（但十二才以下は半額）鍋貳枚と座席と湯錢とを加へた計算

〇宿泊者一日三飯で六拾錢位

〇谷内から荷を着けてフケまで行くとすれば貳圓五拾錢位

十、八幡平登り

(イ) フケの湯の溪谷。

フケの湯の溪谷に入ると、まるで噴水のやうに熱湯を噴き揚げてある所や、湯瀧や、秘密の蓋してある釜などが、いくつも〳〵あつて山肌は慘ましい程荒されてゐる、立木も根こぎに無理矢理に地肌を剝ぎ取つた絶壁こそは花輪方面からも見えるフケの湯の目標である。

(ロ) 笹の海。

大笹藪に手の甲を剝り切つたり、道に朽ち倒れて居る温古樹の鹿柴に向脛を打つたりして稍々眺望の出來る地點に入ると洋々たる笹の海に達する、笹の海！

實際、際涯もなき笹原で覆はれた廣漠たる八幡平を形容する詞としてはこの外にないのだ若し夫れ白雲低迷して浪打ち寄する笹原を包擁するとき、怒濤地を撼かして全くの海と化して了ふ。

(ハ) 田代の奇觀。

海拔約五千尺の地點に入ると海は益々廣くなつて勾配もほとんど無い、まるで平野だ、この邊に田代といふ神の手慰に出來た箱庭がある、道を挾んで池が二つ、一つの池には水葵のやうな草を植え、一つの池には蘭草に似たやうな草が植えられて一草の雜りもない、古老は云ふ、右は秋田領で左は南部領だが故に區別されたのだと、神樣に聞いて見たい氣が

する。

(ニ) 林空の偉觀。

五千三百二十二尺の三角點を眞中にして東西南北に温古樹、藪笹を切り拂つた四條の大溝が堀られてある、餘りの平坦さに測量に見通しが利かんので切り拂つたのださうな、樺太境界線の林空も思ひやられる偉觀である。

(ホ) 墓　沼。

低くなつた温古樹をくぐつて急に陰氣な温地に下り行くと俄然物凄い湖面に遭遇する、噴

八幡平蒸温泉大谷地の景

火口に水を湛えたらしく摺鉢の底に、人を呪ふやうな青い水が暗く陷ち込んで墓の目のやうに光つて居る、この附近の谷地には例の神の試みられた美しい箱庭が數々ある。

(ヘ) 長沼公園。

苔蒸して小暗い石ころの小溪を潜行して下ると忽焉として長沼公園の崇高の靜澄な別天地が現出するあゝ長沼公園！

讀むものは文字の奇に驚くであらうが然し一度この風光に接したことのある人は誰でも記者の情趣

から出た自然の詞であることを容して呉れるであらう。山がありつ丈の親しみと、やさしさを盡して其滑らかな、革のやうな草を延べ、其草には一面に惜氣もなく白と黄との花をつけさせて居る其中に、雪解の水を湛えた可成の長さを持つた、くの字形の長沼がそつと置かれてある、そして地面は緩い勾配をなして歩々に新しい花つけて果てしもなく展開して行く、亂鶯の音も聞える。春嶽(四七三一尺)、茶臼嶽(四七三四尺)、安比嶽(四三七四尺)柚角嶽(四四八五尺)の四山が遠くからこの光景に纏りをつけて呉れて居るかのやうに聳えてゐると、岩手山はまた時々姿を現はして雄大な景を添へて呉れる、沼の西岸には萬年の雪が黑光りして殘つて居る、公園の草場に寢轉んでゐると大自然の空氣に恍惚として全く花野の中に吸ひ込まれて了ふやうである。

十一、曙　口（歸　路）

(イ) 樫内の不動岩。

熊澤川を渡つて根瀬に出て曙村に這入つたならば、必ず樫内川の川上を探嶮して見るがよい、林崎の部落を過ぎると間もなく河岸に脚底を洗はせて巖々とそゝり立つ巨岩こそは樫内の不動岩である、古くから近郷に知られて居る名勝である。

(ロ) 田の澤一燈園。

西田天香氏のお弟子達の道場として名を知られてゐる田の澤一燈園は、三方高（四〇二九尺）の一峯にある田の澤鑛山に置かれてある、下座の行者達と園の道者達とが、雲の去來す

るまに〳〵平和な共產生活をなしつゝある。

(ハ) 白蛇沼、浮島の奇景　田の澤から東方十町許りの山巓に浮島で有名な白蛇沼の靜淨境がある、物凄いまでに靜寂な密林の中に、熒々として吹く蓮にも吸ひ込まれるやうな氣がする汀に繫いてある大小二つの浮島を解いて水上に棹さすも一興である鯉魚も放たれてある。

(ニ) 長牛(ナコーシ)の大日堂。夏井の村を經て長牛に入るとダンブリ長者物

蒸の湯湯瀑の浴景

語で有名な大日堂がある北秋田郡獨鈷の大日堂と隣村小豆澤の大日堂御神體は一木三體行基菩薩の執刀に成つた物ださうな

(ホ) 夜明島川。昔々天狗來つて湯瀨街道の嶮崖に橋を架け渡してこの川の邊に來たら夜がほのぼのと明け初めてあつたとか、流れも清らかなこの流域こそは曙村唯一の平野になつて居るのである、長内、松舘を經て西道口に出ると稻村橋を隔てゝ花輪が隣接して居る。

鹿角郡内巡り

一、花輪町　二、尾去澤村　三、曙村　四、宮川村
五、柴平村　六、錦木村　七、毛馬内町
八、七瀧村　九、大湯村　十、小坂町

◆郡内里程表　自郡役所至各町村役場

	花輪町	尾去澤村	曙村	宮川村	柴平村	錦木村	毛馬内町	七瀧村	大湯村	小坂町
花輪町		一、〇八里	二、〇二	一、一八	一、一八	一、三五	二、二四	三、一八	三、〇九	四、一五
尾去澤村			二、〇七	一、二四	二、一六	三、〇七	三、三三	四、二六	四、一七	五、二三
曙村				一、〇五	三、〇九	四、〇〇	四、二五	五、一九	五、一〇	六、一五
宮川村					二、二六	三、一七	四、〇六	五、〇〇	四、一七	五、三三
柴平村						一、〇六	一、二九	二、二三	二、一六	三、一〇
錦木村							〇、二七	一、二二	二、一三	二、二〇
毛馬内町								〇、二〇	一、二〇	一、二七
七瀧村									二、一四	〇、三五
大湯村										三、一
小坂町										

一、花輪町

戸數、一、二〇〇　人口、八、〇〇〇

回町長　石木田新太郎　助役　奈良忠男　田中傳吉

官公署　學校、郡役所、稅務署、警察署、郵便局、小林區署、裁判所出張所、町役場、小學校、郡公會堂

大正十一年度町經濟摘要

△歲入

町稅	四、四五三圓	其他	九、一五七
		合計	五〇、六一〇

△歲出

役場費	八、三二五圓	土木費	三、三三一
警備費	一、二九四	衞生費	一、一九二
教育費	三五、三二六	勸業費	二、六五八
其他	九、〇〇三	合計	五〇、六一〇

本町は鹿角郡の首都であり且つ郡南一帶に於ける商業取引の中心である、大館驛を分岐點として鹿角に入る秋田鐵道線路は本町を終點として、工事の進捗を計りつゝあり、大正十二年中に開通の見込なるをもつて、他日好摩花輪間を連絡せしむる省線、開通の曉は定めし本町も、經濟文化の上に面目を一新することであらう。

當町の主要物產は左の如である。

米	一〇、二〇〇石	清酒	五、二〇〇石
苹果	二四、五〇〇貫	味噌	三六、四〇〇貫
紫染	五、五〇〇反	茜染	一、五〇〇反
醬油	二、六〇〇石		
マルメロ練詰	一七、〇〇〇箇		
木通蔓細工	一二、〇〇〇圓		

至湯瀨溫泉　自動車　一圓五十錢
至毛馬內驛　自動車　一圓二十錢
人力車　六十錢

小學校は町の東方館、舊城の跡にあり、土塲高燥にして、構內廣く、一望よく全部を瞰下し得るの勝地である、此處の下に御大典記念として建築せられた郡公會堂の雄姿は巍然町役塲と相對立して居る。

鹿角郡唯一の遊覽地とも云ふべき櫻山公園は東方の高台、北館にあり、眺望頗る佳良、中央に櫻山神社を祀る戊辰戰役の招魂碑、征露戰死者の忠魂碑町治功勞者大里壽翁川村左學翁の、記念碑も建てられて居る春は觀櫻、夏は納涼秋は觀月によく、旗亭などもあつて遊者佳いことにもよるであらうが、名を重んじて粗酒の亂造を愼む爲でもあらう。

縣會議員◎石木田新太郎氏

小田島治右工門氏の劍菱、男山、關善郎氏の正宗、末廣、田村定治氏の松風、松浦、田村茂助氏の千歲、丸田正宗等が上戶黨に喜ばれて居る。

而して醬油釀造家として其の造石數の多きをもつて、縣內に隨一を誇る淺利商店の先代佐

助翁が裸一貫から七轉八起の奮鬪的記錄は眞に立志傳中の物語りでなければならぬ。

今や釀造石數三千石に及び、其の販路たるや遠く北海道に至る、日々黎明に曉を報じて町人の眠りを醒し、晝を知らしめ、夕の休息を告げる三度の汽笛は實に一昨年物故した佐助翁の精神が何時迄も生きて花輪人を刺戟し鞭撻する所謂先覺者の叫びではあるまいか。

鄕社產土神社は町の東方二十町の山中にあり、毎年舊七月十六日より二十日迄祭典行はれ御旅所に渡御のことあり、隔年に催される豊年祭は舊七月二十日に盛大に行はれ近隣の村から多數の人が參集して殷賑を極める。

花輪小學校同窓會を分つて男子部を青年團、女子部を修養會と名づけて居る、青年團は町內、各部落を分團としてよく聯絡を圖り、共同一致、夫々の事業を經營して居る、團結の鞏固であり、よく統一せられ居る點に於て郡內其比を見ぬ所である、團長は大里周藏氏であり各分團には分團長を置き幹事評議員をもつて會務を施行して居る、毎年名士を招聘して講演會を催し、野球部武術部はそれ〴〵稽古を勵み毎年盛大な陸上運動會等を開催して居る。

もと青年團の事業であつた月刊雜誌青年之鹿角は本年八月より獨立經營のことゝ決つし郡內に於ける唯一の言論並に通信の機關とされて居る。

花輪婦人會はもと鹿角婦人會と稱し、明治二十一年時の郡宰小田島由義夫人ハツ子氏等の主唱によつて創立せられ毎月會合專ら女子の知德啓發に力めたのであつたが、今は活動を女子修養會にゆづり、基金を保持して時々講習會等を開き實際的知能の增進を任務として居る。

花輪實業會は主として青年商工業者をもつて組織し、關德太郎氏會長として時々問題の發生に伴つて總會を開き種々實業部面の改善に當つて居る。

花輪鑛山は、もと外山鑛山などゝ稱し久しき間試掘中の所、愈々鑛量の豊富なること確實となり、本年春、七十萬圓をもつて小林清一郎氏の手より久原鑛業會社に讓り渡され、昨今頻りにボーリング探鑛中であると云ふ、しかも現在の試掘豫想のみでも一日一萬貫の採鑛を續けて二十年間は確實であり、其他の探鑛も、幾多の鑛脈を堀り當てつゝありと云へば鑛業界復活の曉に於いて如何に發展するかは今より想像に餘りあることではあるまいか

本町には佐藤喜代治氏の經營する自働車があつて、主に毛馬內驛、大湯、小坂、湯瀨溫泉を運轉して居る。

二、尾去澤村

◎村長　高橋山吾　助役　田村運吉　戸數、九二〇戸　人口、六、〇〇〇人

大正十一年度村經濟摘要

△歳入			
村稅	三、三八九円	其他	二、五二一
△歳出		合計	三四、一六〇

役場費	七、二五六	土木費	二、	教育費	一九、九七四
警備費	一〇、	衛生費	一、二六七	其他	五、四〇八
				勧業費	三四、
				合計	三四、一六〇

尾去澤村は米代川を隔てゝ花輪の西に位し、古來尾去澤鑛山ある故を以て廣く知られて居る、慶長の昔から採掘せられて今日に至る迄三百年の久しき變遷を重ねたりとは云へ、殆んど榮枯盛衰の轍ちを超越して儼然たるは鑛量の豊富良質を示すものであることを知り得るであらう、坑道の延長實に數十里、さながらにくもの巣の狀態を爲して居るのである、(詳細は別項參照)今は南部名物として普ねく知られて居る「カナ山踊り」の大もとは此處尾去澤の元山からであつたと云はれて居る。

さすが金山踊りだけあつて、手拭ひを頬冠り、たすきがけのいで立ちに、手に笊をもち「なほり」の前垂をさげて所謂からめ節なる古調の唄に合せて舞ふのである、からめ節について元山の一古老の話を聞くに、初め金を堀り出して尾去澤繁榮の基をつくつたのは慶長十年南部十左衛門と傳へられて居るけれどもそれよりじつと以前から元山の方では赤金(銅)をふいて居たのであつた。

石を臺にして礦石を上げ、鎚で打ち碎くことを、からむと云つたのであつて、からめ節は礦石を碎く時の唄とでも云はふ。

「からめ〳〵と、おやぢがせめる、なんぼからめても、からめたてアならぬ、ハアドツコエ〳〵ドツコエナー、
からめて千兩からめて萬兩、おやぢの借金ねんぶですませ、ハアドツコエ〳〵〳〵ナア」

◉金のベゴコ(牛)ににしきのたづな、おらもひきたい引かせたい、ハアからめて〳〵しつかりからめて、にぎつたたづなをうつかりはなすな、

◉せまいやうでも、鹿角のさとは、西も東も金の山

◉からすアなくなくとこやのやねで、お山はんじよとなくからす

◉かねが出る〳〵しろがねこがね、てつもなまりも、あかがねも

うたに餘韻餘情の美がなくとも、かね山生活の方面を表徴し詩化した踊りそのものに原始的特色と價値がそなはつて居るではなからうか。

一年一回八月十五日に行はれる山神社の祭典も仲々人出多く、賑やかである。

本村のうち、尾去、西道口、蟹澤、山方、三つ矢澤の諸部落は純農村として農耕に勵みつゝある、殊に三つ矢澤部落は古來郡内有數の馬産地として健脚故のをもつて知られ、西道口には尾去消防組の組織するあり、沖西青年團と共に歌人として知られたる露星、高杉重右衛門氏に是が牛耳をとつて居る。

三、曙　村

◎村長　渡部繁雄　助役　佐藤富治

大正十一年度村經濟の摘要

△歳入		戸數、	四〇〇
		人口、	二、七〇〇
村税	一四、五三一円	其他	七、一三
△歳出		合計	二、六三四
役場費	三、九七〇	土木費	四、七九
		教育費	九、九一三
		勧業費	、三三

本村は尾去澤村の南に位し、鹿角郡の西南隅を占めて居る、夜明島の清流は、村の中央を流れて米代川に注ぐ。

脊梁山脈の麓に所在するをもつて平坦地尠く、丘陵山野に富み從つて放牧適地多く、優良牛馬の産地として誇るべき歴史を有し今日に及んで居る、殊に故根本五郎現畜産議員たる佐藤錄太郎兩氏の産馬改善に努力せられて以來、體型、血統共に各般の改善を加へられ、畜牛にあつては役肉兼用短角種の優良種牡牛をもつて之が良犢の生産を圖りつゝあり、進境著るしきは偏に當業者を刺戟鞭韃せられた兩氏に負ふ所大なるものがある、本村の自治は以前久しきの間、萎微不振の狀にあつたことは否むべからざる事實であつた、然るに前村長根本一三氏、現村長渡部氏の之に助役たる時より、全く面目を一新し役場員又新鋭の氣をそろへて村治刷新の局に當り、漸次其の歩を進め、今や優良なる自治体建設の緒にあるのである。

各部落毎に組織せられてあつた産業組合を一村統一して曙信用購買販賣組合となし村長自ら組合長を兼助役以下の役場員又之に協力して經營を扶け、創立日尚淺きにも拘らず、農業倉庫の設立、販賣店の設置、肥料の共同購入、等組合員相互の利益昂上とその保護につとめ着々實積を擧げつゝあることは文字通り黎明の曙を劃して居るのではあるまいか、本村は松舘、石鳥谷、黒澤、長内、三ヶ田、荒町、長牛、夏井、等の諸部落よりなつて居る

田の澤、小割澤等の鑛山があつたけれど鑛業界不振の影響を受けて休山の姿にある、由來田の澤鑛山は懺悔奉仕の生活をもつて廣く其の名を知られたる京都一燈園主人天香、西田市太郎氏の所有する所であり、同氏の所謂宣光社の事業として社會經濟政策を試みんとする新らしき村であつた、天香氏の著書懺悔の生活は、此の田の澤鑛山の設備を更へて曙一燈園建設の資を得んがために發刊せられたものであることを同書に掲げられてある花輪町から曙を誇る。鶯の聲を聞くを春と思へば、螢の虫が光り煌々と飛ぶ思索瞑想にふさはしき無二の仙境である中にもかたはらの山湖、白蛇沼は清冽淨く澄んで明境の如く、浮島の容姿又妙

經へ夏井迄三里、更に樫内から山深く辿ること二里にして田の澤に達つする、白樺の杜、綠り濃きとき、見望おろせば谿は殘雪白皚々、近くは山櫻爛熳として咲き

曙燈園

遠

を極め、或は雲山の影を泛べて神秘の色を漂はす、又知られざる名勝でなければならぬ。

四、宮川村

戸數、五五〇
人口、四、二〇〇

回村長　阿部藤助　助役　阿部清治　淺石直治

大正十一年度村經濟の摘要

△歳入

村税	二、八二四円	其他	五、五〇三
		合計	三七、三七

△歳出

役場費	三、六三五	土木費	三、三二〇
警備費	三八、	衛生費	三七五
教育費	一四、九五九	勧業費	三八五
其他	四、四一五	合計	三七、三七

宮川村は本郡の東南部一帶を占め米代川の上流、五の宮岳の麓に位し、曙村と相對して居る、五百町歩の田、三百十町歩の畑、百二十町歩の山林、二千五百町歩原野の中に、大里玉内、小豆澤、湯瀬、川部、長嶺、谷内、熊澤等の部落をなして居る。

而して本村に於て他に誇るべき二つのものを有して居る、一つは大正九年、四月産業組合中央會々頭より、粒々苦心經營の成績良好他の模範なるの故をもつて表彰の榮に浴した、宮川村信用購買販賣組合活動して居ることゝ今一つは、未だ天下に知られない、幾多の温泉勝地を有して居ることである、何處も同じきこと、農村は全く金融の機關を有せず、僅かに無盡の如きものをもつてのみ、辛うじて相互の不便を補つたに止まり、殊に經濟を離れた勞役生活に汲々たる農民の醇朴敦厚無智なるに乘じて、暴利を貪ぼる惡商人、高利貸の跋扈、跳梁、悲慘なる事實が幾多も耳にする所であつた。

偶々大正二年は稀有の凶作に遭遇した、本村の如き山間に僻在して居る丈け其の影響甚だしく收納皆無の悲境に陷り極度の慘狀を呈したのであつた。

滅び行く村は日に人心疲弊して生業にいそしまざるは世の中の常、心有る者の多くは之が救濟の道を熱心に講究するやうにもなつた、時恰かもよし、凶作救濟の爲め御下賜金に併せて當局から金壹千圓の分與に浴しなかつたと云へば、如何に献身的奮闘をもつて努めたりとしても組合長たる村長阿部藤助氏の心勞や如何ばかりであつたらうか。

信用組合長阿部藤助氏は是實に他に誇るべき宮川産業組合設立の動機であつた生活の窮乏に堪えかねた村民中には此計畫に容易に賛成しやうとし

大正三年七月二十八日當局の認可によつて設立して既に八年、五百四十人の組合員を有し出資金は金額の拂込を濟し、貯金の現在高は六萬圓の巨額に上り、一ヶ年約二十萬圓の購買販賣の物品を取扱ひ、各部落七ヶ所に農業倉庫を建設して所謂模範組合の經營を完成するに至つたのである、創設以來眞命を注いで今日の成功を贏得たる組合にとつての恩人とも云ふべき阿部藤助氏と陰陽の隔てなく之を輔けて内外繁劇の事務を掌つた書記淺石市郎君の經營談の一片を掲げて參考に供するも敢て徒爾ならぬことであらう。

創立を計畫して全村民の加入を勸誘する爲め夜間風雪を冒して部落巡回の講話を開催した當時の苦心を追想すれば實に泪が滲む程であつたと云ふ、さもあるべきである、組合の理想は高遠である、無智の農民に其の意味を徹底せしむるだけの努力さえも一方ではない筈であるのに加へて凶荒、收納が足らないとある。

共存共榮の組合精神がよしんば了得されたりとするも、困憊窮乏の生活は彼等の決意を曇らせ勝だつたのも無理からぬことでなければならぬ。

先づ事業の内容について記せば、信用部の貸付は主として、自作農奬勵の土地規定に基き他町村へ流動した土地の買戻し、肥料の購入、抵當權の抹消、家政整理等の爲め必要なる額を、信用評定委員の協定に基き之を支出し、貯金は、之を强制する義務貯金の外規約貯金、定期預金、家族貯金、備荒貯金、(宮)貯金、當座預金等に分れて居る、義務貯金の集金は小學校兒童の上級生をして各區域を擔當せしめ、良好の成績を得て居る、此の事は一面に貯蓄思想の涵養にもなることではあるまいかと思ふ。

購買部は殆んど、農家日常の生活必需品を殆んど網羅し、事務所に於て仕入すると共に村内八ヶ所の販賣店に分つて供給するのであつて、大抵は市價よりも廉價に販賣することが出來ると聞いたこんなことからも組合員に物質的利益以外に協同の觀念を培ひ得るのであらう。

農業倉庫に預つて置く倉庫米の共同販賣は入札をもつて之を行ふが故に常に時價相場より上るとも降ることなく、一俵一錢五厘の保管料は勿論眼中におかず、累年入庫俵數が多くなる有樣だと云ふ、此外、麻織物、木通蔓、殊にはマルメロ罐詰の製造等のことは、所謂生產販賣部の事業である。

此外前記土地政策の規定を定めて土地の他町村に移動するを防ぎ、矯風規約を制定して農村生活に於ける傳統的舊弊の改善を促す外中央會表彰記念として人力車を購入し病者の醫療に便し、秋田支會の表彰を記念する爲に組合員、每戸に桐苗を配布して栽植せしむる等各般の施設殆んど間然する所なき迄に到つて居る。

本村は古來、柿、栗の產をもつて知られ、近年は苹果、櫻桃等の果實も生產す殊に特產榲桲の產額は郡内第一位である。

北秋田鹿角の二郡に供給すべく設立せられた米代川水電株式會社、發電所は湯瀨溫泉の入口にあり、點燈以外各種工業動力の供給に應じて居るが唯料金の他に比して頗る高價なる

だけ、利用方面が躊躇して居る事實は遺憾とせざるを得ない。

湯瀬温泉、八幡平、大日堂、吉祥院等の委細は別に詳記せしをもつて之を略す。

本村小豆澤には宮川郵便局、谷内には長谷川郵便局がある、熊澤川上流の永田と米代川水電會社發電所の下流、碇には尾去澤鑛山の一大發電所が建てられてある。

五、柴平村

回村長　兒玉政七　助役　倍賞善太郎

戸數、五四〇　人口、四、三〇〇

大正十一年村經濟の摘要

△歳入

村税	二四、七二円	其他	一六、三三四
合計	四〇、九六六		

△歳出

役場費	六、二二	土木費	一三、八二八
警備費	四七二	衛生費	五〇六
教育費	三、五二	勧業費	一、一盃
其他	六、二二	合計	四〇、九六六

本村は花輪町の東北に隣り疆域頗る大なるものあり、東方は三百町歩に餘る菩提野一帶の平原に高峻なる山岳迫り、遠く岩手縣に境して居る、米代川は本村の山中に源を發し岩手縣二戸郡を流れて再び本郡に入り諸川を合つし能代港に注ぐのである。

本村は約六百七十町歩の田と五百四十町歩に餘る廣大なる畑地とを有して居る、故に畑地利用の如何は直接農家經濟上に及ぼす影響尠くはない事であらう、全村に亘つて苹果、桃、櫻桃、梨等果樹の副業栽培が行はれる、又故なしとはしない、然し副業的果樹栽培の如き眞の益利は自己の餘剰勞力を最も有効に活用するにあるをもつて徒らに栽培面積の廣大を致すよりはつとめて集約的栽培法を選び、肥培管理を完全にすれば、決つして危むべき事業ならざるは勿論である。

殊に本村寺坂部落の如きは所謂鹿角苹果の中心地とも云ふべきであり、兎澤德藏氏の斯界に於ける功勞は決つして忘るべきではない、今や整理の時代にある、本村の果樹栽培は近き將來に再び復活すべきは敢て疑はざる所である。

本村、柴内、小平、上臺、等山間部に近い方面は牛の生産地として古來著名であつた、村の中央小枝指、部落の西端に鬱蒼たる杉杜が見受けられる、則ち濟美館道場をもつて著名なる兒玉高慶氏の宏壯な邸宅である。

三間半に十間半と云ふ田舍には珍らしい道場が靜かなる杉木立の杜かげに建てられて居る幼少の頃より武道錬磨に精勵した兒玉氏は今や柔道は弘道館嘉納門に於て四段に進み、劍道は範士中山博道先生の門に入つて同じく四段を贏ち得たのであつた。

大正元年以來、氏は濟美館を中心として興武會を組織し、心身鍛錬の爲め武道の奬勵に力め、今や縣外の會員を合つすれば四百人の多きに上つて居る、毎年の如く中央より斯道の大家を招聘して會員の激勵を圖り、一昨年は嘉納先生川内少將等を招き、中山博道氏の如きは既に五回も聘して居る、毎週土曜日は會日と定め、午後七時頃から三時間兒玉氏師範の下に熱心なる稽古を爲しかも毎回六十人は缺けないと云ふ、現在濟美館出身の有段者

は十餘人もあると云ふ、以つて日常の充實せる稽古を窺ひ知ることが出來るであらう、道場には文天祥の忠孝の書を掲げ尙、明治天皇、の御尊像に併せて乃木將軍、日淸戰役に日探として活躍中囚はれて空しくなつた、志士石川伍一氏と日露戰役に際し「父は陛下の命により……」との悲愴なる遺書を愛兒にのこしてハルビンの露と消えた志士横川省三氏の肖像を寫した大油繪が掲げられて居る。

石川氏は兒玉氏令閨の伯父であり、横川氏は母堂の近親である。

六、錦木村

戸數、	四二〇	至花輪町	自動車 一六・四〇
人口、	三、二〇〇	至毛馬内町	自動車 二・二〇
		至十和田湖	自動車 四・二〇

回村　長　青山文太郎　助役　上田傳吉

大正十一年度村經濟の摘要

△歳入

村稅	一六、八三〇円	合計	三一、一四〇

△歳出

役場費	五、二九	土木費	六、七	教育費	二、三五
警備費	——	衛生費	四、二	其他	二、八四
				勤業費	六四
				合計	三一、一四〇

本村は郡の中央に位置を占め、鹿角の關門を扼し毛馬内驛の所在地である。

秋田鐵道線路は尾去澤驛より本村に入り末廣驛を過て今は毛馬内驛に終るも尙南進して花輪を終點とし工事進捗中の省線好摩花輪線と連絡すべく、更に大湯溫泉を經て三戸毛馬内間の豫定線開通の曉に於て本村は自然地理的に中央地點として昌榮を招致すべきこと、睹目して見るべきものがあるであらう。

米代川は大湯川、小坂川等を此處に合して男神、女神、を過て遙か北秋、山本の地域に注ぐ、米代川河畔に臨む大欠、松山部落は地味肥沃の爲蔬菜栽培は頗る盛に行はれて居る、主なるものは葱、人參、午蒡、茄子、里芋、長芋、甘藍、白菜等である。

其他神田、松ノ木、古川、濱田、其他の部落は主として米作を行ひ、全村の富力が比較的平均されて居る特徴を有して居る。

傳說に殘る戀の錦木塚は、丁度毛馬内驛の前にあり、古來幾人の歌人、墨客をして低回憑弔せしめたことではあらう、毛馬内驛を距る東方二十町の地に、村社猿賀神社がある、上毛野田道將軍を祀つて居る、今簡單に傳へられて居る事柄を記して見やう、抑も田道將軍は崇神天皇の皇子、豊城入彦命の四世の孫であつて應神天皇の朝に將軍に任せられ當時の朝鮮を擊つて之を破り、後百濟に使して博識の士を求め、王仁、辰孫王等を得て歸り、吾國に文化的基礎を與へたのであつた、仁德天皇の頃、北奥の蝦夷が叛いた征伐の大命を受けて遠く此地に討ち入つたのである。

將軍は敵の蝦夷なるを侮り、勝に乘じて敵地に深く入り、遂に毒矢を受けて斃れたのであ

つた將軍其時の死容、尙憤怒の形相を現はし、眼光烱々更に閉ぢなかつたので賊中一人としてよく、之に近づき得るものはなかつたと云ふ。

後土民が將軍の遺烈消滅せざるを怖れて猿賀神社に祀つたとある。

祠堂は方二間、正奥神殿の床下に横五尺縱四尺、地上に現はるゝ高さ一尺許りの平石がある、當時將軍の墓標として置かれたものであると傳へられて居る。

毛馬内驛は大正九年七月四日の開設にかゝり、構内頗る廣大なるものあり、驛前に大舘花岡旅館支店あり、運送店として丸佐、丸通、丸長等がある、今春此處に新しく輸出米檢査所が設置せられ毎月少なからぬ米が縣外に輸出されるやうになつた。

七、毛馬内町

回町　長　山本修太郎　助役　樋口定三

大正十一年度町經濟の摘要

△歳入			
町税	二六、四〇八円	其他	三、〇三五
合計	三二、四八一		
△歳出			
役場費	五、九三五	土木費	八〇〇、
教育費	一六、八九九	勸業費	六五九
警備費	七一九	衛生費	一、六四九
其他	四、八二〇	合計	三二、四八一

戸數、六七〇

人口、四、六〇〇

至花輪町自動車	一圓二十錢
至大湯村馬車	八十錢
至毛馬内自動車	六十錢

毛馬内驛を北に十町進めば、毛馬内町に至る、東すれば十和田街道の咽喉を扼する大湯溫泉に近く、南下すれば花輪町あり、北進すれば小坂鑛山又遠くはない、地理自然に中心的勢力が集まつて來るかの如き感じのするのは敢て筆者の偏見でもあるまい。

縣會議員
山本修太郎氏

穀物、呉服、魚類の販賣等の所謂商取引に於ける商人相互の活躍にも頗る動的な氣分が横溢して居る、小林區署、警察分署、郵便局、小學校町役場等の所在地である。

本町は郡の中心地點に位し交通の便三方に開けあるをもつて、人馬の往來頻繁にして、自動車、馬車、人力等の設備よく整ひ、隨時の必要に應じ得る狀態にある、殊に鹿角乘合自動車組合、及十和田遊覽自動車共、本町を起點として、迅速にしかも間斷なく疾走して居るのである、本郡に於ける農事改良の淵源地は蓋し此處毛馬内町からであつた、所謂改

良農法に學んで乾田馬耕を行ひ、肥培耕種法の改善は、自ら收穫量を多からしめ、品種の統一米質の改善等を圖りその進境の著しき、うたゝ今昔の感に堪ゑないものがある。

是勿論農家が時代の趨勢に覺醒したことによることでもあらうけれど、斯業の爲めに獻身的犧牲を惜まず盡粹せられた、立山弟四郎氏の力あづかつて大なりしは又周知の事實でなければならない、今簡單に立山氏の努力せられた施設經營を掲げて見やう。

立山氏は明治四十二年一月、地主小作人間の親善を期し、併せて異体同心協力一致農事改良及農家經濟の發達助長の緊要なるを認め、卒先して小作人組合を組織し、昨今しきりに爭議紛糾の聲を耳にする地主、小作人間兩者の關係を圓滿ならしめんとしたのであつた。

氏の賢明なる、まことに先見の明ありと謂べきである、即ち生產增殖の方法としては模範田の施置、技術員設置、改良耕作法の指導、堆肥改良の奬勵、優良種子の配布、畑作模範園の施置、稻架材の補助等を主なるものとし、農家勞力の餘剩をもつて副業の奬勵を圖り果樹、桑樹、蔬菜の栽培を奬め、社會的施設としては小作米の品評會、模範小作人の表彰救荒義務貯蓄に對する地主の同額累年補助等をもつてし、收支家計の調査自作農奬勵を爲す外、敎化方面に於ては農事講話、農事視察、縣外視察に併せて敬神、勤儉の道德觀念の養成等に迄意を盡して居ることは以つて他に誇り得る事實ではあるまいか。

曾つて大日本農會より特別有功賞を贈られ其功績を旌表せられたのも亦當然のことである

殊に立山氏の社會敎化的事業として永久に傳へらるべきは私立立山文庫創設者としての、それでなければならぬ、大正二年十一月十七日をもつて創立し、社會公衆の閲覽に供し文化作興の使命の爲に、多大の犧牲を惜れないことは實に本町本郡の誇りとする所、藏書はよく內外古今の圖書を蒐集し、其總部數、六千に餘り、閲覽者累年之を增加し、直接借出しの便なき地方には、巡回文庫九個を備へて、町村、學校、官衙、公署を中心として閲讀の便を圖つて居るのである。

本町に於ける青年會は其歷史遠く自發的活動は又見るべきものがある、しかも經營は全く自治の精神に基き、三名の幹事、十二名の協議員をもつて會務を行ひ、研究部、講演部、運動部等に分れて夫々の事業を營んで居る。

殊に數年前よりの繼續事業であつた、廣大なる毛馬內運動場の整理事業は漸く本年完成し郡北無二の大運動場が出來たのであるが、是等も終始當町青年の勞役作業に依つて出來上つたものである、其他本町には、商業會、婦人會等があつて夫々の事業をして居る。

回月山神社は本町の鄕社にして大同二年坂上田村麿東征の砌り、出羽の月山に蝦夷征伐の上は七ヶ所の月山を建立すべしと月捷戰を祈願して建てられたもの、一つとして著名である、社殿七間四面、祭典は每年舊六月十三日をもつて行はれる。

尙最後に特記したいことは鹿角名物毛馬內の盆踊りである、郡內何れの町村でも、盆踊は炎々たる篝火を圍んでなだらかな太鼓の響に合せて、踊り樂しむのであるけれども、殊に毛馬內のそれは、典雅艶麗優暢なことに於て、絕えてその是を見ない所である、假裝する

ものは何處迄も滑稽に、美衣を纏ふものは善美の極を盡し、男女老若の隔てなく、一團よく數百人、古調さながらの笛や太鼓に得も云はれぬ美聲を交じへて唄ひ且つ踊る姿は、まさに人情美の自然的發露とも云ふべきである。

盆踊りの奬勵保全は、愛鄉心の滋養に極めて重要の意義を有するのではあるまいか、風紀問題をもつて之を云々する所謂玩迷な當局者があるとしたならば、それでは踊り以外に其ことがないかと反問したくもなる。

八、七　瀧村

戸數、三八〇
人口、二、六〇〇

回村長　高橋庄治　助役　高橋五郎

大正十一年度村經濟摘要

△歳入			
村税	一四、三九〇	其他	三、一五七
合計	一七、五四四		
△歳出			
役場費	四、三六一	土木費	五、
教育費	八、八一四	勸業費	七五〇
警備費	一八一	衛生費	二七四
其他	三、三六二	合計	一七、五四四

本村は毛馬内町の、北小坂鑛山の南に隣り、遠く十和田湖の勝景を包含して居る。

曾つては社會の重大問題として國家的不祥事件をも醸成してあつた足尾銅山、鑛煙毒被害區域の慘狀窮りなかつたが如く、小坂鑛山の隆昌に伴ふて次第に虐げられた本村過半の部落民の生活ほど哀れむにたえたるものがまたとあらうか、鬱蒼たる樹林はたち〳〵にして荒涼茫莫の山と化し、田畑は年毎に生産を減ずるのみであつたから彼等は多く鍬を棄てゝ鑛山勞役に走り、豆、粟、蕎麥等收を納した良圃も茅、すゝきの生えるに委せては、顧みやうとするものもなかつたのである、最も劇甚とも云ふべき、上向部落へ赴けば、傾きかけた屋根、崩れかゝつた軒の家が其處此處に二軒、三軒と取り殘されて居る、寂しさ、歳々居住をたゝんで祖先の墓も草に埋れゆくのなき哀れさ、しかも居殘るものゝ屋敷は大抵鑛山に買ひ取られてしまつて居る、殊に昨今に於ける鑛業界の不振は、彼等窮迫生活に對する脅威でなくて何であらう。

滅びゆく、コズモポリタンの徒にもひとしい彼等の上に、何時の日か救ひの惠みがあるであらう、等閑に附すべからざる社會問題である、人道の問題である、荒廢した山や野や畑は一面に、萱が自生して居る、近年多量青刈としたものは馬のしき藁として陸軍に移出せられ、冬圍ひ用の萱簾れが盛に製作されて、七瀧の名物となつたことは悲慘なる皮肉ではないか。

本村山根芦名澤部落に有名なる觀音社がある、草創の年暦不明であるが十一面觀音を奉祀して居る。

清和天皇の頃、慈覺大師回國の砌り此堂に參籠、神躰五寸の觀音の金像を刻んで、堂後の岩窟へ納めたと傳へられて居る、婦人は安産を祈り、牛馬の子を得んとする時、毛色牝牡

の區別、祈願者の意に叶ふ故をもつて有名である、祭典は毎年舊四月十七日にして、遠く郡外から迄も參詣するものがある、本村は農耕の利極めて厚からざるをもつて、副業的に牛馬の飼育よく行はれ、芦名澤・高清水方面は古來知られた馬產地であつた。

九、大湯村

◎村長　諏訪駒次郎　助役　諏訪省治

大正十一年度村經濟摘要

△歲入

村稅	三四、三五四円	其他	二、七二一
		合計	三六、〇五五

△歲出

役場費	六、二六七	土木費	六、八四六
警備費	九三一	衛生費	五〇七
教育費	一六、三〇七	勸業費	——
其他	五、三〇七	合計	三六、〇五五

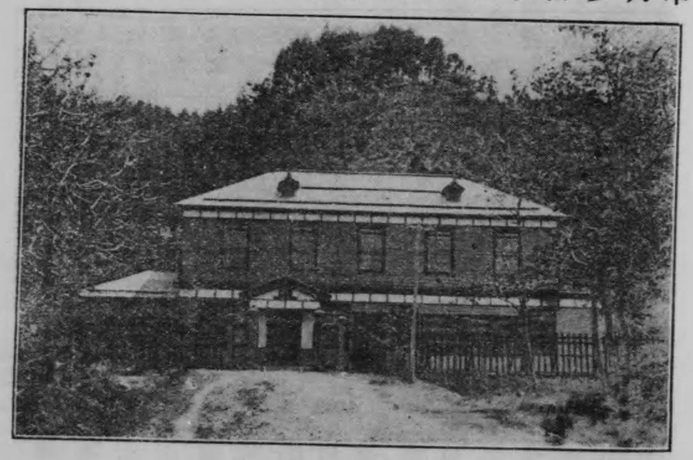
戶數、九〇〇
人口、五、一〇〇

至毛馬內驛
自動車　九十錢
人力車　一圓二十錢
馬車　五十錢

本村は鹿角の東北隅に位し、東は來滿峠を越えて青森縣三戸郡に通じ、西は七瀧村毛馬內町に續き、不老倉鑛山、十和田湖通路(縣道)たるの外古來溫泉あるによつて、著名であつた、殊に近年十和田湖の名聲普く知られるに及び遊覽の人士、學生等急激の增加を來し、車馬の往來漸く頻繁となり、旅館商店の面目又一新するに及びたるは本村開拓の上からも極めて欣ぶべきではあるまいか。

而して宮川村には組合經營者として、阿部藤助氏、毛馬內町には私立文庫創設の立山弟四郎氏を有する如く、本村には大湯開發の恩人とも云ふべき諏訪富多氏を有して居る、氏は東京帝國大學に、哲學研究の道を辿られたる文學士であつて、溫良篤行の君子人的思想衆であると共に一面、得易しからぬ企業家としての素質を充分に享けられて居る。

大湯殖林會社、鹿角製材會社の顧問たるの外今大湯、錦木、柴平三ヶ村に亘る耕地整理組合を組織し、數千間の水路を開鑿して約三百町歩の水田開墾事業に着手せんとし測量を了へて今や設計中である、かくの如き事ゝ皆諏訪氏の創意であり盡力にあるものである。



大湯村役場

殊に溫泉地としての大湯を發展せしむる爲の施設經營は枚擧するに遑がない位である。

十和田遊覽客の激增にともなひ、旅館設備の不完全不充分なるを慮り、昨年夏、宏壯なる大湯ホテルを新築されたのであつた、ホテルは河原湯の附

近縣道に沿ふ所にあり巒山翠色を望み、得て妙、設備の整ること全く間然する所なしと云ふべきである、氏は又數年前より溫泉利用の蔬菜速成栽培を試み硝子室を建造し技術者をして專問的研究に當らしめ、諸種の不時栽培を行ひ旅客の食膳を賑はして居る。

諏訪氏の事業として更に永久に忘るべからざるものがある、そは七瀧の章に於て概說した如く、小坂鑛山煙毒被

大湯溫泉千葉旅館

害の劇甚地に於ける部落民の慘狀目もあてられぬ生活を默視するに忍びずとなし、大正七年卒先主唱者となつて大湯國有林大淸水平開墾の有望なるを踏査し、確然たる計畫を樹て、其筋の認可を得移住約五十戸の人が現在開墾のことにあたつて居る。地は海拔二千餘尺の山中にありと雖も、地味の豊饒、さながらに北海道の開墾を髣髴たらしむるものがある、一戸三町歩を割當て今年は百五十町歩、全部の開拓を終る

筈である、諏訪氏は進んで開墾組合の長となり、熱誠をもつて事業の進捗に奔走し、米噌を欠くものに對しては時價よりも遙か安價に供給して移住者の生活を助けて居る、作物の主なるものは、大小豆、馬鈴薯、甘藍、蕎麥、粟、等であるが將來水田の必要上之が試作をもして居るが相當の成績も擧げ得られる見込と云ふことである、諏訪氏が最初開墾を計畫せられた當時の詩にこんなのがあつた。

春光駘蕩草連空　近碧遙青望不窮　莫道荒村東北地
雲山萬古待英雄

もつて氏の抱負如何を知るべく、又氏の如きこそ謂ふ所の英雄その人ではあるまいか、

大湯溫泉龜屋旅館

得て製材したる、欅、桂、檜、山毛欅、杉其他雜木の良材を廣く販賣して居るが今回增資に伴ふ事業の擴張は自然毛馬內驛前に製材所を建設し、電氣動力をもつて之が經營をなすことに決つしたと云ふ。

大林區署の拂下げを大湯に事業所を大湯國有林內に設け、

鹿角製材株式會社は事務所を

壁となすべきである。

澤大日堂の姥杉と相對して双

呼ぶ、樹容の偉大なる、小豆

餘る古杉が交つて居る門杉と

老杉鬱然たる中に周圍三丈に

大なるものでなければならぬ。

村の中央に古刹大圓寺がある

大湯發展は氏に負ふ所蓋し大

計畫せられた當時の詩にこん

である、諏訪氏が最初開墾を

擧げ得られる見込と云ふこと

本村は郡南の曙と共に馬産地として有名であつた、此事については諏訪富多氏の先代音治氏の力に俟つ所大なるものがあり、遺志を享けた富多氏も斯業に盡されて居る、維新當時迄大湯は鹿角に入る北部唯一の關門であつた、山岳重疊の中にも來滿峠は古來有名である秋田との交通絶えて無かつた頃は海產物は殆んど、八戸の港から此の險阻を越えて入つたのであつた。――

○無けれァよいもの來滿峠、無けれァ八戸、近くなる

○音に聞えし、來滿越えて、逢ひに來たのに、歸へされうか

八戸の海邊から、山深く鹿角の國に身を賣られ、三筋の糸の頼りなき遊女の憂き思が短かい此のひと節にも犇々と哀愁を催さずば歇まないではないか、又一名物である。

十、小坂町

戸數、	二七〇〇	至毛馬內驛	壹圓
人口、	一六、〇〇〇	自動車	壹圓參拾錢
		人力車	七拾錢
		馬車	

回町　長　工藤茂太郎　助役　安倍義惠

大正十一年度町經濟摘要

△歲入

町稅	七〇、二三三円	其他	一四、一九六
		合計	八四、四三二

△歲出

役場費	二二、三一九	土木費	六九三
警備費	一、三九三	衞生費	一、三八一
		教育費	五二、三八三
		勸業費	六三〇
		其他	一五、六三三
		合計	八四、四三二

小坂町は本郡の西北隅に位置を占め、北は青森縣南津輕郡に境し、南は七瀧村に接す、曾つては東洋一をもつて知られたる小坂鑛山の所在地である。

毛馬內驛より二里十五町、七瀧村を經由する、十和田山道の分岐點であり、約五里にして湖畔、鉛山に達つすることが出來る。秋田顯勝會は山道行旅者の便を圖り、案內の標木を建てゝ道知るべとなして居る。

鑛業界は如何に不振と云つても、本町は鹿角の都會であり、物資の消費地である、小坂鐵道會社の經營する小坂線は、大館驛より分れて岱野、小雪澤、茂內、を經て小坂町に至る主として花岡支山の鑛石運搬の用に供すると共に乘客列車を連結することも勿論である、役場は上小坂にあり、近く鄕社出羽神社がある。

鑛山以外は小坂部落と稱し、濁川、細越、上小坂、下小坂、大生手等に分れて居る、先年部落有、石灰山を採掘して、尾去澤鑛山に販賣し、現金のみ十餘萬圓の部落財產を有して居る。

小坂川の上流濁川の近くに砂子澤の冷泉がある、炭酸泉であつて皮膚病に効があると云はれて居る、もと小坂から此の濁川を經て青森縣碇ヶ關に至る縣道があつたけれども今は廢道になつてゐる。

町立實科女學校は小坂小學校構內に獨立し、郡內唯一の中等教育機關である、內外の設備愈々完全し他に比してあまりに遜色を見ないことであらうと信ずる、女學校に附屬せしめ

て町立小坂文庫もあり、一般の閲讀に供して居る。

康樂舘は鑛山の所有であつて劇場を兼ねたる公會堂とも云ふべき宏大な建築物である、かたわらに公園的な遊覽地をつくり何人も入るべく開放して居る、小坂病院は鑛山の經營する所、設備の完全せるをもつて廣く知られて居る、物質文明に何等の不足を感じない人々を尙一歩精神的に充たされた生活に導かんとして天主公教會、ホーリネス教會がそれ〴〵救ひの道を說いて居ることも亦或意味からは自然破壞の爲めに働く人々にとつては、緊要のことでなければなるまい。

濁川街道、噴泉湯の分れ道から約四丁位の所に若木立と云ふ部落がある其處の墓地に植えられて居る桑の老樹は高さ三十餘尺周圍十尺に餘り、大林區署の名木誌には七八百年位を經たものらしく記されて居る。

墓地にあると云ふことよりはむしろ、此の桑があるによつて、同部落五軒分、數墓の墓があると云ふ方が當つて居る、又名木たるを失はない。

昔話に傳へられた鬼神のお松が棲んだと云ふ笠松峠は此處から二里位の山中にある。

鹿角新名所、湯の岱、噴泉塔

噴泉塔とは學術名を『カルヤス、シンターコーン』と呼び、石灰華塔などとも譯して居る自然科學のうち、火山の原因、經過等を說明し之を證明する唯一の資料であり、學術研究

上珍重せらるべきものなるは勿論のことである。

大正十一年八月四日、農商務省の囑託を受け耐火煉瓦原料調査の爲め出張せられたる地質學の泰斗東京高等師範學校教授佐藤傳藏氏及農商務省技師、松田廣輝氏の二人が本郡小坂町の山間部を實地踏査中、はからずも此噴泉塔が湯の岱山麓に於て佐藤教授によつて發見せられたのであつた。

小坂町を北方に舊縣道を辿り行けば約一時間で濁川と云ふ部落に達つする、更に碇が關街道も少し上つて右に折れ相内川に合つする小支流を遡つて行けば湯の岱と云ふ芝草の平坦地がある、所謂噴泉塔は此の岱地の上にあり、今日明かに觀察し得るものは、其數七ケを數へるのである。

今其の狀況を仔細に觀察すれば、高さ小なるは三尺位より、大なるは六尺内外であつて、何れも一の圓錐形を爲して居る、而して其の上部、頂上とも云ふべき所に各直徑一尺内外の噴氣孔をそなへ、現在に於て六號塔は(佐藤教授假名)攝氏三十一度の温湯と炭酸瓦斯を噴出して居るのである、其狀況恰かも、火山の噴火口に相當するものであることは勿論、噴出の炭酸瓦斯は、點火した蠟燭などを忽ちに消滅してしまふ位である、第六號塔の外は氣口の底部は、枯草や塵埃に埋まれて一二尺の深さではあるが、孔内を覗けば、皆褐色の石灰華によつて形成されて居り、一號塔は全くの石灰華がその生地を露出して居る、此の石灰華を取つて酸を注ぎかければ、夥だしい泡が出ることによつて炭酸化物であることが

知られるのである。

噴泉塔の附近に酸化鐵の褐色沈澱物を谷地々帶に幾多も見受けられる。

鐵を沈澱して居る附近の溫泉は塔に湧くものよりも稍高溫であつて發散する炭酸瓦斯量も非常に多量である、試みにイナゴ、コウロギなどの虫を入れば三秒時位で窒息斃死し墓の如き三分二十秒で死んであつたと云ふ。

總べて溫泉は地熱及、火山の作用によつて起ることは勿論であり、しかも溫泉は、地表に於て、地下深所内の火山作用を想像し得る有力な一の表示物である。

今回佐藤教授の學術的解決によつて生命を與へられた地質學上の絶好資料として、湯の岱噴泉塔附近一帶の、低溫なる溫泉は之によつて、火山作用の非常に微力になりつゝあることを推察し得べく、噴泉塔即ち此の石灰華塔が如何にして出來たかと云ふことも亦容易に知り得べき問題である、地下より上昇する溫泉中に含まれて居つた炭酸石灰が、地表に出て炭酸瓦斯を放散してしまつたが爲に其處に沈澱したものがこれであり、孔口が塞れば又近き一點を破つて噴出して自然數多の塔をなすものであつて、美しい圓錐形を作ることは噴火口より溢れ出る、熔岩が美しい圓錐形を作りなすと同一理由と見做し得べきである。

尙佐藤教授の談によれば、我國に於て此の噴泉塔として知られて居るものは、日本アルプス山中、白船骨溫泉と、槍ヶ岳高瀨川の上流湯の又十一瀧、及日光山の奥、栗山村と三ケ所に發見せらたのみで、今回の發見は學術上充分珍重せらるべきものであると云ふ。

近く内務省より天然記念物として、保護せられる筈になつて居る。

附近の村民がじつと昔からたゞ不可思議の杜として看過したものが今回はからずも佐藤教授によつて學術的決定を與へられたことは誠に喜ぶべきである。（掲載寫眞は、佐藤博士一行發見當時第六號塔上で撮影したもの、中央ヘルメット帽を頂くは佐藤教授である。）

鹿角の人物と鹿友會

深山大澤英雄を生ずるや否やの論は拔きにして、今日國家的乃至は歴史的に知られて居る本郡出身者を紹介し度く思ふ。

□石田八彌氏（工學博士男爵）花輪町奈良又助氏の五男として孤々の聲を擧げられた氏は花輪小學校を卒へて秋田中學に學ぶや成績特に群を拔く時の縣令、石田英吉氏に乞はれて養嗣子となり、東京に學び工部大學を卒業し直ちに獨乙に留學す。

歸朝して三菱に入り、久しく大阪製煉所長として名あり、倫敦市場に於て我國銅價の遙に他を凌駕する所ありしは卓越せる氏の研究に俟つ所多かりしと聞く、後三菱鑛業試驗場長に轉じ更に鑛業株式會社取締役となり、今は退いて京都の本邸に居られる、今内務省に文書課長として勅任監察官を兼ね一般から將來を期待されて居る横山助成氏（大舘立身）は此の女婿である。

□川村竹治氏（内務次官、貴族院議員）氏は明治三年本郡花輪町に俊治氏長男として出生された、花輪小學校在學當時より夙然卓越せる頴才を表したものであつた、明治十八年の頃一家を擧げて東京に移られてより、明治二十九年帝國大學法科を卒業する間に於ける、螢雪、辛酸の勞苦は眞に立志傳中のものであつた、爾來官海に投じ遞信省を振り出しに長崎、神戸、横濱等の一等郵便局長より内務省書記官として警保局に入り、次いで臺灣民政部長に任ぜられ、和歌山縣、香川縣、青森縣等の知事に歴任し、原敬氏、内閣總理大臣の印綬を帶ぶや警保局

長に拔擢せられ、拓殖局長官に進み、貴族院議員勅選の榮に浴し、加藤内閣の組織を見るや果進内務次官の樞要に參ずるに至つたことは本郡出身者中異數の榮達として大いに慶祝しなければならない。

□**内藤虎次郎氏**（京都大學教授文學博士）氏は湖南と號し慶應二年を以つて毛馬内町に出生せられた、若冠秋田縣師範學校に學び、學大いに進み嶄然頭角を顯はし卒業後、北秋田郡綴子村に教鞭を握りしが、蛟龍永く池中のものたらざるの譬に洩れず奮然志を決つして東京に出で、或は雜誌政教社に新聞萬朝報に執筆し傍ら、苦學大いに努め文名頗る擧つたのであつた、後大阪朝日新聞の主筆に招ぜられ、篤學なる史家として、明識なる支那通として、或は攻學に或は時論に椽大の筆を揮つて覇を天下に稱へ、明治四十年十一月京都帝國大學に聘せられ東洋史の講座を擔任す、支那に歴遊すること屢々にして或は珍本異書を蒐集し、大官高儒に出入して識見大いに進み今や支那通として天下其の右に出づるものなきの狀態である。

何等の學歴を有せずして文學博士の稱號を受くるが如き又稀に見る所でなければなるまい。

畵界の鬼才川口月嶺、檜山相馬大作事件に知られた關良助彫刻家としての相川善一郎君は花輪町の出身であり、日清戰役に際し、軍事探偵として清人を裝ひ敵狀を偵察し遂に囚はれて二十九歳を一期に果敢なくも滿洲の露と消えたる志士、石川伍一氏其令弟にして日露海戰に朝霧艦長として曉名を馳せたる壽次郎大佐、其令弟にして現に陸軍大學出身砲工學校教官砲兵大佐の石川漣平氏、國民新聞政治部長石川六郎氏、海軍大佐にして鹿友會幹事長たる青山芳得氏、十和田開拓の恩人和井内貞行氏等皆毛馬内町の出身である。

鹿　友　會

地は僻陬にして交通使利ならず、中央文化の波及比較的遠き本郡に於て尙川村、内藤二氏を初め著名の士を出し人物に於てあながち他に遜色を示さゞるもの、其の功の一半は鹿友會に頒たねはならぬ、鹿友會は明治二十二年頃在京の同鄕學生が月一回相集つて懇談をなし併て相互の研鑽に資し尙年一回會誌を發行して會員の編文成績等を掲載し鄕黨父兄とも連絡を計り故折戸龜太郎、石川伍一、大里文五郎等の諸氏主として大に後身子弟の指導監督に力めたので學生の學業風紀の上に裨益を與へたること多大なりしと共に一面遊學の機運を助長すること少くはなかつた。當時尙小郡にしては遊學生多しと稱せられたのも故なしとはしない。爾來三十餘星霜、其間多少の盛衰は免れないとして歴代當時者努力の結果次第に大をなし、今日に於ては會員の數三百餘人に上り各方面に相當人物を輩出すると共に一方鄕土の有力人士をも網羅し最早や昔日の如く單に學生の會とのみ見る可からざるもの基礎漸く確立すると共に從來二三先輩の好意により小規模に實行し來つた貸費事業の擴張を計り、一昨年來基金の募集に着手して既に二萬餘圓の寄附を得、今や郡内唯一の奬學機關として大に活動せんとして居る、過般郡制廢止に伴ふ郡有財產處分の郡會に於て滿場一致を以て郡有財產處分費の中より六百圓を寄附するの決議に見ても一般の鹿友會に對する期待が伺はれるのである。奬學事業の狀況は現在夫々各人の事情に依て異なるも一人に付十五圓より三十圓迄を貸與して居る尙向後年に三名位を撰拔し貸與する豫定であつて今の所は其資格を中學以上の專門學校の學生となし學費欠乏を告げつゝあるものに限つて居る、從來貸費生の成績は極めて良好であつて病氣の外一人の中途廢學せしものなく成業の上既に貸與額を全部返還した者さへ二三を數ふるのである、此の返還の正確にして未だ一人の不義理者を出さゞるは本會の誇りとも云ふべきであつて鄕人の爲めにも頗る喜ぶ可き

露光量違いの為重複撮影

傾向と云はなければならない、現在の幹事長は後備海軍大佐青山芳得氏であつて、會計監督に川村竹治氏あり、學生の幹事三名之を補佐し、地方委員長は工學士内田清太郎氏であつて各町村の地方委員を統へて居る、奬學貸費の外に東京に於ける學生の集會、會誌の發行、夏季に於ける鄉里の講演會など其の事業の主なるものである。

附錄

花輪、毛馬内、小坂電話番號表

露光量違いの為重複撮影

傾向と云はなければならない、現在の幹事長は後備海軍大佐青山芳得氏であつて、會計監督に川村竹治氏あり、學生の幹事三名之を補佐し、地方委員長は工學士内田清太郎氏であつて各町村の地方委員を統へて居る、奬學貸費の外に東京に於ける學生の集會、會誌の發行、夏季に於ける鄉里の講演會など其の事業の主なるものである。

附錄

花輪、毛馬内、小坂電話番號表

附錄

花輪特設電話加入者番號及氏名

一	鹿角郡役所	一六	呉服太物商	栗山文次郎
二	花輪町役場	一七	料理店	尾去澤鑛山ホテル
三	安田銀行出張所	一八	料理店	廣川屋
四甲	尾去澤村役場	一九		尾去澤鑛山販賣店
四乙	石木田由太郎	二〇		花輪警察署
五	花輪稅務署	二一	銀行業	盛岡銀行支店
六	米代川水電株式會社	二二	呉服太物商	山崎二治
七	花輪小學校	二三	酒造業	關善次郎
八	石井德太郎	二四	雜貨商	工藤治六
九	菅原庄助	二五	料理屋一二三軒	佐藤久助
一〇	尾去澤鑛山事務所	二六	醫師	柏田愛次郎
一一	田村定治	二七	料理屋	花月亭
一二	石木田小太郎	二八	醬油釀造雜貨小間物業	淺利佐助
一三	田中傳吉	二九	旅人宿	高瀨恒造
一四	大里周藏	三〇	時計貴金屬商	西村忠次郎
一五	石木田新太郎	三一	酒造業	小田鳥治右衛門

三二 味噌製造業 柳澤源太郎 五一 魚類商 土舘子之七
三三 料理屋弘花屋 花輪小林區署 五二 米穀商 佐藤長次郎
三四 銀行業 松谷クニ 五三 酒造業 田村茂助
三五 菓子商 秋田銀行出張所 五四 米穀商 中島榮太郎
三六 運送業 佐藤久吉 五五 寫眞業 小田島源太郎
三七 旅人宿人力車業 根市喜惠吉 五六 料理業 花輪倶樂部
三八 小間物雜貨商 阿部桑太郎 五七 米穀商 石川榮吉
三九 森内重次郎 五八 菓子商 三ケ田榮太郎
四〇 公會堂 五九 精米業 小田島賢作
四一 魚商 田中留次郎 六〇 料理店 郵便局
四二 生魚商 澤田留次郎 六一 米穀商 賀川竹松
四三 客馬車業 奈良市太郎 六二 旅人宿 關留助
四四 料理屋 醉月 六三 呉服太物商 杉江丑太郎
四五 米穀商 根本忠助 六四 呉服太物商 栗山勝次郎
四六 醫師 浦井財治 六五 旅人宿 丸共ホテル
四七 小間物商 三ケ田忠治 六六 薪炭米穀商 奈良新太郎
四八 菓子商 高田德治 六七 雜貨商 小田切勇次郎
四九 旅人宿 佐々木彦兵衛 六八 旅人宿 福吉旅館
五〇 荒物雜貨商 關慶次郎 六九 米穀商 阿部福太郎

七〇 菓子商 黒澤吉太郎 七二 米穀商 豐口清志
七一 米穀商 關又七 七三 呉服太物商 阿部松五郎

毛馬内特設電話加入者番號及氏名

一 毛馬内役場 一六 勝又次郎
二 醫師 本田醫院 一七 穀物商 豐口秀太郎
三 小間物雜貨商 木村平作 一八 毛馬内警察分署
四 小間物商 青山源七 一九 醫師 田子健哉
五 農業 立山弟四郎 二〇 荒物卸商 石田幸德
六 木村藁工品商 淺利成一 二一 毛馬内小林區署
七 海產物商 大里伍一 二二 銀行業 勝又貞春
八 山本修太郎 二三 穀物商 木村庄太郎
九 旅人宿 勝又旅館 二四 精米業 刈谷精米場
一〇 電氣業 米電會社毛馬内發電所 二五 酒造業 大里清三
一一 醫師 小笠原醫院 二六 種苗農種 内藤農場
一二 呉服商 奈良吉次 二七 海產物商 中島新太郎
一三 穀物商 石川國次郎 二八 料理仕出屋 池田三郎
一四 毛馬内小學校 二九 料理屋 吉田吉藏
一五 酒造業 豐口甚平 三〇 魚類商 伊藤與吉

小坂特設電話加入者番號及氏名

三一	小間物商	青山支店	三八
三二	呉服太物商	高橋達司	三九
三三	小間物雜貨商	高良商店	四〇
三四	料理屋	喜多屋	四一
三五	小間物荒物商	石清商店	四二
三六	海產物問屋	中村司商店	四三
三七	商業	石田源次郎	四四
一	鑛業	小坂鑛山事務所	一一
二	鑛業	不老倉鑛業所	一二
三	鑛業	小坂出張所	一三
四	請負業	酒井別宅	一四
五	呉服太物商	伸谷久藏	一五
六	陶器酒類商	村木忠吉	一六
七	小間物食料品業	高瀨理之助	一七（甲）一八（乙）
八	料理店	吉本倶樂部	一八
九	運送業	マル山運送店	一九
一〇		小坂警察分署	二〇
二一	呉服店	菊地倉之助	三六
二二	洋服業	小林政治	三七
二三	醫院	本田醫院	三八
二四	運送業	マル通運送店	三九
二五	雜貨商	豐口支店	四〇
二六	料理店	和洋軒	四一
二七	魚類問屋	內藤並二	四二
二八	旅館	阿部サダ	四三
二九		小坂小學校	四四（甲）（乙）
三〇		金畑鑛山事務所	四五
三一		村上文治	四六
三二		三ケ田左太八	四七
三三		菅原榮治郎	四八
三四	酒造業	小坂酒造合資會社	四九
三五		仲谷家具工場	

三八	旅人宿	佐藤旅館	
三九	料理屋	米代屋	
四〇	米穀商	武藤忠三	
四一	銀行業	秋田銀行出張所	
四二	精米製粉業	田子精米所	
四三	鑛山業	若松慶三郎	
四四	菓子業	柴田辰三郎	
一一	呉服古着商	合資會社村山商店	
一二	雜貨商	柳澤平次郎	
一三	書籍文具商	高橋幸一郎	
一四	時計商	佐藤時計店	
一五	藥種業	福田豐治	
一六	雜貨商	柴田三二	
一七（甲）一八（乙）	履物商	小坂魚業株式會社	
一八	雜貨商	松本鐵藏	
一九	銀行業	湯瀨富次郎	
二〇	電氣業	秋田銀行出張所	
三六	雜貨商	石田幸德支店	
三七		阿部幸太郎	
三八		北村利三郎	
三九		酒井久太郎	
四〇		板垣熊太	
四一		石田辰次郎	
四二		小坂元山小學校	
四三	旅館	松本松助	
四四（甲）（乙）		酒井松五郎	
四五		工藤代吉	
四六		小山盛太郎	
四七	そば屋	山城谷嘉六	
四八		杉江吉太郎	
四九		小坂鐵道株式會社	
		齊藤清秀	

秋田朝日新聞縣內旅館投票

第三位當選

十和田湖遊覽御案內

秋田縣鹿角郡

大湯ホテル

大湯温泉

客室清雅、浴槽壯麗

十和田ホテル

觀湖樓

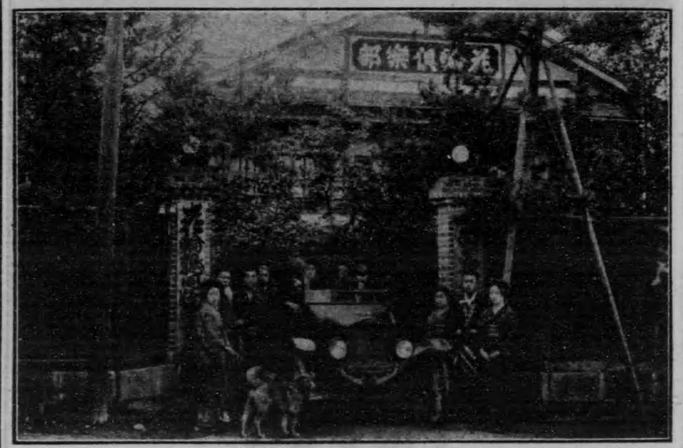
◇秋田顯勝會十和田湖案內所

◇和井內養魚場邸內にて觀覽に最御便宜

◇遊覽船、發動機船、モーターボート和船の設備あり

◇自動車、人力車、乘合馬車申込所十和田名產販賣所

◇寫眞機携帶の御方々の爲めに暗室の設備あり



和洋御料理

花輪倶樂部

電話 五十六番

倶樂部支店

壽亭

電話 六十一番

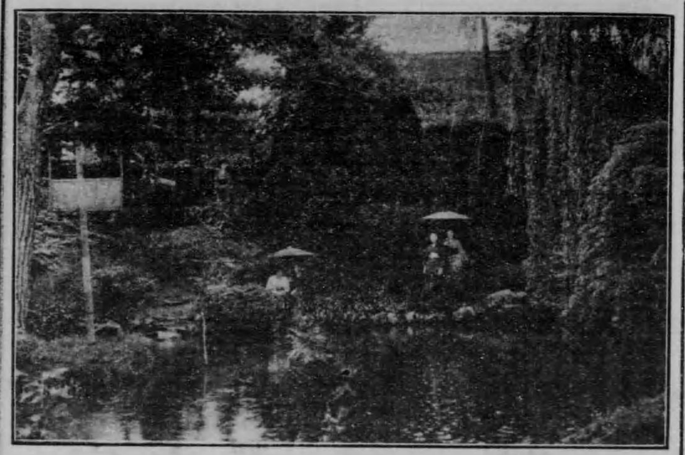
本場
かつの
古代紫絞り

（小ます）

（立枠）

（大ます）

秋田縣花輪町
製造
發賣元
栗山文次郎
振替口座
東京三六九九六番
電話
一六番



割烹鮮新
花輪町仲小路
廣川屋
電話一八番
庭園幽翠

諸官署御定宿
秋田鐵道御指定
秋田縣花輪町
旅館 高瀨恒造
電話二十九番

有限責任
鹿角林檎購買販賣組合

特産 木通蔓細工品 バスケット 其他 各種
製造元 花輪町 大里恒三

特産

まるめろ
水蜜桃
櫻桃
まるめろ蜜
罐詰

サイダー
ラムネ

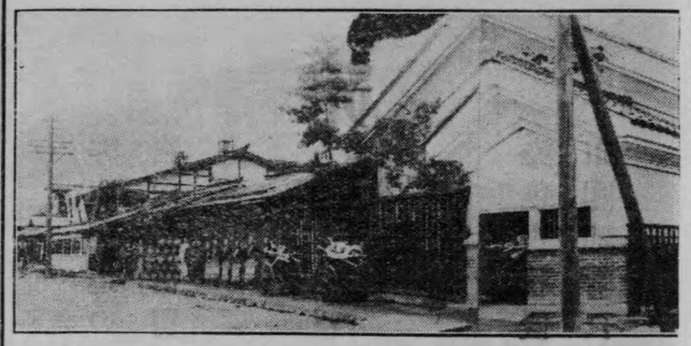
製造販賣元

花輪町

田中傳吉商店

電話十三番

振替 東京三五八八番
仙臺二八一一番



第六回奥羽六縣聯合清酒醬油品評會
壹等賞二點
外四點入賞

登錄商標 金印醬油

秋田縣花輪町
釀造元 淺利佐助

振替東京七五五三
電話二十八番

雜貨卸小賣商 淺利商店雜貨部

弊店製造の紫根染は東京平和博覽會に於て
宮內省御買上の光榮に浴す

元祖 紫根染 小田切健造

花輪町

染色古雅優美を極め褪色の憂なく帶地襦袢
布團地等に嘖々の好評を蒙る

御旅館

花輪町新町

常盤館

電話利用
四十八番

館主 川村禮藏

登録商標 狹布の花正宗
狹布の日の出正宗
花輪町六日町
銘酒 正宗 末廣 醸造元 關善次郎
電話二十三番

於第三回鳴鶉共進會 特等賞受領
鹿角 鳴き鶉元祖 伊藤文太郎
鹿角郡花輪町
種禽 ◇横斑プリマスロック(トムソン直系)
◇白色レグホーン(ヤング直系)

吳服太物
煙草、食鹽
元賣捌所

花輪町六日町

石木田吳服店

電話十五番

△國定教科書取次販賣所
△千代田生命保險相互會社
△國光生命保險相互會社
△日本徵兵保險株式會社
△千代田火災保險株式會社
△日本火災保險株式會社

代理店

■元祖切りたんぽ

即席御料理

花輪町堰向

一二三軒

電話二十五番

■香水風呂の設備あり

第六回奥羽六縣聯合清酒醬油品評會
壹等賞四点受賞

登録商標 十灣正宗

銘酒 剱菱 男山

釀花輪造元町

小田島治右衛門

電話三十一番

資本金 五百萬圓
諸積立金 壹百參拾萬圓

株式會社 秋田銀行

鹿角出張所

花輪出張所 電話三十五番
毛馬内出張所 電話四十番
小坂出張所 電話十九番

製材と販賣

HS

▲賃挽は

低廉
迅速

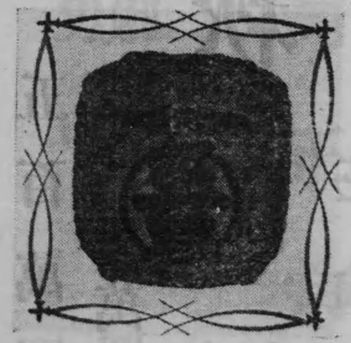
▲販賣は

安値
勉強

花輪製材所

酒銘 松風 松浦

惠比壽
正宗 **釀造元**



小濱屋

鹿角郡花輪町 田村定治 電話十一番

第四回第五回
奥羽六縣清酒醬油品評會
壹等賞受領

銘酒 丸田正宗
千歲

鹿角郡花輪町
醸造元 田村茂助
電話 五十三番

五

秋田縣花輪町大町
石木田小太郎商店
電話十二番
振替口座 東京三三四八番

營業科目

▲火藥部
火藥 銃砲 ダイナマイト カーバイト セメント 度量衡器 官製煙草

▲金物部
鍋釜鑄物 洋鐵釘 大工道具 萬小金物 石灰貝灰 茶器 茶及 塗物類

▲雜貨部
各地陶磁器 硝子器 板硝子 ペンキ塗料 畳表 薄ベリ 萬年筆修繕

▲文具部
文房具 教科書 書籍、雜誌 石鹸、賣藥 和洋紙 活版、石版 各種印刷

特産 柳行李製造販賣

和洋雜貨
書籍雜誌

秋田縣花輪町

工藤治六商店

電話 二十四番

自動車營業

運轉區域

花輪ヨリ

毛馬内驛
大湯溫泉
湯瀨溫泉
十和田湖
小坂鑛山
花輪町下川原

電話利用 六十七番

佐藤喜代治

貴品多數ヲ愛藏ス
乞御來觀

鹿角萬年青万生會

事務所宮川村玉内
岩泉和三郎

蠶種
製造業 關威

秋田縣花輪町
振替口座仙臺八七二番

資本金 七百萬圓
諸積立金 壹百四拾萬圓

株式會社 盛岡銀行

花輪支店
電話 二十一番
大湯出張所

一手特約

上杉製衣

鹿角鐵瓶

秋田縣毛馬內町

馬淵源太郎

十和田湖遊覽御案內

客室增築御披露

秋田縣毛馬內町

電話 三十八番

佐藤旅館

佐藤新八

長

佐藤木材部

銘酒 豐の井 豐正宗 豐の花

秋田縣毛馬內町

豐口甚平本店

電話 十五番

福德生命保險株式會社

豐國火災保險株式會社

代理店

小坂町

和洋酒罐詰內外雜貨

櫻ビール特約販賣店

豐口支店

電話 二十五番

雜貨部 小坂町濁川出張店

雜貨部 不老倉鑛山分店

內國通運E通E株式會社

秋田鐵道線

毛馬內驛前

毛馬內取引店

小坂鐵道線

小坂驛前

小坂取引店

電話 二十四番

書籍、雜誌、文房具
學校用品一式
運動具玩具

小坂町
高橋書店
電話十三番

■十和田湖繪ハカキ
■小坂鑛山繪ハカキ
發賣所

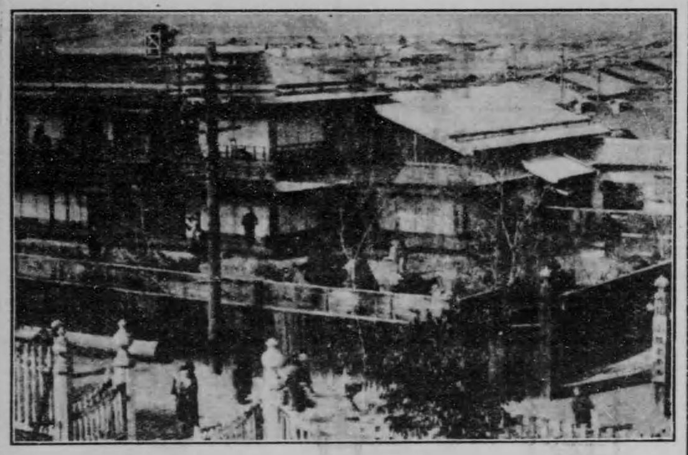
酒銘 猩々正宗
秋田縣毛馬内町
醸造元 大里堅吉
電話二十五番

登録商標 大乃里

即席
和洋
御料理

小坂鑛山永樂町
吉本倶樂部
電話八番

大宴會場廣間アリ



小坂鑛山

小坂ホテル

酒井久太郎

電話 三十九番

本園飼育の優良種禽

聲良　第十一回內國家禽共進會一等賞

黑色ミノルカ　第十一回內國家禽共進會三番最高位

橫斑プリマスロック　第十一回內國家禽共進會一等賞

白色レグホーン　第十回內國家禽共進會一等賞

シヤモ　第十一回家禽共進會二等賞

鳴鶉元祖　黑澤系鳴鶉　其他七面鳥　支那鵞

以上の種禽、種卵雛配布の御需に應す

鹿角郡柴平村

關養禽園

有限責任

秋田縣鹿角郡小坂町

小坂鑛山購買組合

▲マルメロ
▲水蜜桃　罐詰
▲櫻桃

有限責任

宮川信用購買生産販賣組合

秋田縣宮川村

湯瀬温泉

◇大瀧の奔湍を望んで風景絶佳

關旅館

◇石造の浴槽は極めて清潔

◇懇切ニシテ叮嚀

下の湯 成田伊之松

◇貸間内湯アリ

湯瀬温泉

▲春は花夏は涼みに秋紅葉
雪のながめも居ながらにして

内湯貸間
設備完全

上の湯阿部旅館

温泉旅館
兼木炭商

内湯貸間アリ

高見屋

設備完全

齒科一般治療並ニ
技工ノ需ニ應ス

秋田縣鹿角郡大湯溫泉

千葉齒科醫院

院主　千葉茂

■毛馬内驛前ニ車輛常設ス

秋田縣毛馬内町

十和田遊覽自動車組合

電話　二十六番

■十和田湖畔ニハ附屬モーターボート部アリ

大湯溫泉

本館 鳳遊湯かめや

■靈効顯著ナル內湯アリ、久シク御逗留溫浴ノ方ニハ貸間ノ設備モアリマス。

■十和田湖御遊覽ノ御方ニハ親シク御案內申上マス。

別館 十和田湖畔發住 十灣閣

■中山半島ノ奇勝ヲ前方ニ望ミ遊覽船、自動車ノ便ヨク湖畔第一ノ地デアリマス。

■大湯溫泉御通過ノ節ハ必ズ本館ノ鳳遊湯ニ御一浴ノ程御願ヒ申マス。

鹿角製材株式會社

毛馬內驛前

秋田鐵道株式會社

北秋田郡扇田町

自動車

△乘合自動車（毛馬内驛ヲ中心トシテ、花輪、毛馬内、小坂、大湯溫泉ヲ定期循環運轉致シ候）

△貸自動車（晝夜ノ別ナク、時間ノ長短ト、距離ノ遠近ヲ問ハス、敏速ニ發車可致候）

△遊覽自動車（十和田湖遊覽者ノ爲メ貸切リ輸送又ハ乘客四人以上不定期）

毛馬内町鹿角乘合自動車營業組合事務所

△御乘用ノ場合ハ左記最寄停留場ヘ御申込願上候

△花輪町　新町　關善松商店
△仝　六日町（電話四十九番）　佐々木旅館店
△大湯溫泉中町秋田顯勝會十和田案内所　柳澤商店
△小坂町停車場前　石幸支店
△仝　小樽部　高橋書店
△錦木村松ノ木村　木商店

申込所

青森縣上北郡七戸町
活版、石版
製本諸帳簿 ㊀ 盛田活版部
電話 二十八番

月刊
雜誌 青年乃鹿角
發行所 鹿角郡花輪町 青年の鹿角社
電話 十四番

大正十一年十一月十日印刷
大正十一年十一月二十日發行

新鹿角
定價金壹圓五拾錢

編輯兼發行者　秋田縣鹿角郡花輪町　青年乃鹿角社
右代表　大里周藏

印刷所　青森縣上北郡七戸町字七戸二九七
印刷者　盛田源三郎

發行所　秋田縣鹿角郡花輪町　青年乃鹿角社

67
392

終